長岡京市埋蔵文化財調査報告書

第２７集

２００３

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

（1）調査地遠景（南から）

（2）調査地周辺（南西から）

（1）東調査区全景（西から）

（2）西調査区全景（西から）

（１）土坑ＳＸ07・柱穴状遺構Ｐ001（南から）

（２）土坑ＳＫ27（東から）

（３）流路ＳＤ24（北東から）

（1）中世土器

（2）緡銭

（3）車輪石

（4）埴輪

序　　文

長岡京市を含む乙訓地域は、京都盆地の南西部に位置し、交通の要衝となっています。天王山と男山との間の狭部が京都盆地への入り口となっているため、各時代にわたって、この地には北から南から様々な文化が流入してきました。「水陸の便」により当地に都が置かれたのも、この地理的な優位性によるものといえます。

このような乙訓地域の中でも、古代において中心的なところが今里地区であり、ここには郡名を冠する白鳳寺院「乙訓寺」が現在に命脈を保っています。

乙訓寺の南を通る市道今里長法寺線の道幅を広げることとなり、平成８年度から発掘調査が開始されています。

本書は市道今里長法寺線（第２工区）整備事業にかかる、平成14年度発掘調査に関する報告書です。第２工区としては昨年度刊行の第23集に続く２冊目、事業当初からでは６冊目の報告となります。

今回の調査では、おもに中世から近世にかけての遺構が検出されたのと、乙訓寺の南を流れる風呂川によって形成された谷地形の斜面が検出され、谷を覆う堆積層から大量の遺物が出土しました。これらの遺物も時期的には中・近世のものが大半を占めています。今回の成果は北に所在する乙訓寺との関係が想起されますが、調査地の風呂川を挟んだ南に室町時代の城館「今里城跡」が所在することから、寺院と城館を含めた、より広い視野での検討が必要です。また古墳に関する遺物や、古代の銭貨もまとまって出土しており、当地を解明する重要な成果を挙げることができました。

最後になりましたが、現地調査から整理・報告作業に至るまで、ご指導・ご協力いただきました関係各機関、関係者の方々に厚くお礼申しあげますとともに、今後なお一層のご支援を賜りますようお願い申しあげます。

平成１５年１月

財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター

理事長　　芦　田　富　男

凡　　例

1．本書は、長岡京市今里二丁目において、2002（平成14）年２月４日から２月15日まで実施した長岡京跡右京第732次調査、同年６月10日から８月27日まで実施した長岡京跡右京第740次調査の調査報告書である。

2．調査は、長岡京市の今里長法寺線（第２工区）整備事業に伴う発掘調査であり、長岡京市広域道路課の委託を受け、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施したものである。現地調査は、同センター調査係主査中島皆夫が担当した。

3．調査の対象となった遺跡は、右京第732次調査が長岡京跡の右京四条三坊八町および今里遺跡、乙訓寺、右京第740次調査が長岡京跡右京四条三坊九町、今里遺跡である。

4．本調査の正式名称は、長岡京跡右京第732次（７ＡＮＩＳＹ－４地区）調査、長岡京跡右京第740次（７ＡＮＩＮＣ－14地区）である。長岡京跡の調査次数は、右京域での通算調査件数を示す。また、調査地区名は、前半が奈良文化財研究所の分類表示、後半が高橋美久二「長岡京跡昭和51年度発掘調査概要」『京都府概報』（1977年）の旧字名による地区割りと地区内での調査回数を意味する。ＩＳＹは今里小字城山、ＩＮＣは今里小字西ノ口の地区名略表記である。

5．本書で使用した長岡京跡の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第４号（1992年）の復原案に従った。また、地形区分については、基本的に「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一（1991年）によっている。

6．本書では国土座標旧座標系の第Ⅵ系を使用した。

7．本書挿図の土層名で＜　＞を付けて示した記号は、『新版標準土色帳』（1997年版）のＪＩＳ表記法による土色である。

8．本文の（注）に示した長岡京に関係する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第２集（1985年）に従って略記した。

9．右京第740次調査出土の緡銭は、独立行政法人奈良文化財研究所　保存修復科学研究室主任研究官　高妻洋成氏に分析調査を依頼している。

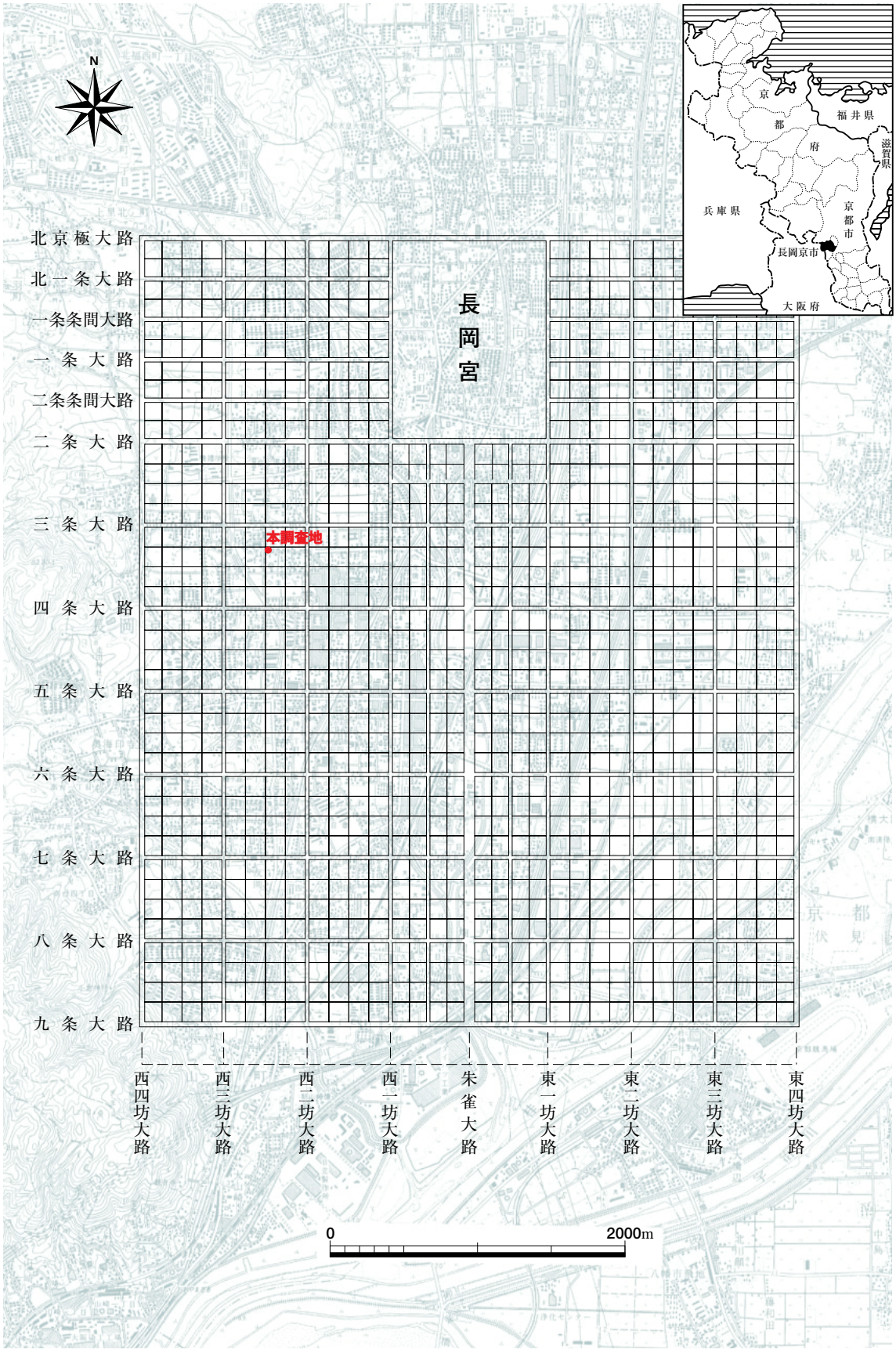
10．遺物写真の巻頭図版四（２）、図版15（２）は杉本和樹氏（西大寺フォト）が撮影した。その他の遺物写真は中島、小田桐淳が撮影を行った。

11．本書は中島が執筆および編集を担当した。

※　本書表紙のカットは右京第740次調査土坑ＳＫ27出土の緡銭

付表―１　本書報告調査一覧表

調査次数	地区名	所　在　地	調　査　期　間	面　積
右京第732次	ＩＳＹ－４	長岡京市今里二丁目101、102、102-2	2002年２月４日～２月15日	188m^2
右京第740次	ＩＮＣ－14	長岡京市今里二丁目232、232－5・6・12・13、235－2、237－2	2002年６月10日～８月27日	748m^2



第１図　長岡京と調査地の位置（１/40000）

本　文　目　次

序　　文 …… i
凡　　例 …… ii
はじめに …… 1
第１章　長岡京跡右京第732次（７ＡＮＩＳＹ－４地区）調査概要 …… 2
1　調査経過 …… 2
2　検出遺構 …… 2
3　出土遺物 …… 3
4　まとめ …… 4
第２章　長岡京跡右京第740次（７ＡＮＩＮＣ－14地区）調査概要 …… 5
1　調査経過 …… 5
2　検出遺構 …… 5
（1）近代以降の遺構 …… 6
（2）近世の遺構 …… 11
（3）中世の遺構 …… 14
（4）長岡京期前後の遺構 …… 19
（5）古墳時代の遺構 …… 20
（6）時期不明の遺構 …… 20
3　出土遺物 …… 25
（1）土器類 …… 25
（2）金属製品 …… 35
（3）石製品 …… 36
4　まとめ …… 42
（1）弥生時代 …… 42
（2）古墳時代 …… 42
（3）長岡京期 …… 48
（4）中世から近世 …… 54

図　版　目　次

長岡京跡右京第732・740次調査

巻頭図版１（１）調査地遠景（南から）

（２）調査地周辺（南西から）

長岡京跡右京第740次調査

巻頭図版２（１）東調査区全景（西から）

（２）西調査区全景（西から）

巻頭図版３（１）土坑ＳＸ07・柱穴状遺構Ｐ001（南から）

（２）土坑ＳＫ27（東から）

（３）流路ＳＤ24（北東から）

巻頭図版４（１）中世土器

（２）出土緡銭

（３）車輪石

（４）埴輪

長岡京跡右京第732・740次調査

図版　１（１）調査地遠景（東から）

（２）調査地周辺（西から）

長岡京跡右京第732次調査

図版　２（１）調査地全景（北東から）

（２）調査地全景（南西から）

長岡京跡右京第740次調査

図版　３（１）西調査区中世から近世全景（西から）

（２）西調査区完掘状況全景（西から）

図版　４（１）東調査区完掘状況近景（東から）

（２）東調査区完掘状況全景（東から）

（３）東調査区完掘状況全景（西から）

図版　５（１）段差ＳＸ02礫出土状況（南から）

（２）土坑ＳＸ13埋土堆積状況（南西から）

（３）土坑ＳＸ07出土遺物と埋土（南から）

（４）土坑ＳＸ07遺物出土状況（南から）

（５）土坑ＳＸ07と柱穴状遺構Ｐ001（南から）

（６）溝ＳＤ17（西から）

図版　6（1）井戸ＳＥ15上半部堆積状況（南から）
（2）井戸ＳＥ15礫出土状況（南から）
（3）土坑ＳＫ06・11・溝ＳＤ19（西から）
（4）土坑ＳＫ06遺物・礫出土状況（北から）
（5）土坑ＳＫ11埋土堆積状況（南西から）
（6）土坑ＳＫ08・10・20（南西から）
図版　7（1）土坑ＳＸ30遺物・礫出土状況（南東から）
（2）流路ＳＤ24護岸・大型土坑（南から）
（3）流路ＳＤ24護岸検出状況（南西から）
図版　8（1）土坑ＳＫ27完掘状況（東から）
（2）土坑ＳＫ27埋土堆積状況（東から）
（3）土坑ＳＫ27緡銭出土状況（南東から）
（4）土坑ＳＫ27緡銭出土状況（南から）
図版　9（1）落ち込みＳＸ26遺物出土状況（東から）
（2）流路ＳＤ24湧水坑（南東から）
図版　10（1）土坑ＳＸ07出土土器
（2）近世の出土土器類
図版　11　流路ＳＤ24盛土出土土器
図版　12（1）流路ＳＤ24茶灰色土出土土器
（2）柱穴Ｐ243出土土器
図版　13（1）土坑ＳＸ30出土土器
（2）土坑ＳＫ20出土土器
（3）中世の軒平瓦
（4）長岡京期～平安時代の出土土器
図版　14（1）弥生時代～古墳時代の出土土器
（2）埴輪
図版　15（1）鉄製品
（2）緡銭
図版　16　中近世の石製品
図版　17（1）車輪石
（2）長岡京期以前の石製品

挿　図　目　次

長岡京跡右京第732・740次調査

第１図　長岡京と調査地の位置（1/40000）…… iii
第２図　発掘調査地位置図（1/5000）…… 1

長岡京跡右京第732次調査

第３図　調査地土層図（1/100）…… 2
第４図　検出遺構図（1/200）…… 3
第５図　調査区と風呂川の位置関係図（1/300）…… 4

長岡京跡右京第740次調査

第６図　調査地土層図（1/200）…… 7・8
第７図　調査区等高線図（1/250）…… 7・8
第８図　中世以降検出遺構図（1/250）…… 9・10
第９図　古代以前検出遺構図（1/250）…… 9・10
第10図　土坑ＳＸ13実測図（1/50）…… 11
第11図　土坑ＳＸ07遺物出土状況（南から）…… 11
第12図　土坑ＳＸ07実測図（1/20）…… 11
第13図　土坑ＳＸ07・柱穴状遺構Ｐ001配置図（1/50）…… 12
第14図　土坑ＳＫ09実測図（1/50）…… 12
第15図　溝ＳＤ17実測図（1/100・1/50）…… 12
第16図　井戸ＳＥ15掘削状況（南から）…… 13
第17図　井戸ＳＥ15実測図（1/50）…… 13
第18図　溝ＳＤ19、土坑ＳＫ06・11実測図（1/100・1/50）…… 14
第19図　土坑ＳＫ06礫出土状況図（1/50）…… 14
第20図　土坑ＳＫ08・20実測図（1/50）…… 15
第21図　土坑ＳＫ10実測図（1/50）…… 15
第22図　土坑ＳＸ30実測図（1/20）…… 16
第23図　土坑ＳＸ30完掘状況（南東から）…… 16
第24図　流路ＳＤ24張り出し部（南西から）…… 17
第25図　流路ＳＤ24張り出し部実測図（1/100）…… 17
第26図　柱穴Ｐ242車輪石出土状況実測図（1/10）…… 18
第27図　土坑ＳＫ27実測図（1/40）…… 19
第28図　緡銭出土状況図（1/2）…… 19
第29図　緡銭出土状況（南東から）…… 19

第30図　柵ＳＡ22実測図（1/50）　…… 20
第31図　中世以降柱穴分布図（1/250）　…… 23・24
第32図　古代以前柱穴分布図（1/250）　…… 23・24
第33図　中近世土器類実測図（1/4）　…… 26
第34図　中世土器実測図－１（1/4）　…… 27
第35図　中世土器実測図－２（1/4）　…… 29
第36図　中世土器実測図－３（1/4）　…… 30
第37図　中世軒平瓦実測図（1/4）　…… 31
第38図　長岡京期から平安時代土器類実測図（1/4）　…… 32
第39図　弥生時代から古墳時代土器実測図（1/4）　…… 33
第40図　埴輪実測図（1/4）　…… 34
第41図　中近世金属製品実測図（1/2・1/4）　…… 35
第42図　近世石製品実測図（1/4・1/8）　…… 37
第43図　中世以前石製品実測図（1/2・1/4）　…… 38
第44図　右京第318次調査出土車輪石実測図（1/2）　…… 42
第45図　調査地周辺出土埴輪資料（1/4）　…… 43
第46図　埴輪出土地点分布図（1/25000）　…… 44
第47図　周辺地域の長岡京条坊と調査（1/2500）　…… 48
第48図　古代銭貨出土地点分布図－１（1/50000）　…… 50
第49図　古代銭貨出土地点分布図－２（1/50000）　…… 50
第50図　今里城周辺の調査（1/1500）　…… 54
第51図　東調査区レーザー三次元測量点群データ　…… 55
第52図　東調査区レーザー三次元測量等高線図　…… 56
第53図　東調査区レーザー三次元測量等高線立体視図　…… 56

付　表　目　次

付表－１　本書掲載調査地一覧表　…… ii

長岡京跡右京第740次調査

付表－２　柱穴一覧表　…… 21・22
付表－３　実測遺物一覧表　…… 39～41
付表－４　埴輪出土地点一覧表　…… 45
付表－５　四条条間北小路・西三坊坊間小路検出地点一覧表　…… 48
付表－６　古代銭貨出土地点一覧表　…… 51

長岡京跡右京第732・740次調査

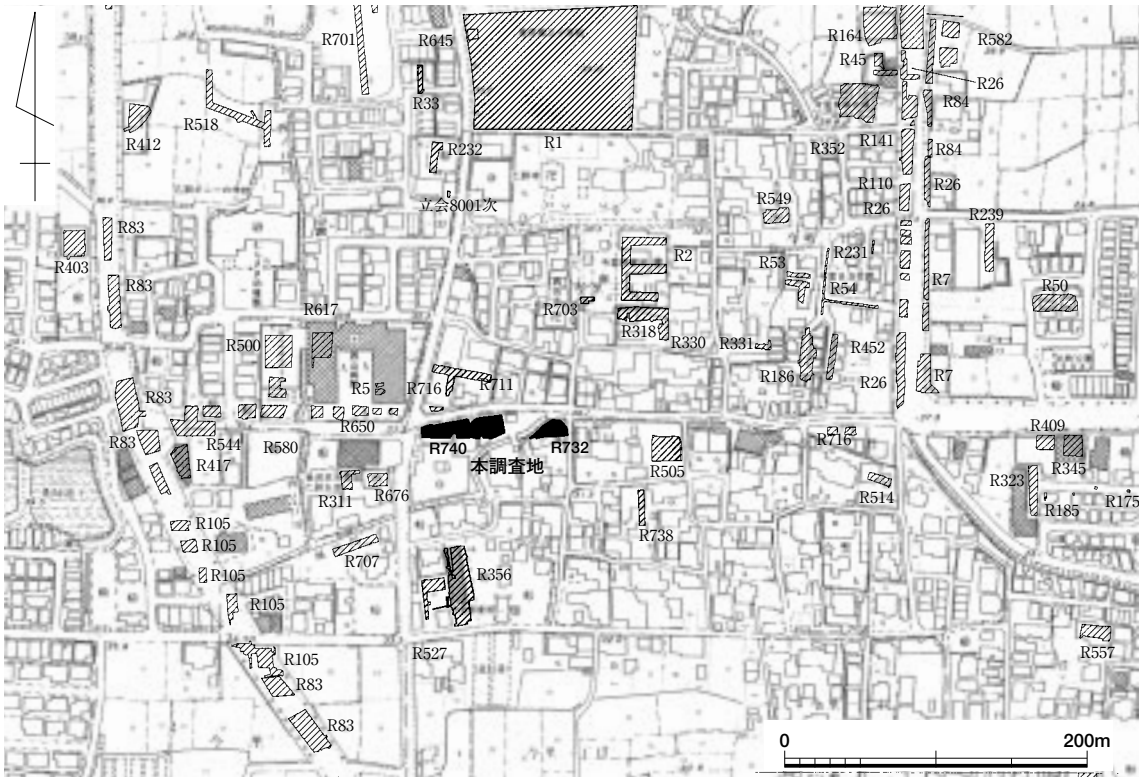
付表－７　報告書抄録　…… 58

はじめに

本調査は長岡京市の今里長法寺線（第２工区）整備事業に伴うもので、調査地は京都府長岡京市今里二丁目101、102、102-2（右京第732次調査)、今里二丁目232、232－5・6・12・13、235－2、237－2（右京第740次調査）に所在する。阪急京都線長岡天神駅の北西約1.2kmにあたる周辺の地形は緩扇状地(注1)に分類されるが、右京第732次調査地と右京第740次調査地の間には扇状地から段丘を貫く風呂川が東流している。風呂川は右京第732次調査地の北で道路下に潜っているが、この流れは戦後改修されたものであり、本来は調査区内の北半部を流れていた。

調査地は長岡京跡および今里遺跡の推定範囲に含まれる。長岡京跡の条坊復原案では右京第732次調査が右京四条三坊八町、右京第740次調査が右京四条三坊九町にあたる。また、両調査区は四条条間北小路が推定できる場所でもある。（西三坊坊間西小路）一方の今里遺跡は旧石器時代から連綿と続く複合遺跡で、調査地は推定範囲内の南西部に位置する。また、調査地の北東200ｍには乙訓寺が所在している。

この道路整備事業に関連して、当センターでは右京第544・580・650・716次調査(2)を実施している。このなかで本調査地に近接して行われたのは、右京第650次調査と右京第716次調査西ノ口地区であり、前者では弥生時代の土坑や長岡京の四条条間北小路北側溝を、後者では古墳時代の竪穴住居と中世の土坑などが確認された。また、周辺地域における調査では、今里城の堀や井戸が検出された右京第356次調査(3)など中世から近世初頭の調査成果が目立つ。



第２図　発掘調査地位置図（1/5000）

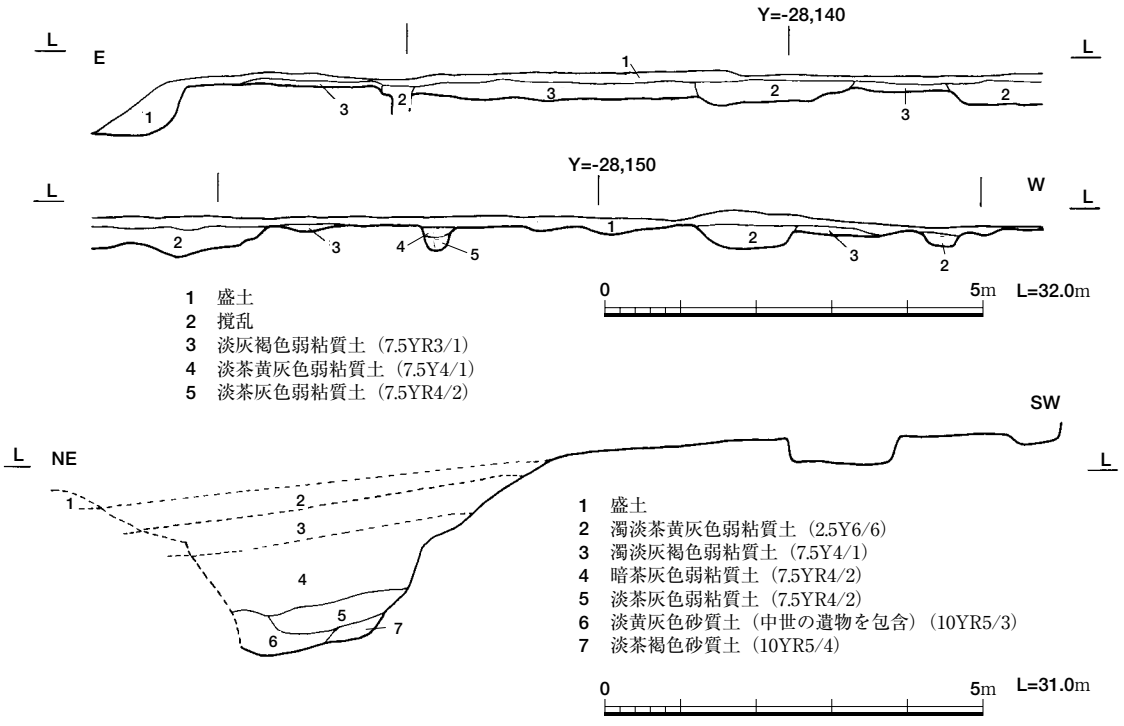
第１章　長岡京跡右京第732次（７ＡＮＩＳＹ－４地区）調査概要
－右京四条三坊八町、今里遺跡、乙訓寺－

１　調査経過

調査対象地は屋敷地であり既存建物などの解体作業を待って、平成14（2002）年２月４日から着手した。調査は重機によって盛土までを除去し、盛土除去後の地山面を人手によって実施した。記録図面の作成、機材の撤去等などが終了したのは２月15日であり、現地調査には延べ12日間を要した。なお、調査面積は188m^{2}であり、調査区の中央は第Ⅵ座標系のＹ＝－28,142、Ｘ＝－118,476に位置する。

２　検出遺構

調査地の地表面は盛土（第３図上　第１層）に覆われており、その高さは標高31.7ｍを測る。調査区の南半部には盛土の下に灰褐色土（第３層）が認められたが、この層は当地が屋敷地になる前の旧表土と考えられる。第１・３層を除去した面が黄褐色系の粘質土（地山）であり、調査区の南東端で標高31.5ｍを測る。地山面には多数の撹乱坑が穿たれており、遺構の分布は希薄であった。一方、調査区の北半部では盛土が厚く堆積しており、その下から後述する流路ＳＤ02の堆積土を確認している。



第３図　調査地土層図（1/100）

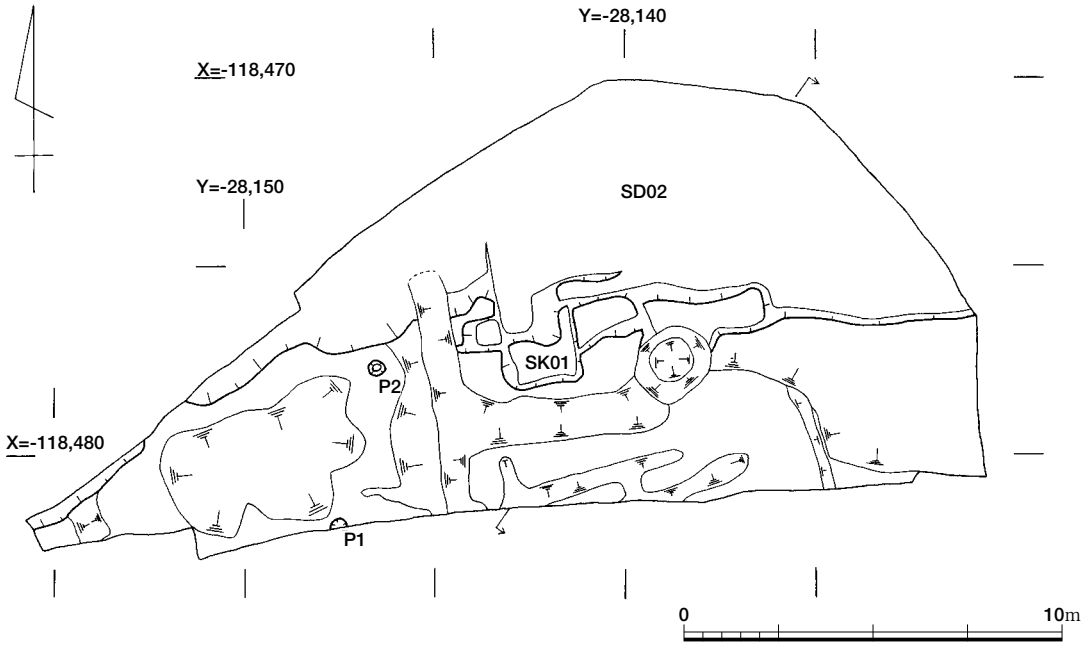
土坑ＳＫ01（第４図）　後述する風呂川旧流路ＳＤ02の埋立前に掘削された土坑である。一辺２ｍ程度の方形を呈するが、北の流路側に向かって開けている。このことから、土坑は流路に関連する施設と考えられるが、具体的な性格は明らかにできなかった。埋土からは桟瓦など近代以降のものが出土しており、明治から昭和の時期が想定される。

風呂川旧流路ＳＤ02（第３・４図）　調査区の北半を占める風呂川の旧流路であり、南肩を東西約25mにわたって確認した。検出した旧流路の南肩は調査区の西端から約９ｍまでは現流路の方向に沿っているが、それより東では東に対して約２°北へ振る方向に変わっている。流路の底部および北岸は、調査区が現在の流路に近接していたため明らかにできなかった。部分的に行った断割調査では、旧流路の底部と考えられる平坦面を、北側の道路面から2.2m下、南側の遺構検出面から2.8m下で検出した。流路の埋土は最終的な埋立土（第３図下　第１～３層）と堆積層（第４～７層）に分けることができる。埋立土には缶や瓶などが含まれており、昭和40年代の河川改修時のものであることが分かる。埋立土より下の堆積層には遺物があまり含まれていないが、僅かに埋土の最下層から中世末の土師器小皿、瓦器椀や羽釜が出土している。

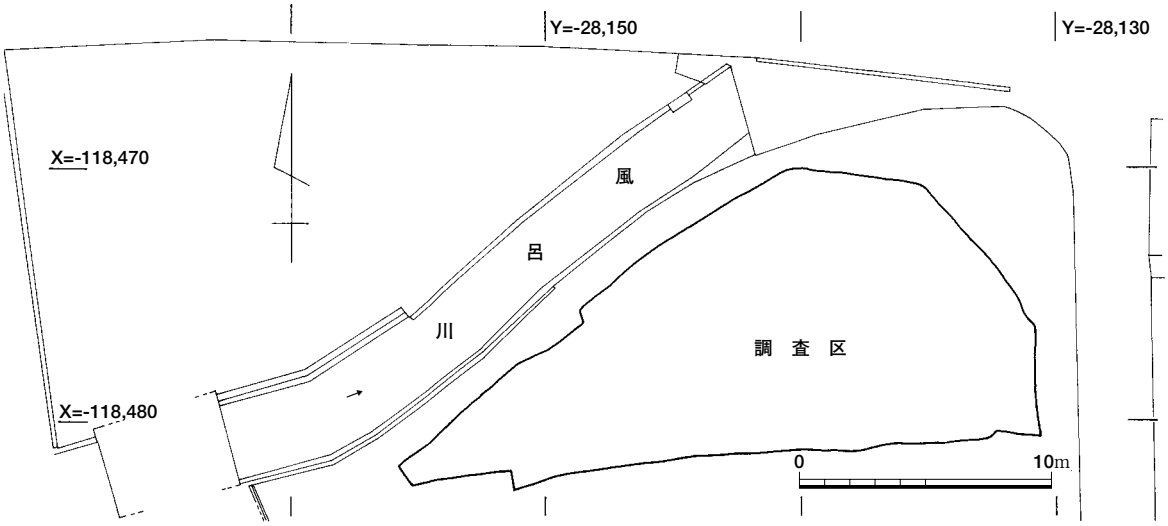
柱穴（第４図）　調査区の西側で柱穴２基を確認した。遺物は柱穴Ｐ１から土師器片が数点出土しただけで、時期などの詳細は不明である。

３　出土遺物

本調査では土師器、須恵器、瓦器、陶磁器などが出土したが、その量は整理箱にして１箱と僅かで、図示し得るものはなかった。出土遺物の大半は近世以降のものであるが、少量ながらも中世の土師器、瓦器、陶磁器、長岡京期と考えられる土師器、須恵器が出土している。長岡京期の遺物は流路ＳＤ02から出土したものである。



第４図　検出遺構図（1/200）



第５図　調査区と風呂川の位置関係図（1/300）

4　まとめ

調査では近代以降の土坑、時期不明の柱穴と風呂川旧流路の状況を確認した。しかし、遺構面の大部分が旧流路と撹乱坑にあたっていたため、充分な成果を収めることができなかった。

調査地は長岡京跡の右京四条三坊八町の南辺部に位置し、調査区の南半部には四条条間北小路が想定される場所であった。この町域は乙訓寺の推定寺域であるが、これまでに行われた右京第２・318・330・703次調査[(4)]では右京第２次調査において長岡京期前後の溝が確認されただけで、長岡京条坊や乙訓寺の寺域の状況は明らかでない。本調査でも長岡京条坊や乙訓寺に関連する遺構、遺物は確認できなかった。

今里城跡は風呂川右岸の段丘部に営まれた戦国時代の城館跡で、西岡地方の国人であった能勢氏の城館と考えられる。城館の中心は当地を含む旧小字「城山」付近に想定され、右京第356次調査では堀、井戸、土坑、木橋などの遺構と木簡、墨書土器を含む多量の遺物が確認されている。当地は風呂川旧流路との関連から、今里城の北限部に相当するものと考えられていた。本調査の風呂川旧流路ＳＤ02は最下層に中世末の遺物が含まれていたが、出土遺物が全体的に少なく今里城との関連を直接検討することはできない。

以上のような遺跡地図に記載されている周知の遺跡のほか、今里地区区有文書資料[(5)]より当地には明治６年まで西芳寺という小規模な寺が存在したことが分かっている。西芳寺は南禅寺の末寺であったが、廃寺届けが出されたときには無檀家、無住職の状況で、堂舎も１棟であったことが分かる。本調査には文献にのみ知られる西芳寺の状況が明らかになることも期待されていたが、関連する遺構はおろか瓦類等の遺物も確認できなかった。

第２章　長岡京跡右京第740次（７ＡＮＩＮＣ－14地区）調査概要

－右京四条三坊九町、今里遺跡－

１　調査経過

調査は重機掘削など排土の仮置き範囲を確保するため、対象地を東西に分割して行った。平成14（2002）年６月10日より西調査区の重機掘削に着手し、遺構掘削や航空測量など全ての作業が終了したのが７月15日であった。７月17日からは西調査区の埋戻しを開始し、並行して東調査区の重機掘削を行った。東調査区における遺構掘削、航空測量など一連の調査作業を行った後、８月27日までに埋戻しおよび撤収作業を終了し旧状に復した。

西調査区は東西約32m、幅７～12mの範囲を設定したが、調査区南辺の中央部にある御神木（モチノキ）の周囲は対象地から除外した。東調査区は西調査区の東端と１m程度の重複を設けて、東西約23m、南北８～13mの範囲を設定した。このように調査では東西調査区に分けて調査を行ったが、本書では基本的に一連のものとして扱う。但し、写真図版などでは東西調査区に分けて表記した。なお、総調査面積は748m^{2}であり、調査区の中央は第Ⅵ座標系のＹ＝－28,199、Ｘ＝－118,477に位置する。

２　検出遺構

現地表は厚さ0.1～1.8mの盛土に覆われており、地表面の標高は調査区の西端で33.6m、中央部で33.1m、東端で32.3mを測り、調査区の東西両端では高さ1.6mの差が認められた。盛土は調査区の南東部が最も厚く、北および西では浅く施されている。また、南東部の盛土は風呂川護岸壁に伴うもので、近代以前は風呂川に向かって傾斜する緩やかな面が形成されていた。調査対象地の中央部には敷地境の段差があり、その東西の敷地はほぼ平坦に造成されているが、本来の地形は西から東へ緩やかに傾斜するものと考えられた。

調査区西辺では盛土直下に地山が現れるが、中央から東側では薮土に似た黄灰色土（第６図第10層）、茶灰色土（第13層）が0.3～0.6mの厚さで堆積している。地山面（遺構検出面）の標高は調査区の西端が33.4m、中央部が32.4m、東端が32mを測り、東西端では1.4m程度の差が生じている。地表面自体も西から東に向かって傾斜しているが、発掘調査によって高低差の主因が調査区を南北に横断する段差によるものであることが判明した。段差は近世以降の耕作に伴って、耕地を平坦化するために施されたと考えられる。本調査区内では３条の段差が確認され、本来の地形が大きな改変を受けた状況を明らかにすることができた（第７図）。本調査の西側で行われた右京第544・580・650次調査でも同様な段差が確認されており、近世以降の耕地化によって広範な改変が行われたことを示している。また、地形の改変によって調査区の東半部ではより上位の地山である黄褐色粘質土が削平され、下位の地山である茶褐色砂礫土が現れており、西半部と同じ遺構面は失われていた。

本調査では段差３条、溝６条、土坑15基、井戸２基、柵、流路、落ち込み、柱穴など、多数の遺構を確認している。時期的には中世から近世のものが過半を占めており、長岡京期など古代以前の遺構は少ない。本文中では検出遺構を５時期（近代以降、近世、中世、長岡京期前後、古墳時代）にまとめて記述しているが、検出遺構図は中世以降（第８図）と古代以前（第９図）に二分して示した。

（１）近代以降の遺構

井戸ＳＥ25（第８図）　調査区東の南辺で確認した素掘り井戸である。井戸掘形は円形で直径1.8m程度を測るが、検出面より約0.5m下で直径1.3mに狭められている。調査では検出面から1.5m下まで掘削したが、掘削範囲が狭く、湧水も激しかったことから完掘を断念している。井戸ＳＥ25の時期は近代以降のものと考えられ、埋土の上部には金属片や瀬戸物が含まれていた。

段差ＳＸ02（第８図）　調査区西半のほぼ中央部で検出した高さ0.3m程度の段差で、近世ないし近代以降の土地の改変に伴うものと考えられる。段差の方位はＮ8°Ｗで真南北に近いが、調査区の北辺付近ではＮ35°Ｗと斜行していた。段差の東側には幅0.6m前後、深さ約0.3mの溝が掘削されており、北半部の溝内には拳大から人頭大の礫が多数混入されていた。なお、段差ＳＸ02は調査区より北側へ更に続いているが、南側はモチノキ樹根の影響で輪郭を確認できなかった。溝の埋土は地山状の土（黄褐色砂質土）を含む灰色土で、陶磁器や桟瓦が含まれている。

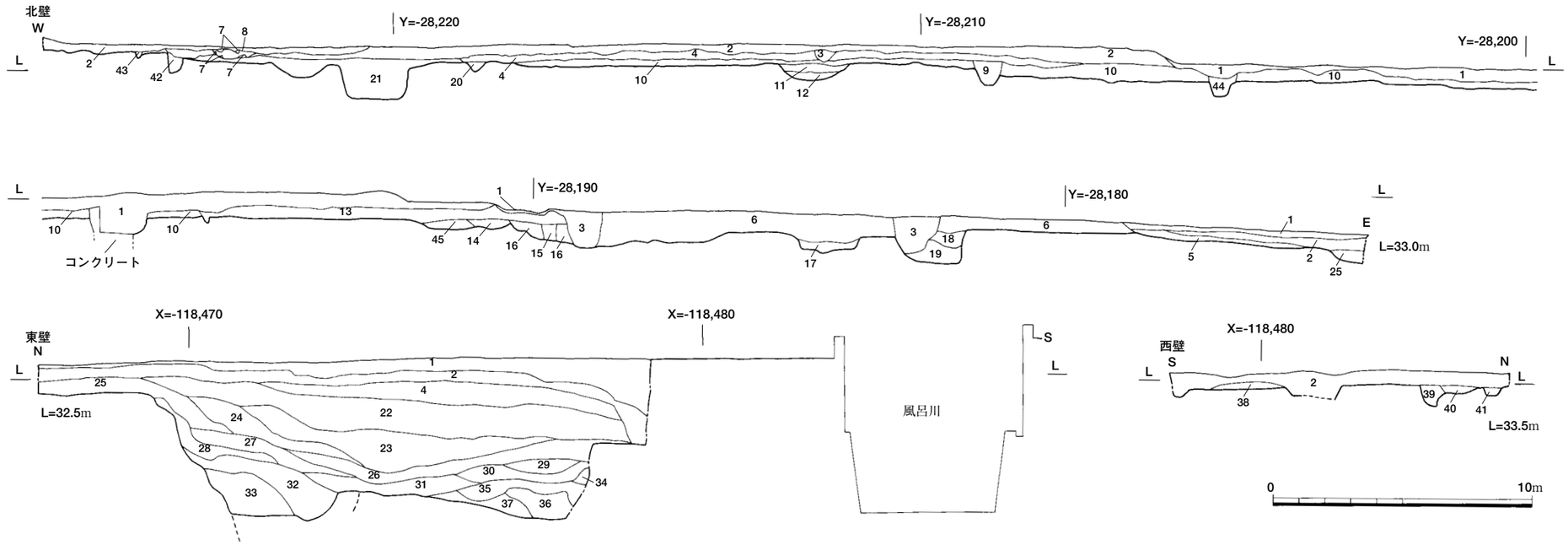
段差ＳＸ28（第８図）　調査区の中央部、段差ＳＸ02より6.5m東で確認した南北方向の段差である。段差ＳＸ28による東西の高低差は0.2mに満たず、段差ＳＸ02のような溝状施設は伴わない。

段差ＳＸ23（第８図）　調査区東半の北東部から南西部にかけて検出した高さ約0.2mの段差で、クランク状に配される段差ＳＸ23のあり方は後述する風呂川の流れに規制された結果と考えられる。しかし、出土遺物などからは段差ＳＸ23と風呂川旧斜面の時期的な関係を確かめることができなかったため、南東部の境界、すなわち段差によって形成された平坦面の規模は明らかでない。段差の方位はＮ９°Ｗと真南北に近く、段差ＳＸ02の方位とほぼ同じであった。段差の立ち上がり付近には中世の遺物を含む茶褐色弱粘質土が認められたが、この堆積層は段差の時期を示すものではなく、耕作地の平坦化などに伴って二次的に形成されたものと考えられる。

溝ＳＤ01（第８図）　調査区西半部で検出した東西を指向する斜行溝で、段差ＳＸ02との接続部から西へ13m分を確認した。方位は溝の西半がＥ15°Ｎであるが、東半はＥ8°Ｎで段差ＳＸ02と直交する。溝は幅0.4～0.9m、深さ0.3m前後を測る。出土遺物には中近世のものが目立つが、段差ＳＸ02と接続し土坑ＳＫ06、溝ＳＤ17を切ることや、黄褐色砂質土を呈する埋土の特徴などから近代以降の耕作に関連する遺構と考えた。

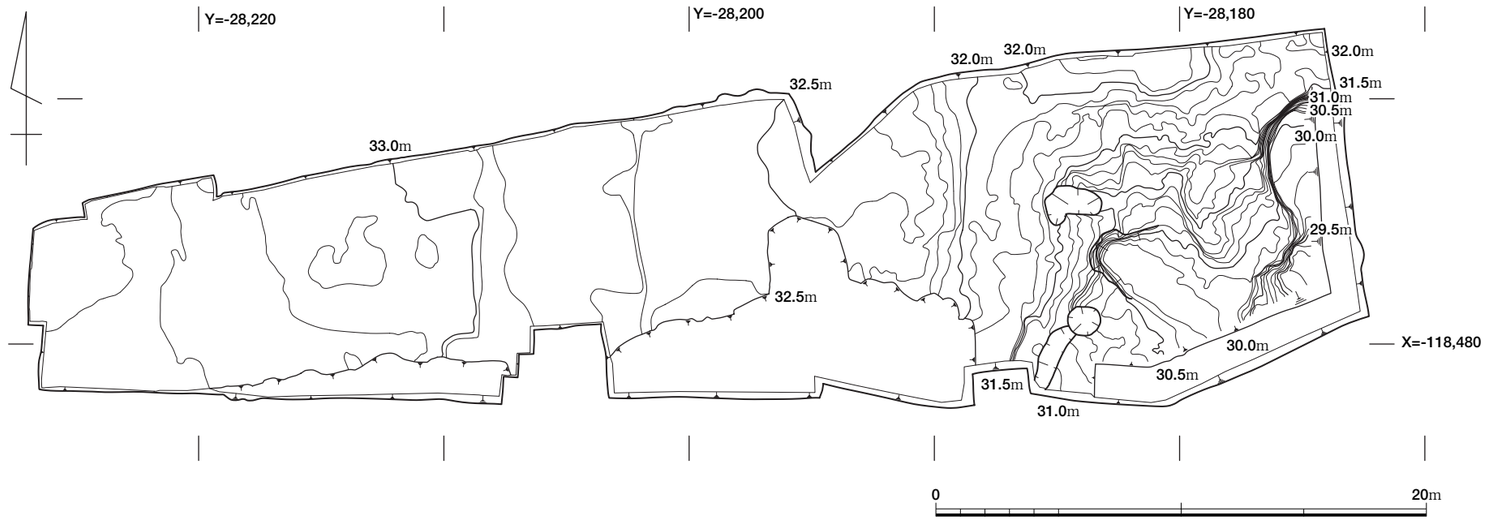
溝ＳＤ03（第８図）　段差ＳＸ02の東側で検出した南北溝で、幅0.6～１m、深さ0.1m前後を測る。溝の方位はＮ8°Ｗであり、段差ＳＸ02とほぼ同じである。溝ＳＤ03からは遺物がほとんど出土していないが、溝の位置や方位から段差ＳＸ02と同時期のものと考えた。

溝ＳＤ05（第８図）　段差ＳＸ02と接続し西側へ延びるが、接続部から西へ約５mの地点で収束する。溝の方位はＥ15°Ｎで、幅0.3～0.7m、深さ0.2m前後を測る。近世遺物が目立つが、段差

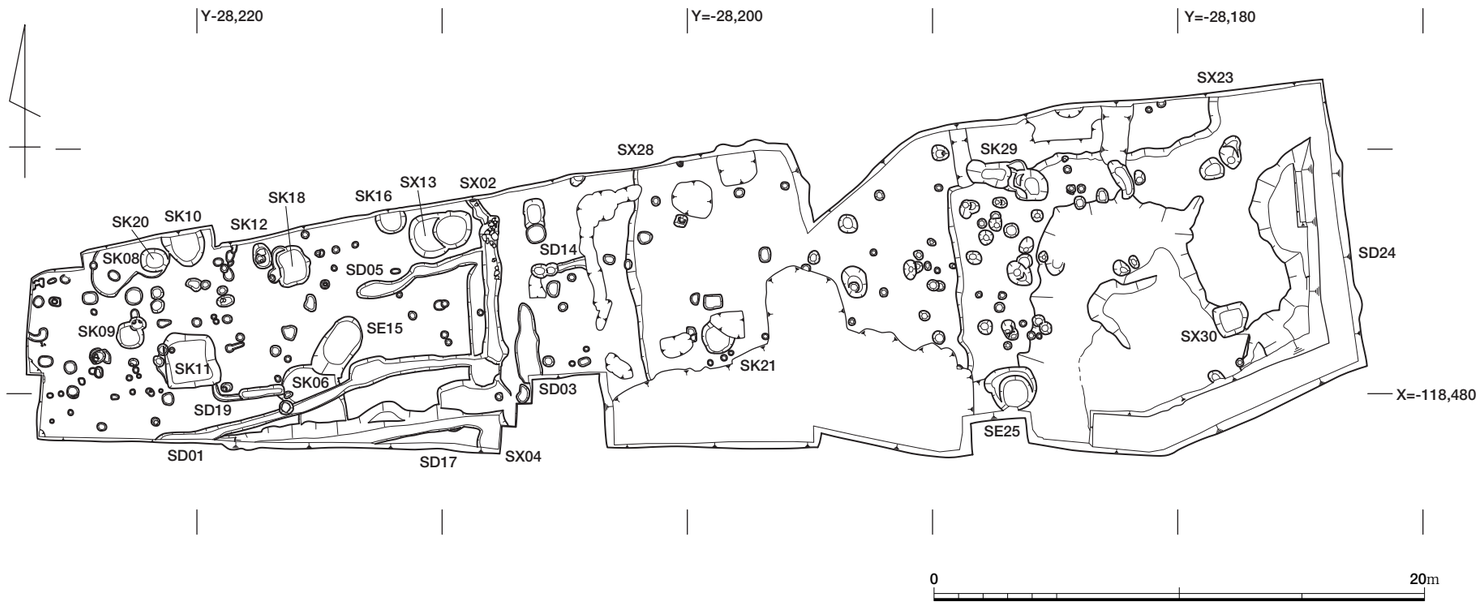


1 盛土Ⅰ
2 盛土Ⅱ
3 撹乱
4 盛土Ⅲ
5 盛土Ⅳ
6 盛土Ⅴ
7 明橙褐色弱粘質土＜2.5YR5/6＞
8 明黄褐色弱粘質土＜10YR7/6＞
9 淡茶灰色弱粘質土＜5YR4/3＞
10 淡黄灰色砂質土＜2.5Y6/1＞
11 暗茶褐色弱粘質土＜7.5YR3/2＞
12 暗黄褐色弱粘質土＜7.5YR6/8＞
13 暗茶灰色弱粘質土＜7.5YR4/3＞
14 淡黄灰色砂質土＜10YR6/4＞
15 淡灰色砂質土＜10YR4/2＞
16 暗灰色砂礫土＜10YR4/2＞
17 暗茶褐色砂質土＜10YR3/1＞
18 淡茶灰色砂礫土＜10YR4/2＞
19 暗灰褐色砂質土＜7.5YR3/1＞
20 暗黄灰色砂質土＜2.5Y6/2＞
21 淡茶灰色弱粘質土＜10YR3/4＞
22 淡茶褐色弱粘質土砂礫土含み＜7.5YR4/2＞
23 暗茶灰褐色弱粘質土＜7.5YR3/3＞
24 暗黄灰褐色弱粘質土砂礫含み＜5YR4/3＞
25 淡茶灰色弱粘質土砂礫含み＜5Y4/3＞
26 暗茶灰褐色弱粘質土砂礫含み＜7.5YR3/2＞
27 暗茶褐色弱粘質土大礫含む＜5YR3/2＞
28 暗茶褐色弱粘質土礫径小＜5YR3/2＞
29 暗茶黄褐色弱粘質土＜7.5YR4/2＞
30 淡茶黄褐色弱粘質土＜7.5YR7/1＞
31 淡茶灰褐色弱粘質土大礫含む＜7.5YR3/2＞
32 淡灰茶褐色弱粘質土大礫含む＜7.5YR3/3＞
33 淡茶褐色砂礫土粘土含む＜7.5YR3/1＞
34 淡灰褐色シルト＜10YR5/1＞
35 暗灰褐色シルト＜7.5YR6/1＞
36 淡灰黄色シルト＜10YR5/2＞
37 淡茶褐色砂礫土＜7.5YR3/4＞
38 淡茶褐色弱粘質土＜7.5YR3/2＞
39 柱穴埋土P110
40 柱穴埋土P112
41 柱穴埋土P150
42 柱穴埋土P83
43 柱穴埋土P181
44 柱穴埋土P24
45 淡灰色砂礫土＜7.5YR4/2＞

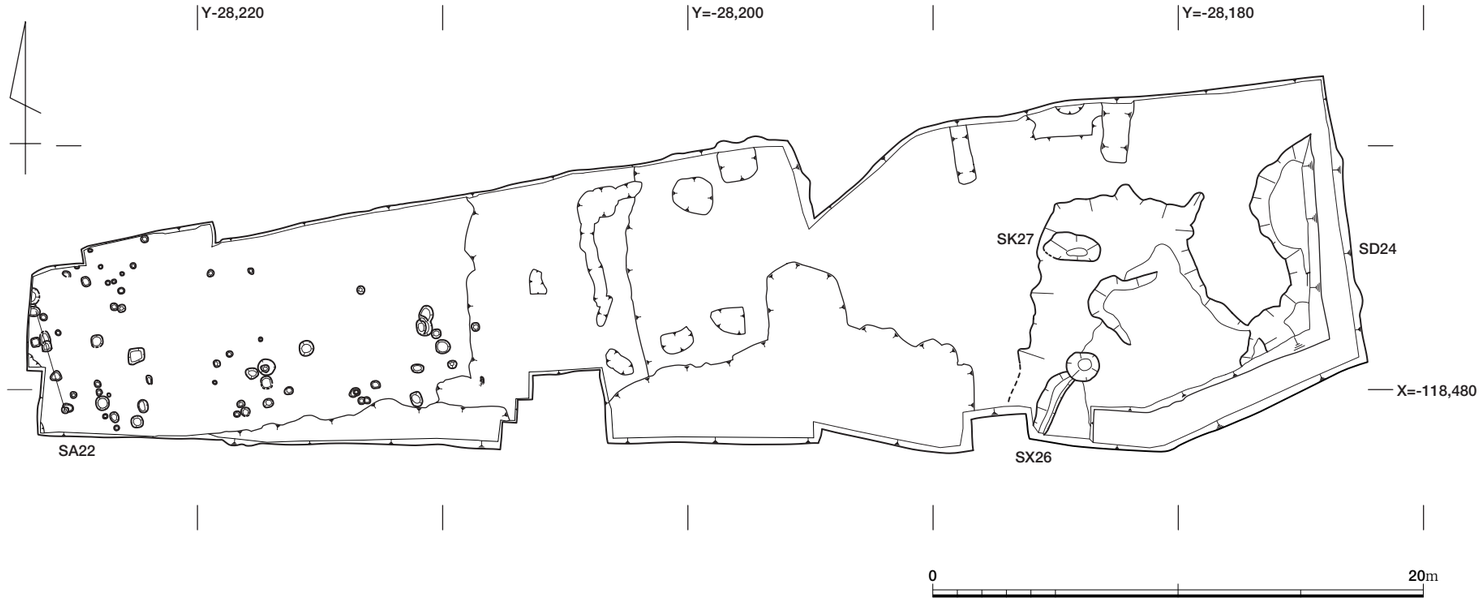
第 6 図　調査地土層図（1/200）



第 7 図　調査区等高線図（1/250）



第 8 図　中世以降検出遺構図（1/250）



第 9 図　古代以前検出遺構図（1/250）

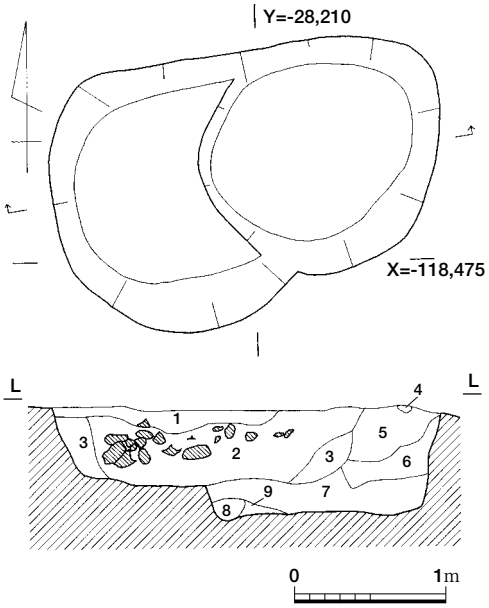
ＳＸ02と接続することから近代以降と考えた。

溝ＳＤ14（第８図）　調査区西半部で検出した東西溝で、両端が撹乱坑によって失われている。近世前後の柱穴と重複しているが、それらより新しい時期のものである。溝の方位は溝ＳＤ05と同様であり、規模は幅約0.3m、深さ約0.2mを測る。

（２）近世の遺構

土坑ＳＸ13（第10図）　段差ＳＸ02の西で検出した土坑で、２時期の掘り直しを確認できる。平面形態は楕円形を呈しており、壁面は平坦な底部から垂直に近く立ち上がる。より新しい段階の西側土坑は長軸約２ｍで深さ0.5m、東側は長軸1.6mで深さ0.7mを測る。壁面付近には部分的ながらも壁材と考えられる黄褐色砂質土の塊が認められた。このことから、土坑には農作業に伴う肥溜めのような機能が想定できる。西側の埋土には多数の礫とともに、近世以降の遺物が含まれていた。

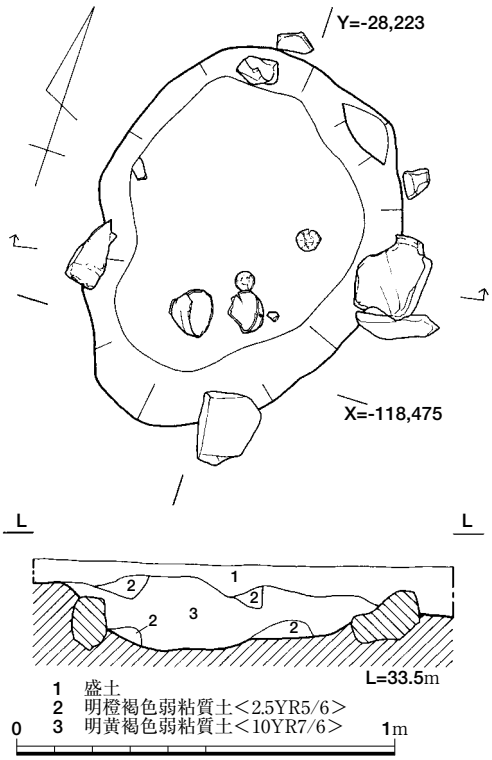
土坑ＳＸ07（第11～13図）　調査区の北西端部、後述する中世の土坑ＳＫ08と重複する位置で確認した。本調査区では最も浅い位置で検出した遺構で、地表面から検出面までの深さは0.1mに満たない。土坑の形態は不整形な楕円形で、南北方向の長軸約１m、短軸0.8m、深さ0.2mを測る。土坑ＳＸ07は非常に特徴的な遺構であり、その要素を列記すれば、埋土に地山状の土（第３層）と部分的に焼土（第２層）が塊として含まれる点、肩部の四方に拳大から人頭大の礫が人為的に



1　淡茶色砂礫土＜10YR5/3＞
2　淡茶灰色砂礫土＜10YR3/3＞
3　淡灰褐色砂礫土＜10YR5/1＞
4　淡黄灰色弱粘質土＜2.5Y5/6＞
5　淡茶褐色砂礫土＜7.5YR3/4＞
6　淡茶褐色砂質土＜7.5YR4/2＞
7　暗黄灰色砂礫土＜2.5Y5/2＞
8　淡黄色砂質土＜2.5Y5/2＞
9　暗茶褐色弱粘質土＜7.5YR3/2＞

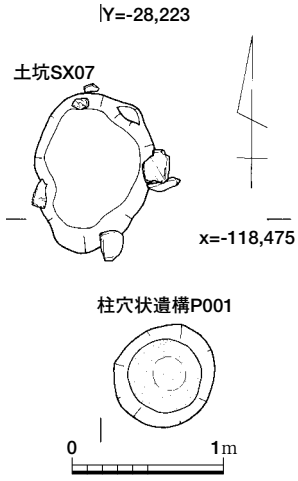
第10図　土坑ＳＸ13実測図（1/50）

第11図　土坑ＳＸ07遺物出土状況（南から）

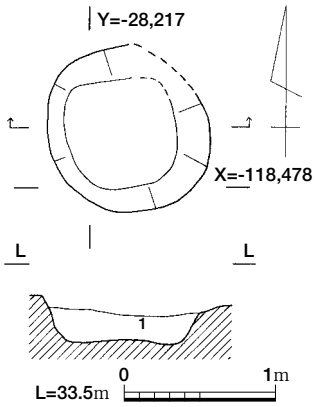


1　盛土
2　明橙褐色弱粘質土＜2.5YR5/6＞
3　明黄褐色弱粘質土＜10YR7/6＞

第12図　土坑ＳＸ07実測図（1/20）



第13図　土坑ＳＸ07・柱穴状遺構Ｐ001配置図（1/50）



1　暗黄灰色弱粘質土＜10YR4/1＞

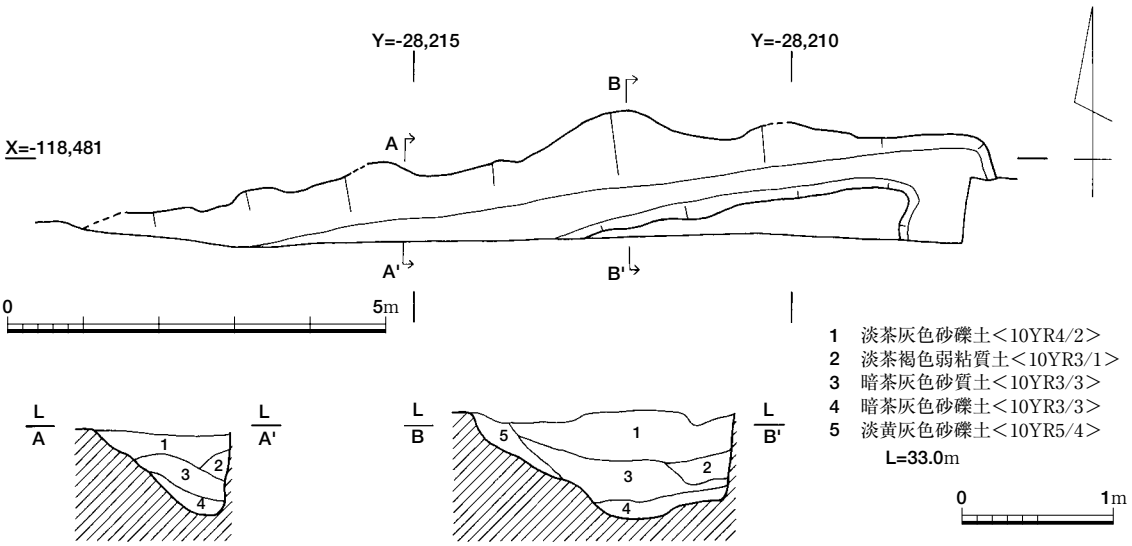
第14図　土坑ＳＫ09実測図（1/50）

配されている点、また、ほぼ完形の天目茶碗２点と土師器小皿２点が納められていた点などを挙げることができる。このような特徴から火葬施設の可能性を考慮して精査を行ったが、骨片や釘類はおろか炭化物片も確認することができなかった。しかし、一般的な柱穴や灰燼処理用の穴とは考えにくく、可能性として葬祭に関連する性格を排除できない。

柱穴状遺構Ｐ001（第13図）　土坑ＳＸ07の約１ｍ南東で検出した柱穴状の遺構である。遺構の平面形状は円形に近く、直径0.7m、深さ0.5ｍを測り、内部には石製五輪塔の「水」部分が正位置で納められていた。柱穴状遺構Ｐ001の五輪塔部材は、単に柱の礎石として使われたのではなく、埋土の類似性や位置関係から土坑ＳＸ07との関わりで埋置されたものと考えられる。

土坑ＳＫ09（第14図）　柱穴状遺構の約１ｍ南で確認した隅円方形を呈する土坑。南北方向の長さ1.1m、深さ約0.3mを測り、黄灰色系の埋土からは陶磁器が少量出土した。

溝ＳＤ17（第15図）　調査区西半南辺の中央部から西へ12mにわたって検出した東西溝である。方位はＥ10°Ｎを測るが、南肩を確認していないため溝の規模は分からない。周辺遺構との重複関係から近世の溝ＳＤ01より古く、後述する土坑ＳＫ06より新しい段階のものであることが分かる。溝の断面形状は逆台形で肩部は底部から直線的に立ち上がり、検出面からの深さは0.4～0.6mを測る。底面は平坦ではなく、溝方向に平行して幅0.5m程度、深さ約0.1mの溝状の窪みが認められた。溝ＳＤ17は未掘部分の東側では確認されなかった。調査区中央部の南



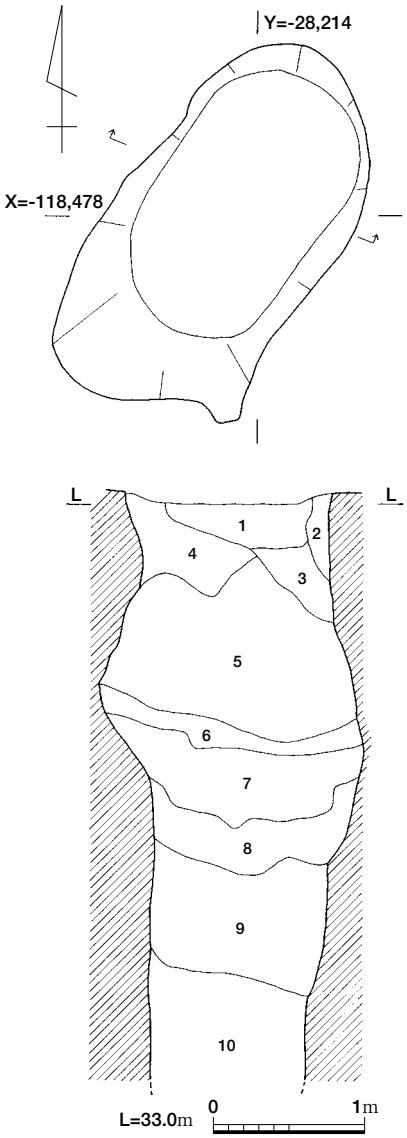
1　淡茶灰色砂礫土＜10YR4/2＞
2　淡茶褐色弱粘質土＜10YR3/1＞
3　暗茶灰色砂質土＜10YR3/3＞
4　暗茶灰色砂礫土＜10YR3/3＞
5　淡黄灰色砂礫土＜10YR5/4＞

第15図　溝ＳＤ17実測図（1/100・1/50）

半には大規模な撹乱坑があるが、撹乱坑の範囲や地山面の高さから調査区の中央部まで溝が及んでいないことは明らかである。底面の浅い溝状の窪みが南方へ直角に折れ曲がることから、溝ＳＤ17は未掘部分付近から南方へ屈曲しているものと推定できる。溝は幅２ｍ以上と比較的大規模であり、その断面形状や直角に折れ曲がる形態から堀などの性格が予想できる。出土遺物は量的に少なかったが、古墳時代、長岡京期前後、中世後半期、近世初頭のものが認められた。溝ＳＤ17は近世初頭に埋没した大規模な溝であり、本調査地の南東に所在する今里城との関連が注目される。

井戸ＳＥ15（第16・17図）　調査区西半のほぼ中央部で、後述する中世の土坑ＳＫ06と重複した状況で検出した。上面の輪郭は北東方向に主軸を置く長軸2.5m、幅1.4mの楕円形であるが、検出面から約２ｍより下では直径１ｍ程度の円形を呈し、その中心位置は北東部に寄っていた。調査では検出面より４ｍ下まで掘削を試みたが、掘削範囲の下半は壁面からの湧水が激しく、その壁面も上半部が大きく抉られていた状況であったため完掘を断念している。井戸ＳＥ15は井戸側が確認されておらず、土層の断面観察においても痕跡が全く認められないため、素掘りであったものと考えられる。井戸ＳＥ15の埋土は第６層までが薮土状を呈する茶灰色土。第７～９層が地山土混じりの黄灰色土で、第９層には人頭大に近い礫が多数含まれていた。また、第９層の礫群には板状の石仏が１点含まれていた。第10層は植物遺体や炭を含む灰褐色粘質土で竹材も含まれていた。この他、井戸埋土からは中近世の土師器、陶磁器、瓦器が多数出土している。

第16図　井戸ＳＥ15掘削状況（南から）

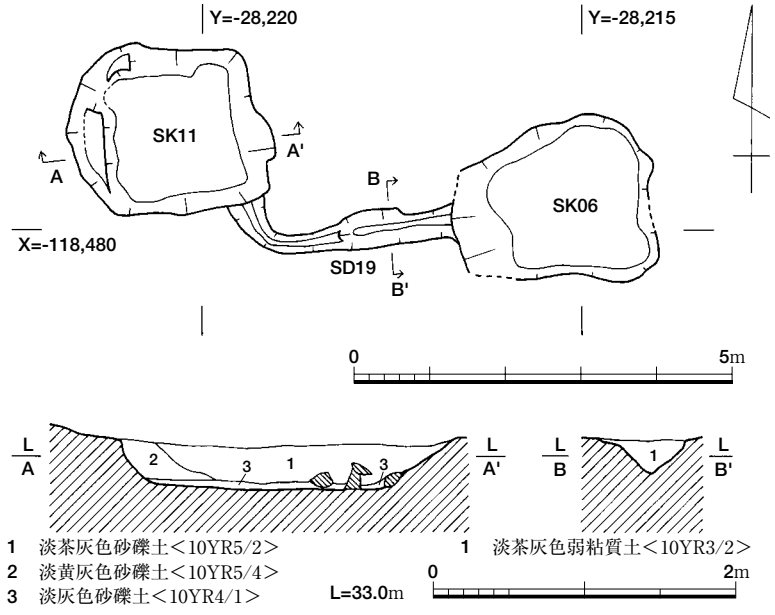


1　淡茶黄色砂礫土＜10YR4/3＞
2　淡茶灰色砂質土＜7.5YR4/2＞
3　暗茶灰色砂礫土＜10YR3/3＞
4　淡茶灰色砂礫土＜10YR3/3＞
5　暗茶灰色砂質土＜10YR3/3＞
6　暗茶灰色砂質土（暗黄灰色砂礫土混り）＜10YR3/3＞
7　暗黄灰色砂質土＜10YR3/3＞
8　淡黄灰色砂礫土＜10YR7/3＞
9　淡黄灰色砂礫土大礫含み＜10YR7/3＞
10　淡灰褐色粘質土＜10YR6/1＞

第17図　井戸ＳＥ15実測図（1/50）

柱穴（第８・31図、付表－２）　近世遺構の埋土との類似性から、埋土の色調が灰色および黄褐色の地山を含むものを近世前後の柱穴と考えた。この時期の柱穴は調査区西辺で数十基を確認したが、建物や柵として把握できるものはない。柱穴底部に根石を据えるものは中世の柱穴に比べて少ない。

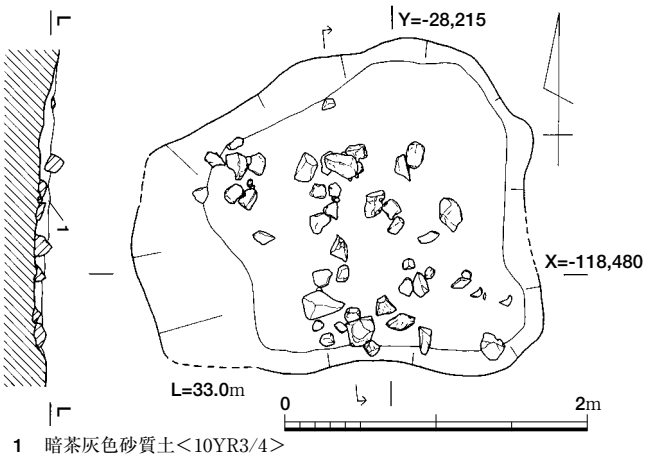
流路ＳＤ24（第６・８図）　調査区の南東部で北西から南東方向へ傾斜する大規模な落ち込みを確認した。落ち込みは肩部が南西から北東を指向しており、現在の風呂川の流れと合致することから、風呂川北岸の旧斜面であるのは明らかである。流路ＳＤ24の斜面には粘質土、砂質土、砂礫土、シルトが複雑に堆積しているが、これらの層序は近世（第６図第22層）、中世（第23～33層）、古代以前（第34～37層）の３つのまとまりに分けることができる。ここでは近世の埋め立て土の状況について記述する。近世の埋土は厚さが最大0.7ｍで、少量ながらも土師器、陶磁器が含まれている。また、同層には中世の土師器、瓦器の完形品を大量に含む部分が認められた。しかし、この部分は掘り込みを伴っておらず、その検出高も近世埋土の範囲内に収まっている。このことから、中世遺物群は搬入土に混じって当地にもたらされたと考えられ、埋土についても斜面の埋め立てに伴って近辺から搬入された可能性を想定できる。



第18図　溝ＳＤ19、土坑ＳＫ06・11実測図（1/100・1/50）

（３）中世の遺構

溝ＳＤ19（第18図）　調査区西部で検出した素掘り溝で、後述する土坑ＳＫ06・11と接続している。また、これらの遺構は方位を揃えているため、一連の性格を有するものと考えられる。溝ＳＤ19は土坑ＳＫ11の南東隅から南方へ延び、0.5ｍ程度の地点で向きを東方へ変える。そして、東へ2.6ｍの位置で土坑ＳＫ06と接続している。溝の幅は土坑ＳＫ11側が0.2ｍ程度であるのに対して、土坑ＳＫ06側は0.4ｍと広い。また、溝底が東側へ緩やかに傾斜することから、溝ＳＤ19は土坑ＳＫ11から土坑ＳＫ06への導水溝とも考えられる。



第19図　土坑ＳＫ06礫出土状況図（1/50）

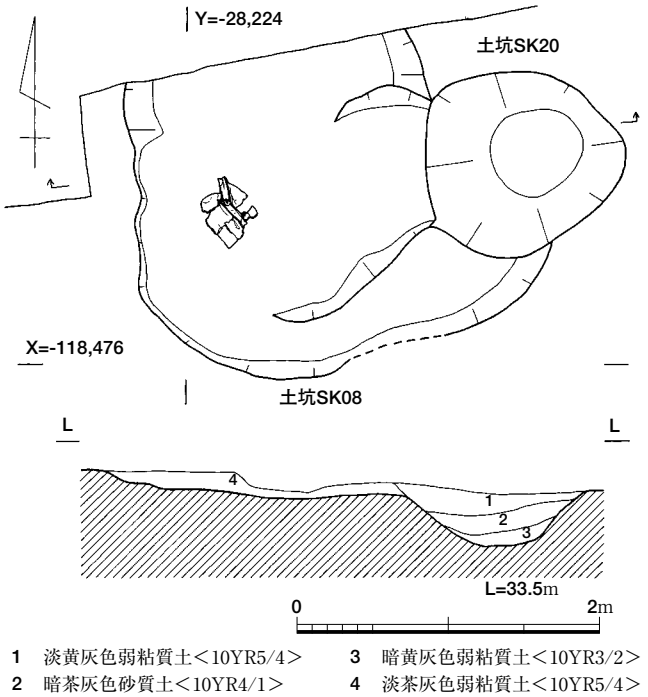
土坑ＳＫ06（第18・19図）　溝ＳＤ19の東側で確認した土坑である。土坑は南側が溝ＳＤ17によって削平されているため全容が明らかでないが、南北３ｍ以上、東西幅2.5ｍの方形に近い輪郭を想定できる。深さ0.2ｍに満たないが、埋土には多数の小礫とともに比較的多くの土師器、須恵器、瓦器が含まれていた。

土坑ＳＫ11（第18図）　溝ＳＤ19の北西に位置する土坑で、その平面形態は正方形に近い。また、断面形態は逆台形で、土坑の底面はほぼ平坦であった。土坑の規模は一辺約２ｍで、深さ0.4ｍを測る。埋土からはほとんど遺物が出土しなかったが、土坑の北半部には人頭大の礫が含まれていた。溝ＳＤ19が土坑ＳＫ11から土坑ＳＫ06への導水施設であれば、一連の遺構は水に関連する性格を想定できる。しかし、吸収性に優れた当地の地盤上では、特別な保水壁を施さない土坑ＳＫ06・11を貯水施設と想定することもまた困難であり、現段階ではこれらの遺構の機能を明らかにできなかった。

土坑ＳＫ08（第20図）　調査区の北西隅で確認した浅く不整形な土坑で、近世の土坑ＳＸ07と重複していた。土坑の規模は東西約2.5ｍ、南北２ｍ以上、深さ0.2ｍ前後を測る。出土遺物は少ないが、埋土からは瓦質の羽釜が出土している。

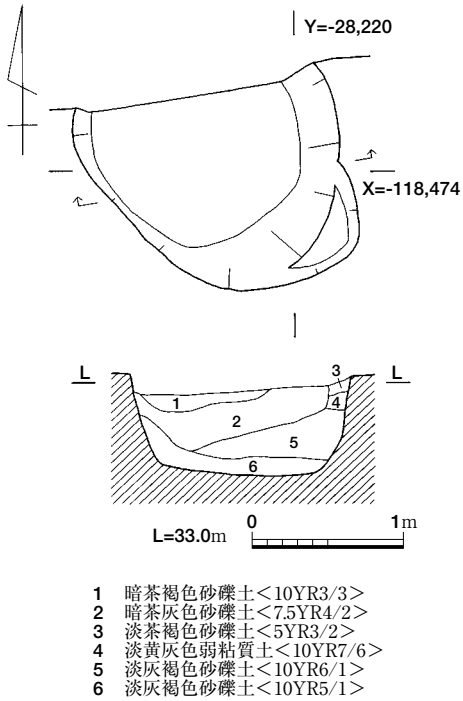
土坑ＳＫ20（第20図）　土坑ＳＫ08の東側で確認した直径１ｍ程度、深さ0.3ｍの円形土坑である。遺構の重複関係から、土坑ＳＫ08より古い時期の遺構であることが分かった。埋土からは少量ながら土師器、須恵器、瓦器が出土している。

土坑ＳＫ10（第21図）　土坑ＳＫ20の東隣りで確認した楕円形の土坑で、南北方向の長軸1.5ｍ以上、深さが0.5ｍを測る。土坑ＳＫ10は僅かに土坑ＳＫ08と重複しており、より古い時期のものであることが分かる。埋土は粘性の弱い茶褐色土であり、少量ながらも土師器、瓦器の細片が含まれていた。



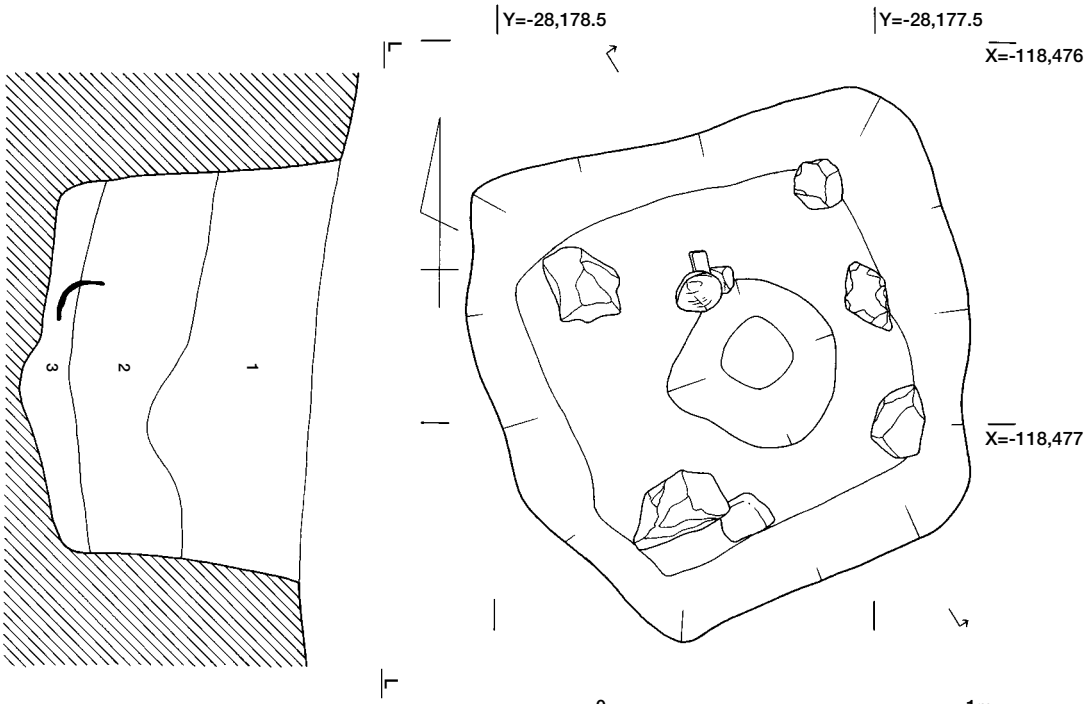
1　淡黄灰色弱粘質土＜10YR5/4＞　　3　暗黄灰色弱粘質土＜10YR3/2＞
2　暗茶灰色砂質土＜10YR4/1＞　　4　淡茶灰色弱粘質土＜10YR5/4＞

第20図　土坑ＳＫ08・20実測図（1/50）



1　暗茶褐色砂礫土＜10YR3/3＞
2　暗茶灰色砂礫土＜7.5YR4/2＞
3　淡茶褐色砂礫土＜5YR3/2＞
4　淡黄灰色弱粘質土＜10YR7/6＞
5　淡灰褐色砂礫土＜10YR6/1＞
6　淡灰褐色砂礫土＜10YR5/1＞

第21図　土坑ＳＫ10実測図（1/50）



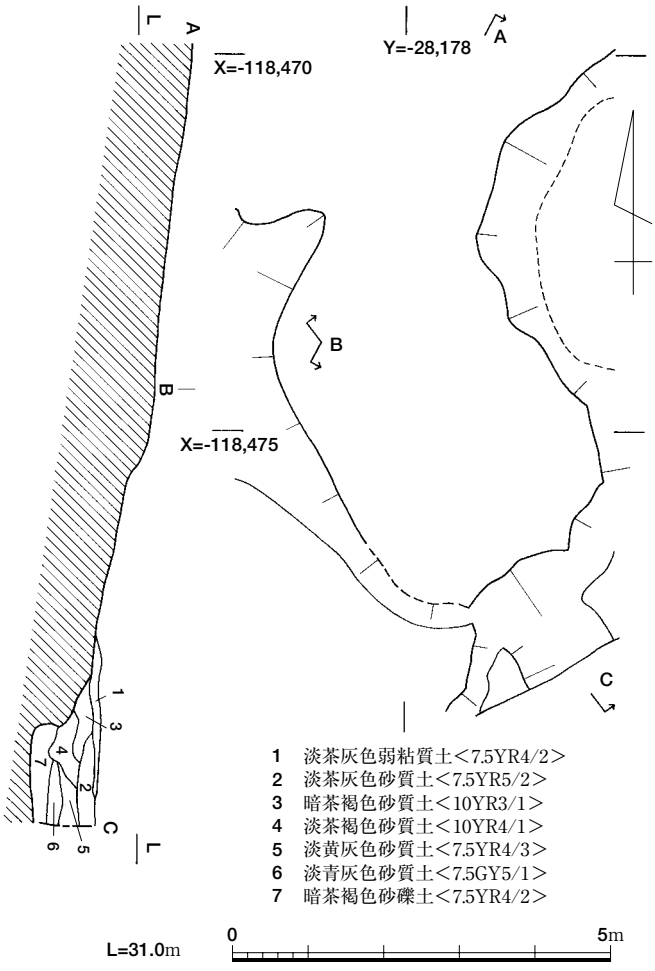
第22図　土坑ＳＸ30実測図（1/20）

第23図　土坑ＳＸ30完掘状況（南東から）

土坑ＳＸ30（第22・23図）　調査区南東部、後述する流路ＳＤ24の張り出し部先端に設けられた土壙墓状の方形施設で、張り出し部が中世の埋め立て土によって覆われる前に穿たれている。土坑の主軸はＮ25°Ｗ、平面形態はほぼ正方形で、その規模は一辺1.3m、深さ0.8mを測る。底部の四隅と東辺には拳大より大きい礫が配されており、礫には台石の役割が想定できる。礫の内側、床面の中央部は円形に浅く窪んでいた。土坑の埋土は第１・２層が地山の砂礫土を含み固く締まっているのに対し、第３層は軟らかな暗灰褐色粘質土であった。遺物は僅かであるが、下層の中央部北寄りから完形の瓦器椀１点が出土している。平面形態や瓦器椀の埋置状況から、土坑ＳＸ30には土壙墓など特殊な性格が想定される。しかし、瓦器椀以外に釘、焼土、炭、人骨は確認されておらず、土坑に付された機能の詳細は明らかでない。

土坑ＳＫ21（第８図）　調査区のほぼ中央で確認した土坑で、平面形態は長軸約１ｍ程度の楕円形と考えられる。埋土からは土師器、瓦器が出土している。

第24図　流路ＳＤ24張り出し部（南西から）



第25図　流路ＳＤ24張り出し部実測図（1/100）

土坑ＳＫ29（第８図）　調査区東半の北辺で検出した不整形な土坑で、東西約3.5m、幅0.9～1.3m、深さ0.4mを測る。土坑埋土からは弥生土器および古墳時代前期の土師器とともに、土師器小皿、瓦器椀など中世の遺物が出土している。

流路ＳＤ24（第６・８・24・25図）

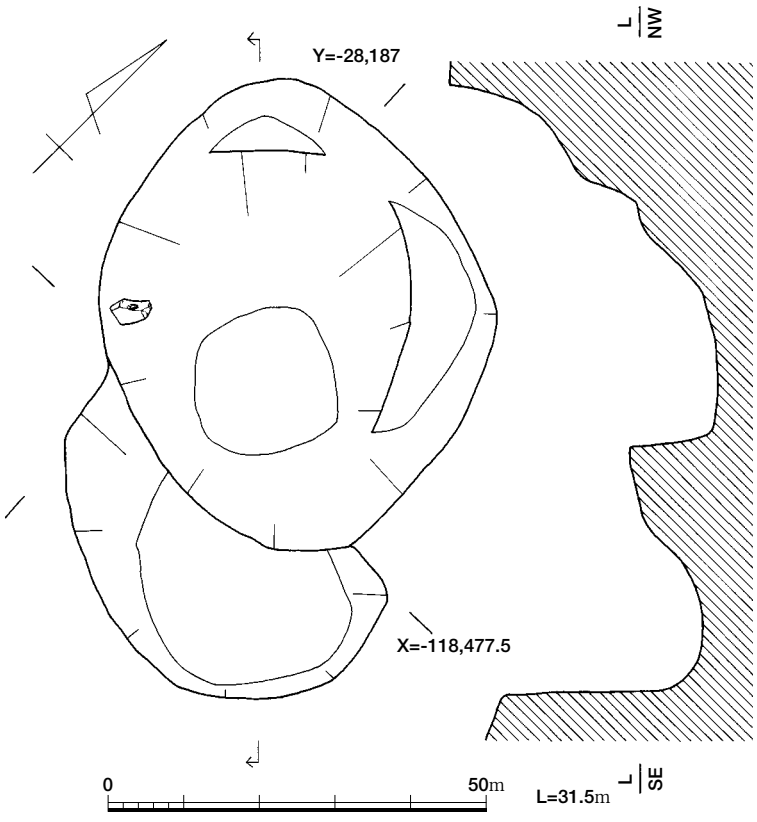
調査区の南東部で確認した自然流路の斜面である。中世の堆積層（第６図第23～33層）は茶褐色系の色調を呈し、調査区内では最大1.2mの厚さを有していた。第24～28層には中世後半、13世紀後半から14世紀代の遺物とともに、拳大から人頭大の角礫が多く含まれていた。また、第25層は流路の肩部を覆っていることから、この時期に流路斜面が埋没し始めたことが分かる。以下、流路ＳＤ24との関連が想定される大型土坑、護岸状施設、張り出し部について記述を行う。

大型土坑（第８図、図版７－２）　調査区東端で確認した大型の土坑である。南北約５m、東西３m以上、深さ2.4m以上を測るが、掘削範囲が狭小で湧水も激しかったため、正確な規模や底部の状況が定かでない。また、流路ＳＤ24との関係では、大型土坑の位置が流路の斜面部分にあたるのか流路の肩より高い位置にあるのかを明らかにできなかった。土坑の埋土からは中世の土師器、瓦器が数多く出土しており、また、人頭大の角礫が多く含まれていた。しかし、礫の出土状況には積み上げられた形跡が認められなかったため、大型土坑の埋め立てに伴うものと考えた。この大型土坑の性格については、風呂川沿いに設けられた湧水坑、後述する張り出し部を形作る掘り込み、ほぼ垂直に立ち上がる壁面の状況から井戸状の遺構などが想定できるが、そのいずれとも判断することができなかった。

護岸状施設（図版７－３）　大型土坑の南側で護岸の基礎と考えられる石列を確認した。石列は北東から南西方向に配されており、さらに調査区外の東方へ続いている。調査区内では長軸0.6m以上の角礫５個を確認しており、いずれも長軸が列方向と直交するように設置されている。５個の角礫はいずれも地山の上に据え置かれており、護岸状施設の最下段であることが分かった。また、石列の南側では流路ＳＤ24の斜面である地山を確認していることから、この施設は前述した大型土坑の埋め立て土の流出を防ぐために設けられたと考えられ、その構築時期を大型土坑の埋没時期に求めることができる。

張り出し部（第24・25図）　流路ＳＤ24の東側では、地山が幅3.5m、長さ約６ｍにわたって削り残された張り出し部が確認された。平面形態はほぼ長方形で、あたかも流路に向かって降りる通路状を呈している。しかし、大型土坑が掘削される前の地形が分からないため、この部分の形状が意図的に形作られたものなのか、西側の流路斜面と大型土坑による見かけ上の形なのか判断できなかった。

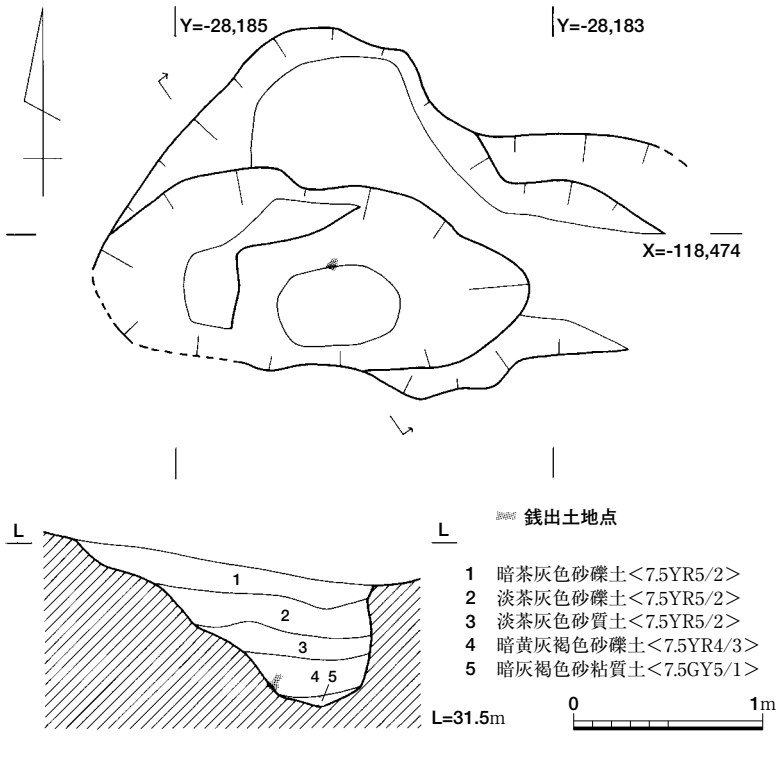
柱穴（第８・31図、付表－２）　当該時期と考えられる柱穴は50数基を確認しており、近世以降、長岡京期以前に比べて非常に分布密度が高い。ほとんどの柱穴埋土は茶褐色を呈しており、前述した流路堆積層や土坑の埋土と共通するものである。柱穴からは土師器、瓦器、陶磁器などの遺物が出土しており、調査区西半では底部に根石と考えられる人頭大の角礫を据えた柱穴が10基以上認められた。



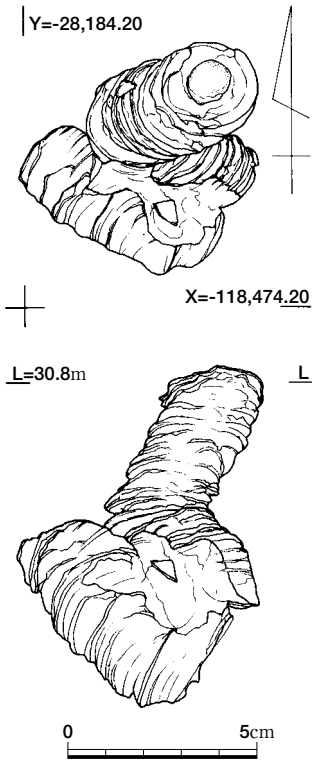
第26図　柱穴Ｐ242車輪石出土状況実測図（1/10）

柱穴Ｐ242（第26図）　近代以降の井戸ＳＥ25の北側で検出した柱穴で、直径0.4m程度、深さ0.3mを測る。柱穴埋土には土師器、瓦器椀が少量含まれており、中世後半期に掘削されたことが分かる。柱穴Ｐ242からは緑色凝灰岩製車輪石の破片が１点出土している。

柱穴Ｐ243　調査区中央部の北西寄りで検出した、直径0.5m程度の柱穴である。平面形態は円形で、深さ0.3m程度を測る。柱穴埋土の上半部には完形の瓦器椀、土師器小皿が多数含まれており、土器埋納坑とも考えられる。



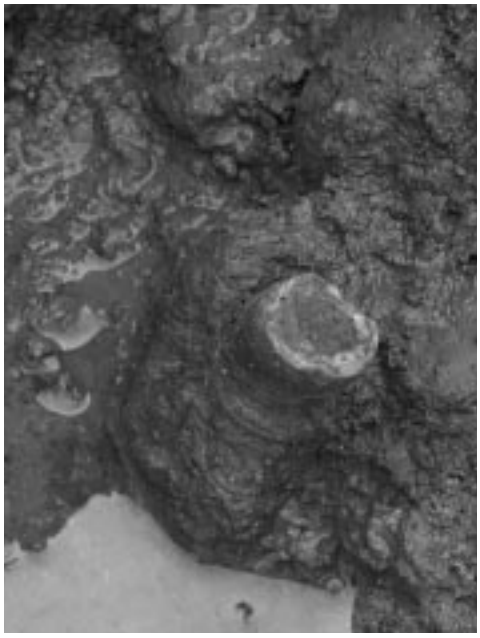
第27図　土坑ＳＫ27実測図（1/40）



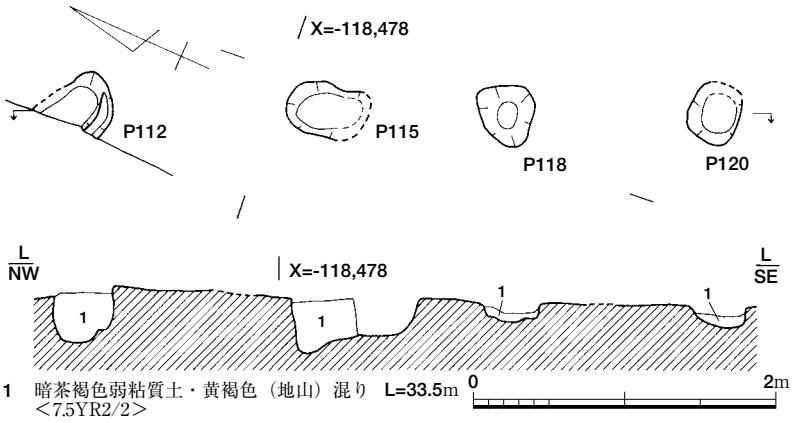
第28図　緡銭出土状況図（1/2）

（４）長岡京期前後の遺構

土坑ＳＫ27（第27～29図）　流路ＳＤ24の北西部で検出した東西方向の不整形な土坑で、流路の肩部と重複している。東西約３m、幅１～1.7m、深さ0.9mを測り、埋土には上半の第１～３層までが茶灰色土、第４層に地山土混じりの黄灰褐色土、最下層に比較的粘性が強い灰褐色土が認められた。このうち、第４層からは緡銭状の銭貨一緡が折れ曲がった状態で出土した。緡銭の平面的な位置は土坑底部の中央北よりである。銭貨の総数は60枚に達するものと見られるが、互いに固着した状況で出土したため実数を明らかにできない。また、萬年通寶１枚・神功開寶１枚を確認できたが、銭種構成はなお不明である。緡銭状の銭貨は壺などの容器に納められておらず、現状では有機物に包まれていた痕跡も確認できない。共伴遺物には古墳時代の須恵器のほかに土師器、須恵器があるが、いずれも小片であり詳細な時期決定を困難にしている。ただし、土師器片の特徴や遺構埋土の性質から平安時代以前の可能性が高い。土坑の輪郭は東側、すなわち流路ＳＤ24側が不明瞭で、底部からは絶えず水が湧き出していた。このような特徴から土坑ＳＫ27に湧水坑としての性格を推測すれば、銭貨の「埋納」には水に関わる祭祀的な意味が想定できる。



第29図　緡銭出土状況（南東から）



第30図　柵ＳＡ22実測図（1/50）

流路ＳＤ24（第６・９図）

調査区の南東部で検出した流路の斜面で、風呂川が形成した旧斜面である。これまで記述したように、旧斜面は中世後半から近世の埋め立てによって平坦化し、戦後、護岸壁の建設により完全にその痕跡が失われていた。流路ＳＤ24の斜面最下層は灰色シルトないし茶褐色砂礫土で、中世以降の埋土とは容易に判別できる。また、出土遺物には弥生土器、古式土師器、埴輪、土師器、須恵器、瓦があり、土師器、須恵器の形態から斜面最下層の形成時期を長岡京期から平安時代前期と考えた。しかし、斜面の上半部には最下層が認められず、土坑ＳＫ27と流路斜面の前後関係は明らかにできなかった。流路ＳＤ24はほぼ南西から北東方向に流れており、現在の風呂川の走行方向と一致する。また、斜面の検出面と調査区内における流路最深部の比高差は2.4ｍで、現在の風呂川河床とほぼ同じ高さであった。

湧水坑（第９図）　流路ＳＤ24の斜面には３箇所（土坑ＳＫ27を加えれば４箇所）の窪みが認められる。いずれも、窪みの輪郭は流路側が不明瞭で、窪みからの湧水が流路に流れ出していた。このような窪みが自然的な湧水作用によって形成されたものか、人為的なものなのかは判然としない。

柵ＳＡ22（第30図）　調査区西辺で確認した柱間は３間の柵である。柵ＳＡ22は建物の一部である可能性も残しているが、西側が調査対象地外であったため確認できなかった。柵ＳＡ22の柱筋は北西から南東方向に振っており、各柱穴は一辺0.4ｍ前後、深さ0.2～0.4ｍを測る。

柱穴（第９・32図・付表－２）　調査区では埋土が黒褐色を呈する柱穴が、調査区西半を中心に20基程度が確認された。これらの柱穴は埋土の特徴から長岡京期前後の時期が考えられるが、各柱穴とも出土遺物が少なく、個別の時期な検討は行えなかった。

（５）古墳時代の遺構

落ち込みＳＸ26（第９図）　流路ＳＤ24の斜面南西部で古墳時代前期の遺物が比較的まとまって出土した。古墳時代遺物群には掘り込みが認められなかったが、遺物を含む黄褐色砂礫土層は斜面最下層の埋土とは異なった色調を呈していた。このことから、調査では確認できなかったが、古墳時代の遺構が流路の西側など近辺に存在していたものと考えられる。出土遺物には古墳時代前期の土師器甕、高杯、埴輪などがある。

（６）時期不明の遺構

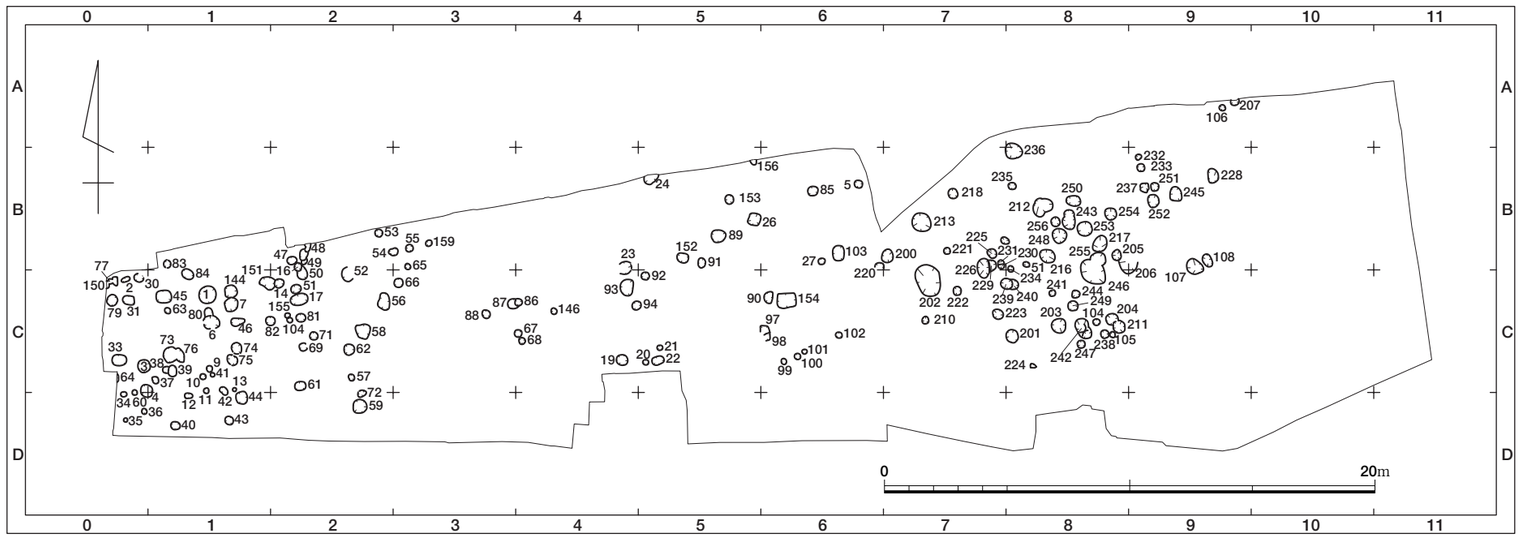
土坑ＳＫ12・16・18（第８図）は他の遺構との重複が認められず出土遺物も無かったため、所属時期が明らかでない。また、落ち込みＳＸ04はモチノキ樹根による撹乱である。

付表－２　柱穴一覧表

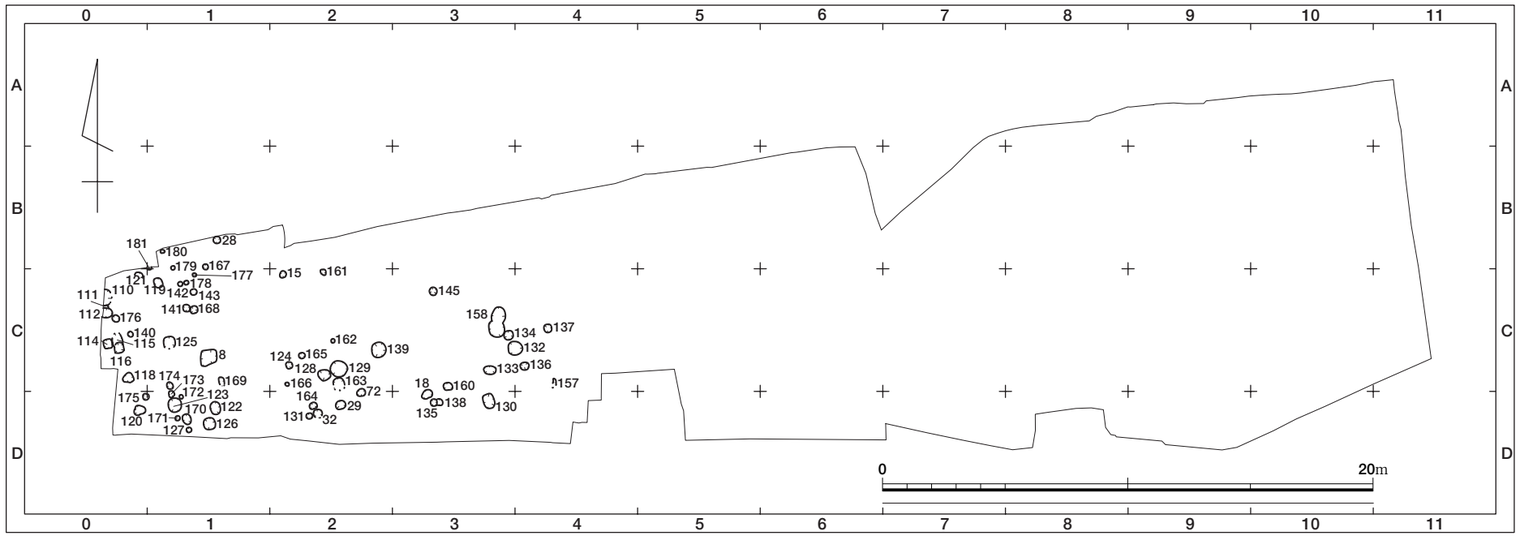
No.	区	規模	底部高	深さ	形状	根石	埋土	No.	区	規模	底部高	深さ	形状	根石	埋土
P001	C-1	74	32.70	0.62	円形	五輪塔	黄褐色	P058	C-2	70	32.98	0.34	方形		茶褐色
P002	C-0	24	33.01	0.32	不整形		黄褐色	P059	D-2	58	32.81	0.51	円形	○	茶褐色
P003	C-0	52	33.00	0.33	円形		灰色	P060	D-0	24	33.03	0.3	円形		茶褐色
P004	C-0	58	33.07	0.26	円形		黄褐色	P061	C-2	46	32.78	0.54	楕円形		茶褐色
P005	B-6	34	32.27	0.2	円形		茶褐色	P062	C-2	48	33.00	0.32	円形		茶褐色
P006	C-1	72	32.71	0.61	不整形		黄褐色	P063	C-1	28	33.08	0.24	円形		茶褐色
P007	C-1	60	32.96	0.36	不整形		灰色	P064	C-0	26	33.19	0.14	円形		茶褐色
P008	C-1	74	33.02	0.3	方形		黒褐色	P065	B-3	26	33.00	0.09	円形		茶褐色
P009	C-1	20	33.02	0.3	不整形	○	黄褐色	P066	C-3	38	32.96	0.13	円形		茶褐色
P010	C-1	24	33.03	0.29	円形		灰色	P067	C-4	30	32.99	0.07	円形		茶褐色
P011	C-1	24	33.07	0.25	円形		灰色	P068	C-4	28	33.00	0.06	円形		茶褐色
P012	D-1	32	33.18	0.14	楕円形		茶褐色	P069	C-2	44	32.95	0.37	楕円形		茶褐色
P013	C-1	20	33.16	0.16	円形		黄褐色	P070	C-2	48	33.06	0.26	不整形		茶褐色
P014	C-2	34	33.07	0.25	楕円形		黄褐色	P071	C-2	34	33.02	0.3	円形		茶褐色
P015	C-2	30	32.94	0.38	楕円形		黒褐色	P072	D-2	34	32.99	0.33	楕円形		茶褐色
P016	B-2	34	32.90	0.42	円形		灰色	P073	C-1	70	32.82	0.5	不整形	○	茶褐色
P017	C-2	68	32.97	0.35	長方形	○	黄褐色	P074	C-1	32	32.83	0.49	不整形		茶褐色
P018	D-3	46	32.94	0.15	不整形		灰色	P075	C-1	46	32.86	0.46	円形		茶褐色
P019	C-4	50	32.56	0.21	楕円形		黄褐色	P076	C-1	54	32.91	0.41	不整形		茶褐色
P020	C-5	24	32.66	0.11	円形		黄褐色	P077	C-0	24	33.31	0.02	不整形		茶褐色
P021	C-5	10	32.46	0.31	円形		黄褐色	P078	C-0	40	33.31	0.02	不整形		茶褐色
P022	C-5	46	32.46	0.31	楕円形		灰色	P079	C-0	62	33.31	0.02	不整形	○	茶褐色
P023	B-4	52	32.56	0.21	不整形		黄褐色	P080	C-1	36	32.98	0.34	不整形		茶褐色
P024	B-5	54	32.44	0.33	不整形		灰色	P081	C-2	38	32.98	0.34	楕円形		茶褐色
P025	C-6	64	32.21	0.26	不整形		灰色	P082	C-1	48	32.98	0.34	楕円形		茶褐色
P026	B-5	56	32.23	0.54	方形		灰色	P083	B-1	30	33.01	0.31	楕円形		茶褐色
P027	B-6	20	32.53	0.07	円形		黄褐色	P084	C-1	46	32.88	0.44	円形		茶褐色
P028	B-1	14	33.12	0.2	円形		黒褐色	P085	B-6	44	32.27	0.2	円形		茶褐色
P029	D-2	42	33.02	0.3	楕円形		黒褐色	P086	C-4	28	32.85	0.24	円形		茶褐色
P030	C-0	40	33.01	0.32	不整形		茶褐色	P087	C-3	40	32.94	0.15	不整形	○	茶褐色
P031	C-0	50	33.13	0.2	方形		茶褐色	P088	C-3	32	32.97	0.12	円形		茶褐色
P032	D-2	26	33.01	0.31	不整形		茶褐色	P089	B-5	64	32.24	0.53	不整形		茶褐色
P033	C-0	62	33.06	0.27	円形		茶褐色	P090	C-6	38	32.38	0.09	円形		茶褐色
P034	D-0	30	33.12	0.21	不整形		茶褐色	P091	B-5	44	32.50	0.27	楕円形		茶褐色
P035	D-0	16	33.25	0.08	円形		茶褐色	P092	C-5	30	32.54	0.23	円形		茶褐色
P036	D-0	20	32.98	0.35	円形		茶褐色	P093	C-4	52	32.33	0.44	円形		茶褐色
P037	C-1	24	33.00	0.32	円形		茶褐色	P094	C-4	40	32.50	0.27	円形		茶褐色
P038	C-1	26	33.00	0.32	不整形		茶褐色	P095	B-4	136	31.70	0.96	長方形		茶褐色
P039	C-1	42	33.00	0.32	不整形	○	茶褐色	P096	B-4	72	32.48	0.29	不整形		茶褐色
P040	D-1	50	33.05	0.27	不整形		茶褐色	P097	C-6	36	32.49	0.02	不整形		茶褐色
P041	C-1	30	33.18	0.14	不整形		茶褐色	P098	C-6	20	32.34	0.13	不整形		茶褐色
P042	C-1	38	33.16	0.16	円形	○	茶褐色	P099	C-6	30	32.29	0.18	円形		茶褐色
P043	D-1	34	33.16	0.16	円形	○	茶褐色	P100	C-6	30	32.28	0.19	不整形		茶褐色
P044	D-1	62	32.75	0.57	方形	○	茶褐色	P101	C-6	24	32.27	0.2	円形		茶褐色
P045	C-1	66	33.00	0.32	不整形		茶褐色	P102	C-6	20	32.43	0.04	不整形		茶褐色
P046	C-1	44	33.12	0.2	不整形		茶褐色	P103	B-6	66	32.22	0.25	楕円形	○	茶褐色
P047	B-2	24	32.99	0.33	円形		茶褐色	P104	C-8	20	31.45	0.4	円形		茶褐色
P048	B-2	42	32.99	0.33	不整形		茶褐色	P105	C-8	16	31.27	0.58	円形		茶褐色
P049	B-2	24	32.99	0.33	不整形		茶褐色	P106	A-9	24	32.03	0.11	円形		茶褐色
P050	C-2	56	33.03	0.29	不整形		茶褐色	P107	B-9	70	30.73	0.27	不整形		茶褐色
P051	B-8	26	32.14	0.33	円形	○	茶褐色	P108	B-9	60	30.70	0.3	楕円形		茶褐色
P052	C-2	62	32.92	0.4	不整形		茶褐色	P110	C-0	52	33.06	0.27	不整形		黒褐色
P053	B-2	32	32.90	0.42	円形		茶褐色	P111	C-0	12	33.05	0.28	不整形		黒褐色
P054	B-3	40	32.84	0.25	楕円形		茶褐色	P112	C-0	40	33.05	0.28	不整形		黒褐色
P055	B-3	32	32.98	0.11	楕円形		茶褐色	P114	C-0	44	33.21	0.12	方形		黒褐色
P056	C-2	82	32.98	0.34	不整形		茶褐色	P115	C-0	22	33.32	0.01	不整形		黒褐色
P057	C-2	38	32.96	0.36	楕円形		茶褐色	P116	C-0	38	32.98	0.35	不整形		黒褐色

No.	区	規模	底部高	深さ	形状	根石	埋土
P118	C-0	44	33.19	0.14	不整形		黒褐色
P119	C-1	40	33.27	0.05	楕円形		黒褐色
P120	D-0	46	32.94	0.39	不整形		黒褐色
P121	C-0	34	33.01	0.32	円形		黒褐色
P122	D-1	50	33.05	0.27	楕円		黒褐色
P123	D-1	58	32.93	0.39	円形	○	黒褐色
P124	C-2	16	32.83	0.49	円形		黒褐色
P125	C-1	36	33.15	0.17	不整形		黒褐色
P126	D-1	50	33.05	0.27	方形		黒褐色
P127	D-1	20	33.07	0.25	円形		黒褐色
P128	C-2	50	33.01	0.31	不整形		黒褐色
P129	C-2	70	32.70	0.62	円形		黒褐色
P130	D-3	60	32.79	0.3	方形		黒褐色
P131	D-2	26	33.01	0.31	楕円形		黒褐色
P132	C-4	58	32.95	0.13	円形		黒褐色
P133	C-3	50	32.86	0.23	楕円形		黒褐色
P134	C-3	38	32.90	0.19	円形		黒褐色
P135	D-3	30	32.82	0.27	円形		黒褐色
P136	C-4	36	32.93	0.12	円形		黒褐色
P137	C-4	34	32.67	0.1	円形		黒褐色
P138	D-3	26	32.99	0.1	円形		黒褐色
P139	C-2	62	32.93	0.39	円形		黒褐色
P140	C-0	22	33.25	0.08	円形		黒褐色
P141	C-1	32	33.05	0.27	円形		黒褐色
P142	C-1	20	33.13	0.19	円形		黒褐色
P143	C-1	28	33.22	0.1	円形		黒褐色
P144	C-1	54	32.95	0.37	円形		茶褐色
P145	C-3	30	32.76	0.33	円形		黒褐色
P146	C-4	26	32.81	0.06	円形		茶褐色
P150	C-0	36	33.31	0.02	不整形		茶褐色
P151	C-1	62	32.73	0.59	不整形		茶褐色
P152	B-5	50	32.61	0.16	楕円形		茶褐色
P153	B-5	38	32.41	0.36	円形		茶褐色
P154	C-6	86	32.35	0.12	方形		茶褐色
P155	C-2	22	33.00	0.32	円形		茶褐色
P157	C-4	30	32.68	0.09	不整形		黒褐色
P158	C-3	120	32.77	0.32	不整形		黒褐色
P159	B-3	26	32.93	0.16	円形		茶褐色
P160	C-3	36	33.02	0.07	楕円形		黒褐色
P161	C-2	26	33.00	0.32	不整形		黒褐色
P162	C-2	16	33.02	0.3	円形		黒褐色
P164	D-2	32	33.02	0.3	楕円形		黒褐色
P165	C-2	26	32.99	0.33	円形		黒褐色
P166	C-2	16	33.03	0.29	楕円形		黒褐色
P167	B-1	22	33.12	0.2	円形		黒褐色
P168	C-1	30	33.18	0.14	円形		黒褐色
P169	C-1	22	33.19	0.13	不整形		黒褐色
P170	D-1	42	33.12	0.2	楕円形		黒褐色
P171	D-1	22	33.05	0.27	円形		黒褐色
P172	D-1	20	33.07	0.25	円形		黒褐色
P173	D-1	28	33.04	0.28	不整形		黒褐色
P174	C-1	32	33.03	0.29	楕円形		黒褐色
P175	D-0	24	32.94	0.39	円形		黒褐色
P176	C-0	30	33.06	0.27	円形		黒褐色
P177	C-1	16	33.13	0.19	円形		黒褐色
P178	C-1	20	33.13	0.19	円形		黒褐色
P179	B-1	16	33.16	0.16	円形		黒褐色
P180	B-1	18	33.22	0.1	楕円形		黒褐色
P181	B-1	18	33.22	0.1	不整形		黒褐色
P200	B-7	56	32.23	0.24	楕円形		茶褐色
P201	C-8	52	32.00	0.09	円形		茶褐色
P202	C-7	130	31.77	0.7	楕円形		茶褐色
P203	C-8	60	31.37	0.48	楕円形		茶褐色
P205	B-8	42	31.35	0.5	円形		茶褐色
P206	B-8	74	31.24	0.61	不整形		茶褐色
P207	A-9	38	32.03	0.11	半円形		茶褐色
P208	A-10	66	31.29	0.45	不整形		茶褐色
P209	A-10	96	30.98	0.7	不整形		茶褐色
P210	C-7	20	32.23	0.24	円形		茶褐色
P211	C-8	50	31.27	0.58	円形		茶褐色
P212	B-8	80	31.30	0.55	不整形		茶褐色
P214	B-9	130	31.20	0.36	不整形		茶褐色
P215	B-9	50	31.14	0.34	不整形		茶褐色
P216	B-8	66	31.55	0.3	楕円形		茶褐色
P217	B-8	70	31.46	0.39	不整形		茶褐色
P218	B-7	40	32.28	0.19	円形		茶褐色
P219	B-10	100	31.22	0.42	不整形		茶褐色
P221	B-7	26	32.23	0.24	円形		茶褐色
P222	C-7	24	32.26	0.21	円形		茶褐色
P223	C-7	46	32.14	0.33	円形		茶褐色
P224	C-8	20	31.90	0.14	不整形		茶褐色
P225	B-7	42	32.29	0.18	楕円形		茶褐色
P226	B-7	80	32.15	0.32	楕円形		茶褐色
P228	B-9	58	31.21	0.43	楕円形		茶褐色
P229	B-7	44	32.27	0.2	不整形		茶褐色
P230	B-7	26	32.25	0.22	不整形		茶褐色
P231	B-7	22	32.25	0.22	不整形		茶褐色
P232	B-9	26	31.75	0.25	円形		茶褐色
P233	B-9	32	31.48	0.35	円形		茶褐色
P234	B-8	24	32.19	0.19	円形		茶褐色
P235	B-8	20	32.20	0.15	円形		茶褐色
P236	B-8	70	32.00	0.25	円形		茶褐色
P237	B-9	38	31.39	0.4	不整形		茶褐色
P238	C-8	32	31.51	0.34	円形		茶褐色
P239	C-7	46	31.88	0.59	円形		茶褐色
P240	C-8	40	32.17	0.07	不整形		茶褐色
P241	C-8	26	31.79	0.06	円形		茶褐色
P242	C-8	56	31.42	0.43	不整形		茶褐色
P243	B-8	80	31.62	0.23	不整形		茶褐色
P245	B-9	58	31.39	0.24	楕円形		茶褐色
P246	C-8	122	31.38	0.47	楕円形		茶褐色
P247	C-8	50	31.45	0.4	不整形		茶褐色
P248	B-8	62	31.65	0.2	円形		茶褐色
P250	B-8	60	31.67	0.18	楕円形		茶褐色
P251	B-9	32	31.33	0.29	円形		茶褐色
P252	B-9	44	31.49	0.17	円形		茶褐色
P253	B-8	62	31.67	0.18	円形		茶褐色
P254	B-8	50	31.55	0.3	円形		茶褐色
P255	B-8	62	31.65	0.2	不整形		茶褐色
P256	B-8	36	31.81	0.04	円形		茶褐色

※規模の単位はcm
　底部高、深さの単位はm



第31図　中世以降柱穴分布図（1/250）



第32図　古代以前柱穴分布図（1/250）

4　出土遺物

本調査では弥生時代から江戸時代まで、土器類、金属製品、石製品など多様な遺物が出土しており、なかには形象埴輪、緡銭など特殊な遺物も含まれている。出土遺物の総量は整理箱にして24箱を数え、流路、井戸など出土遺物の時期幅が長い遺構が見られたため、本文中では土器類、金属製品、石製品に分けて記述を行った。また、土器類では中近世、長岡京期前後、古墳時代、弥生時代に項目を分け、出土遺物の多い遺構についてはまとめて記述している。掲載した遺物の法量や色調は実測遺物一覧表（付表－３）を参照されたい。

（１）土器類

A．中近世

土坑ＳＸ13（第33図１・２）　土坑ＳＸ13には土師器、須恵器、瓦器など多様な遺物が含まれていたが、土坑の時期を示すのは１・２の陶器碗である。いずれも茶色から黄色の釉が施されるもので、17世紀後半から18世紀代の肥前産陶器と考えられる。

土坑ＳＸ07（第33図３～６）　土師器小皿（３・４）と天目茶碗（５・６）の４点が出土した。天目茶碗は国産品と考えられるもので、黄白色を呈する素地が使用されている。土師器小皿は口径６cm弱、器高1.2cm前後を測る。天目茶碗および土師器小皿には16世紀末から17世紀頃の特徴が認められる。

溝ＳＤ17（第33図７～20）　溝ＳＤ17からは古墳時代、長岡京期前後、中世後半期、近世初頭の遺物が出土した。第33図に示したのは溝の最終的な埋め立てに伴う遺物群である。溝の最下層には土師器、瓦器など中世後半期の遺物が含まれていたが、残念ながら図示し得るものはなかった。近世初頭の遺物には土師器の小皿（７～９）、皿（10～13）、紅壺（14）、炮烙（15）がある。陶器では皿（16～19）と碗（20）を示した。16～18の皿は唐津産、19の花弁様の皿は瀬戸美濃産と考えられる。溝ＳＤ17の遺物群は17世紀前半期までのもので、溝ＳＤ17が機能を停止し平坦化される際に溝内へもたらされたと考えられる。

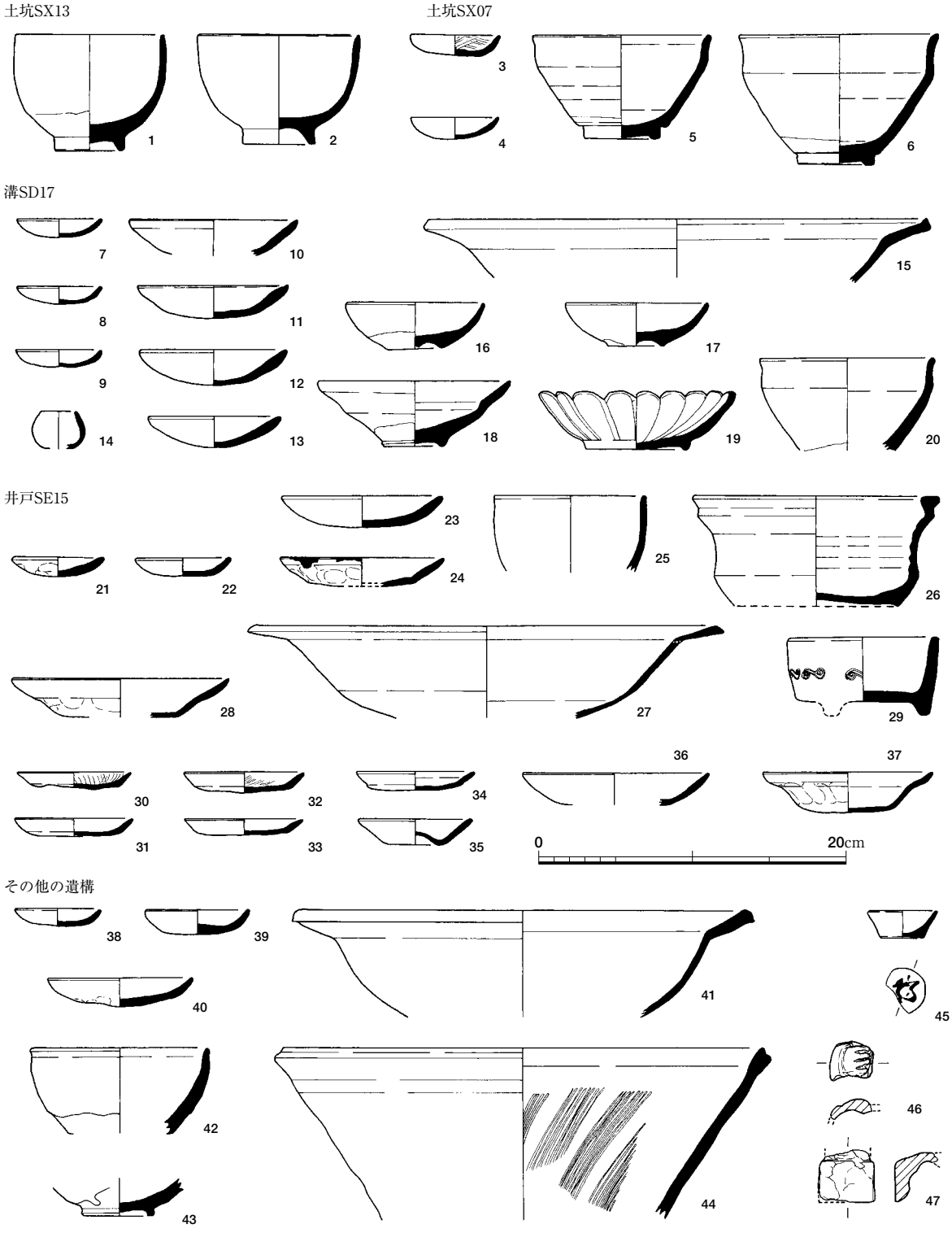
井戸ＳＥ15（第33図21～37）　井戸ＳＥ15にも古墳時代、長岡京期前後と中世から近世に至る幅広い時期の遺物が含まれていた。また、井戸底部まで完掘できなかったため、時期的な検討に課題を残している。しかし、中世後半期以前の遺物がより上層から出土し、掘削範囲の最下層には近世の遺物しか含まれていなかった。

井戸ＳＥ15出土遺物のうち、土師器小皿（21・22）、皿（23・24）、炮烙（27）、陶器碗（25）、鉢（26）が17世紀代、近世前期の遺物であり、21・22・27の法量、形態は土坑ＳＸ07や溝ＳＤ17のものと類似している。

中世後半期の遺物には、土師器小皿（30～35）、皿（28・36・37）、瓦器三足鉢（29）がある。土師器小皿（30～34）は口径1.1～1.4cm、器高1.1cm前後を測る。35の小皿は底部内面の中央部を盛り上げる形態のもので、口径7.3～7.8cm、器高1.7cmを測る。37の皿は口縁部外面に強い屈曲を施す。29の瓦器三足鉢は小型火鉢と推測されるもので、口縁部外面には蕨手状の模様が施されてい

た。これら中世後半期の遺物は14～16世紀までの時期幅が想定できる。

その他の遺構出土遺物（第33図38～47）　段差、溝、土坑、柱穴から出土した近世遺物の主なものを示した。土師器小皿（38・39）、皿（40）、炮烙（41）、陶器碗（42）、皿（43）、擂鉢（44）、小鉢（45）、伏見人形（46・47）がある。このうち43は唐津産、44は丹波産と考えられる。また、

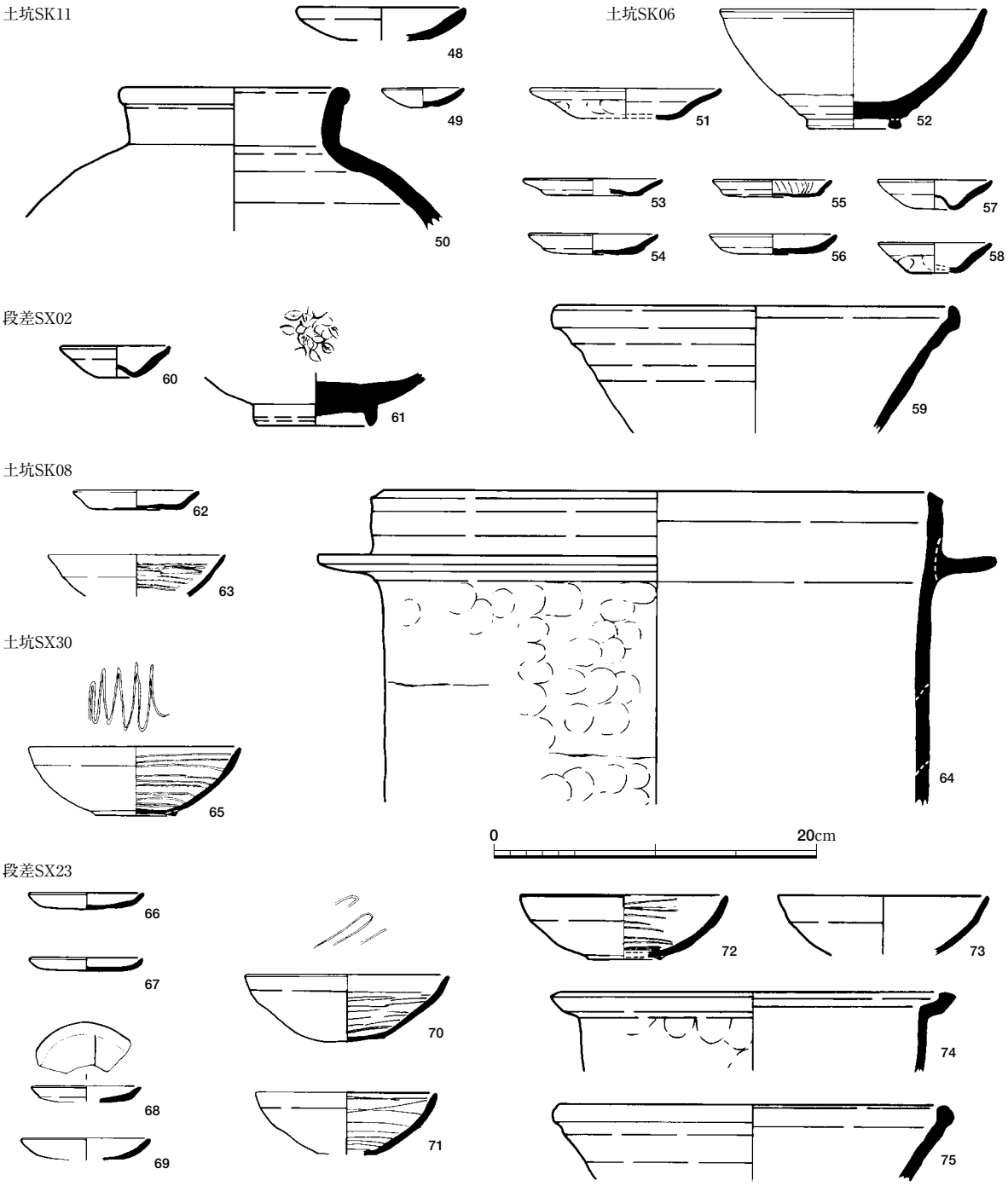


第33図　中近世土器類実測図（1/4）

45の小鉢は内面に紅と考えられる朱彩が残され、底部外面には判読できなかったが墨書が認められた。伏見人形は七福神（46）および台座（47）である。

土坑ＳＫ11（第34図48～50）　土坑ＳＫ11からは土師器小皿（49）、皿（48）、陶器壺（50）が出土した。土師器の特徴から16～17世紀の遺物と考えられる。

土坑ＳＫ06（第34図51～59）　土師器皿（51）と陶器碗（52）は15世紀後半から16世紀のものである。52の陶器碗は瀬戸産と考えられる。土師器小皿（53～58）、須恵器擂鉢（59）には14～15世紀初頭の時期を想定した。53～56は口径7.4～8.6cm、器高１cm前後を測る。また、57・58は口縁部



第34図　中世土器実測図－１（1/4）

の立ち上がりがやや強いが、井戸ＳＥ15から出土した37と形態的に類似する。59は口縁部外面にロクロナデの痕跡を明瞭に残すもので、口縁端部は玉縁状を呈し上方へ立ち上がっている。

段差ＳＸ02（第34図60・61）　段差ＳＸ02に伴って出土した遺物には近代、近世のものが多いが、図示し得たのは土師器小皿（60）、青磁碗（61）に限られた。60は井戸ＳＥ15の37、土坑ＳＫ06の57・58と同様な形態を示しており、15世紀前後のものと考えられる。61は16世紀代の遺物で、底部内面には木の葉様の陰刻が施されていた。

土坑ＳＫ08（第34図62～64）　土坑ＳＫ08の出土遺物は少なく、土師器小皿（62）、瓦器椀（63）、羽釜（64）のほか、土師器、瓦器の細片が出土しただけであった。62は口径7.8cm、器高1.2cmを測るもので、63の瓦器椀とともに14世紀までの時期を想定できる。64は口径67cm、鍔の突出が約４cmを測る大型の瓦器羽釜であり、15世紀代の遺物と考えられる。

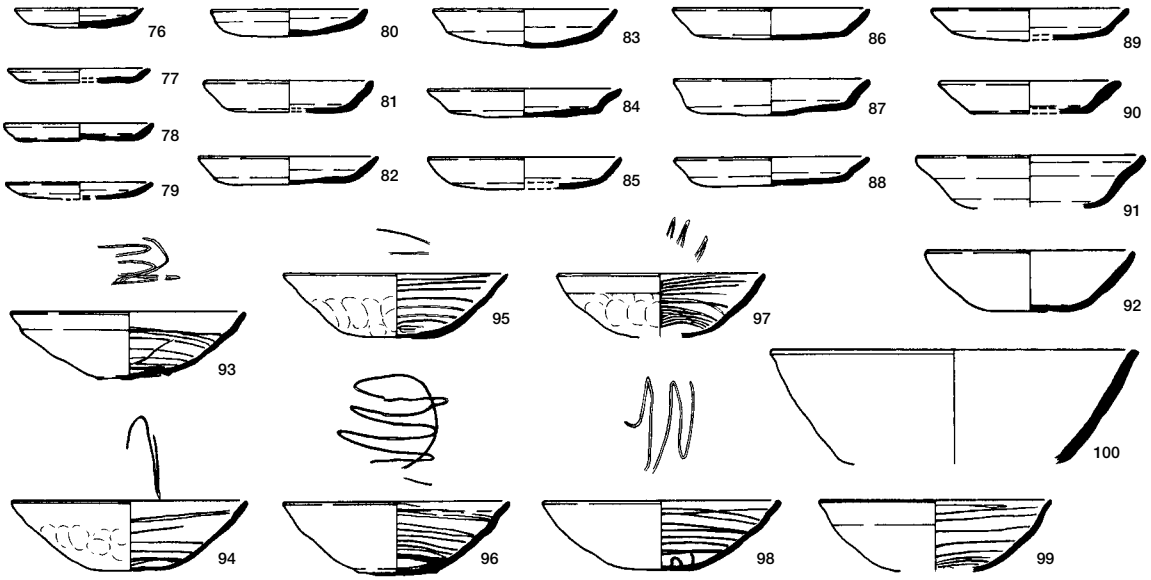
土坑ＳＸ30（第34図65）　土坑ＳＸ30の出土遺物は瓦器椀（65）１点に限られていた。65は完全な形を保っており、口径13.1cm、器高4.3cmで、底部外面には高台が貼り付けられている。65は13世紀末から14世紀の時期が想定できる。

段差ＳＸ23（第34図66～75）　図示した遺物は段差ＳＸ23の立ち上がり部からまとまって出土したもので、段差ＳＸ02と同様に近代、近世の遺物も僅かながら含まれていた。出土遺物には土師器小皿（66～69）、瓦器椀（70～73）、鍋（74）、須恵器擂鉢（75）などがある。66～69は口径6.8～８cm、器高1.2cm前後を測り、68の底部内面には線刻が認められた。瓦器椀は口径13cmまでのもので、土坑ＳＸ30の65に比べてやや小振りであり、底部の高台も不明瞭なものが多い。これらの出土遺物は14世紀代の時期が想定され、本来、流路斜面の堆積層や柱穴、土坑埋土に含まれていたものと考えられる。

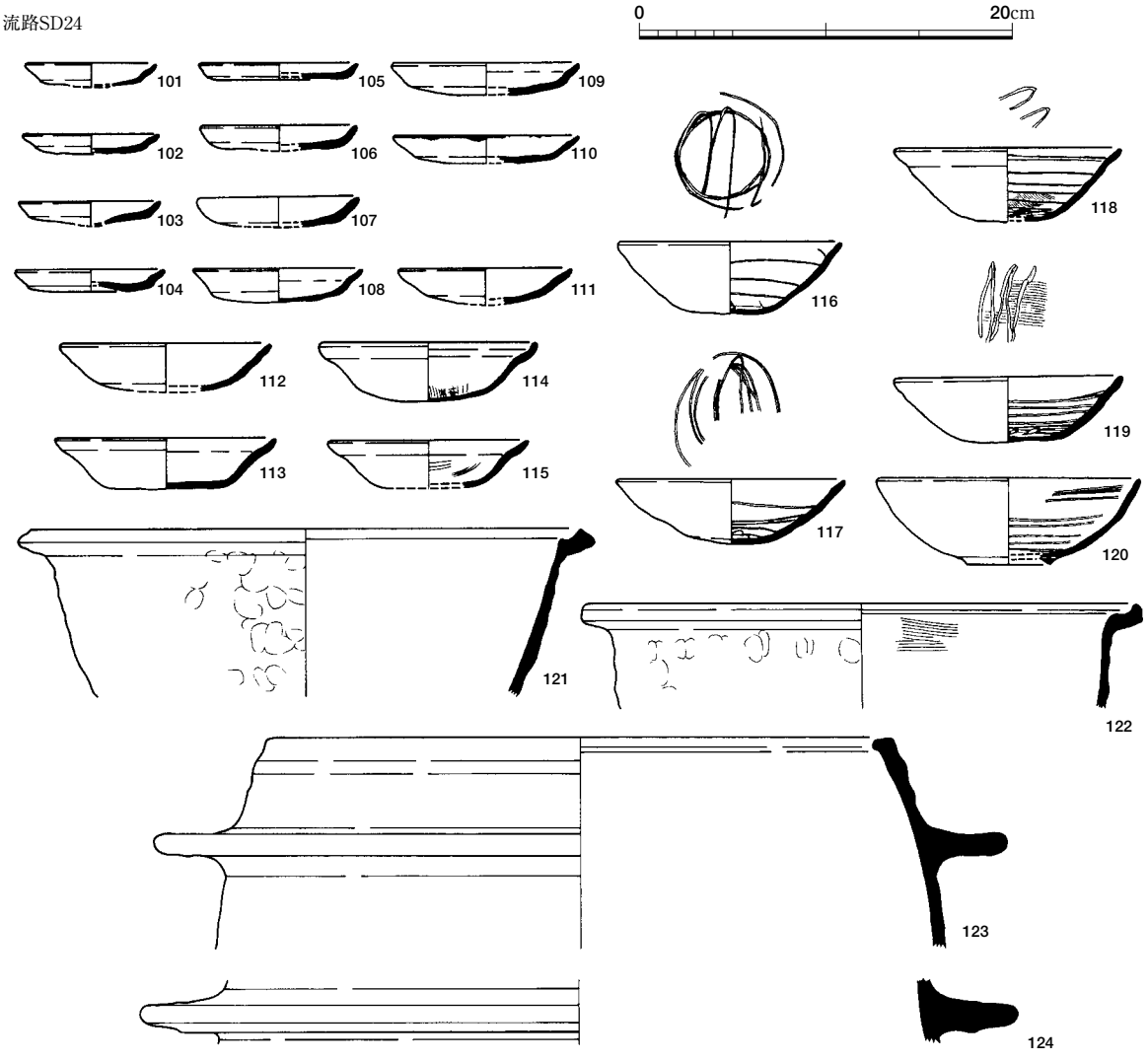
流路ＳＤ24盛土内土器集中部（第35図76～100）　流路ＳＤ24の旧斜面を埋め立てる近世頃の堆積層からまとまって出土した遺物群で、出土遺物には土師器小皿（76～80）、皿（81～91）、椀（92）、瓦器椀（93～99）、鉢（100）がある。76～80は口径6.8～8.2cm、81～89は口径９～10.3cmを測る。91は口縁部の中位を強く屈曲させるもので、井戸ＳＥ15に類品を認めることができる。92の土師器椀は白色系の椀形土器を模倣したものであろうか。94～98の瓦器椀は口縁部が直線的に外傾し、端部付近のヨコナデ調整も器壁を外反気味に変形させている。これらの個体は器壁が非常に薄く作られており、焼成は硬質に仕上げられていた。近世盛土内からまとまって出土した遺物には14世紀頃の形態的な特徴が窺える。遺物の出土状況は散在的なものではなく、また、出土遺物には完形品も数多く含まれていた。これらのことから、近世盛土内の遺物群は斜面の埋め立て土の搬入に伴い、乙訓寺周辺など調査地近辺からもたらされたと考えられる。

流路ＳＤ24（第35図101～124）　流路ＳＤ24としてまとめて図示したものには、流路斜面上の茶灰色土層、大型土坑、護岸状の石列周辺から出土した遺物が含まれている。土師器には小皿（101～106）、皿（107～115）、瓦器に椀（116～120）、鍋（121・122）、羽釜（123・124）がある。101～108の土師器小皿の法量は７～8.4cmを測る。土師器皿には112の白色系椀形土器を模倣したと考えられるもの、113～115の口縁部の中位を強く屈曲させるものがあり、流路ＳＤ24盛土内土

流路SD24盛土内土器集中部



流路SD24

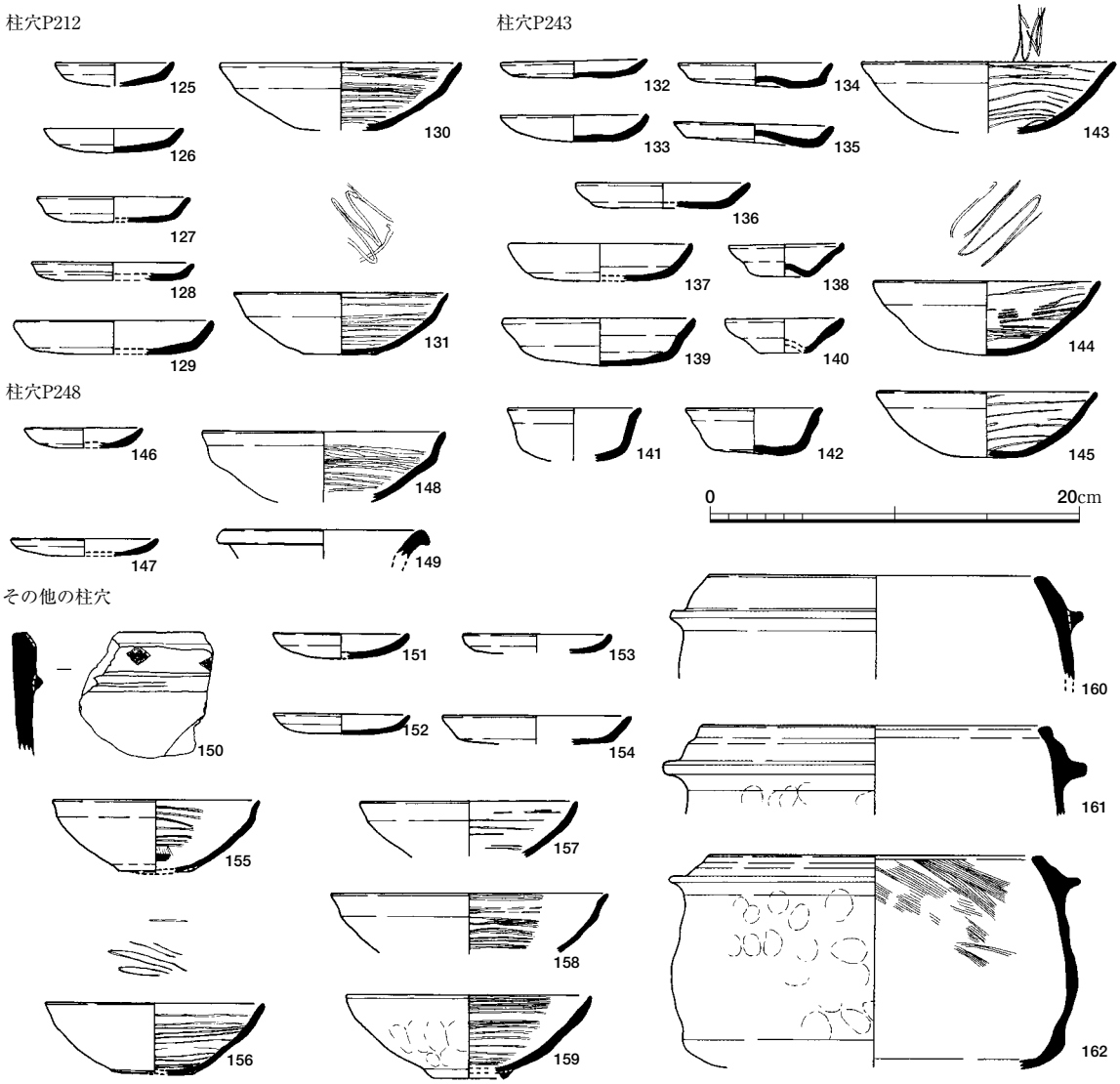


第35図　中世土器実測図－２（1/4）

器集中部の土器群との類似性を見出すことができる。また、瓦器椀にも116・118のように薄手、硬質で、口縁部が直線的に外傾するものが認められた。これらのことから土師器、瓦器には14世紀代の時期を想定できる。ただし、流路ＳＤ24の出土遺物には瓦器椀（120）のように口縁部が内湾気味に立ち上がり、三角形の高台を貼り付けた、より古相を呈するものも一定量含まれていた。

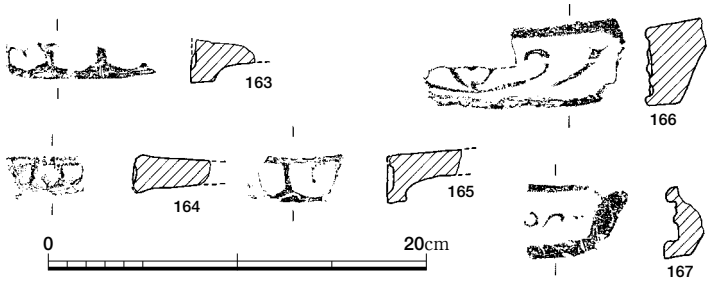
柱穴Ｐ212（第36図125～131）　土師器小皿（125～128）、皿（129）、瓦器椀（130・131）がある。125～128は口径6.4～8.8cm、器高0.9～1.3cmを測る。瓦器椀は口縁部の上半が内湾気味に立ち上がる軟質焼成のもので、流路ＳＤ24盛土内土器集中部や茶灰色土出土の瓦器椀（94～98・116・118）とは異なった特徴を持つ。土師器皿や瓦器椀の特徴から14世紀代前半のものと考えられる。

柱穴Ｐ243（第36図132～145）　土師器小皿（132～135）、皿（136～140）、瓦器椀（143～145）、小鉢（141・142）がある。132～135は口径8.5cm前後を測る。139・140は底部を内面に盛り上げるもので、井戸ＳＥ15、土坑ＳＫ06、段差ＳＸ02に類品が認められる。141・142の瓦器小鉢は杯形を呈し、口縁端部付近がヨコナデによって外反気味に立ち上がる。胎土には砂粒を多く含み、全



第36図　中世土器実測図－３（1/4）

体に暗灰白色の色調で軟質に焼成されている。143～145の瓦器椀は柱穴Ｐ212と同様な特徴を持つものであり、土師器皿の形態などからも柱穴Ｐ243の遺物には柱穴Ｐ212とほぼ同じ時期が想定できる。



第37図　中世軒平瓦実測図（1/4）

柱穴Ｐ248（第36図146～149）　土師器小皿（146・147）、瓦器椀（148）、青磁（149）がある。146・147の土師器小皿は口径7.5cm前後、器高約１cmを測り、148の瓦器椀は口縁部上半が明確に立ち上がるものであることなど、柱穴Ｐ212・243と同様な特徴が認められる。しかし、出土遺物量や残存状況の制約などで遺物の所属時期は明らかにできなかった。

その他の柱穴出土遺物（第36図150～162）　125～149の他、柱穴出土遺物の主なものには、土師器皿（152～154）、瓦器椀（155～159）、皿（151）、羽釜（160～162）、火鉢（150）、須恵器、陶磁器などがある。150は瓦器火鉢の口縁部片である。口縁部の外面には４個の小さな菱形文を組み合わせた紋様が陰刻され、その下には小さな突帯が付されている。この遺物については16世紀代の時期が想定できる。160～162の瓦器羽釜は内傾する口縁部に小さな鍔を付けており、13世紀後半期のものと考えられる。

軒瓦（第37図）　調査では軒平瓦５点が出土したが、軒丸瓦は確認できなかった。また、平瓦、丸瓦も僅かで、図示し得るものはない。163～165は剣頭文であるが、唐草文の166・167は型式不明。それぞれの出土遺構は土坑ＳＸ13（167）、落ち込みＳＸ02（163）、土坑ＳＫ11（165）、包含層（164・166）であった。

Ｂ．長岡京期前後

流路ＳＤ24（第38図168～174・177～186・188～190）　流路ＳＤ24の最下層には古墳時代、長岡京期前後、平安時代前期の遺物が含まれていた。

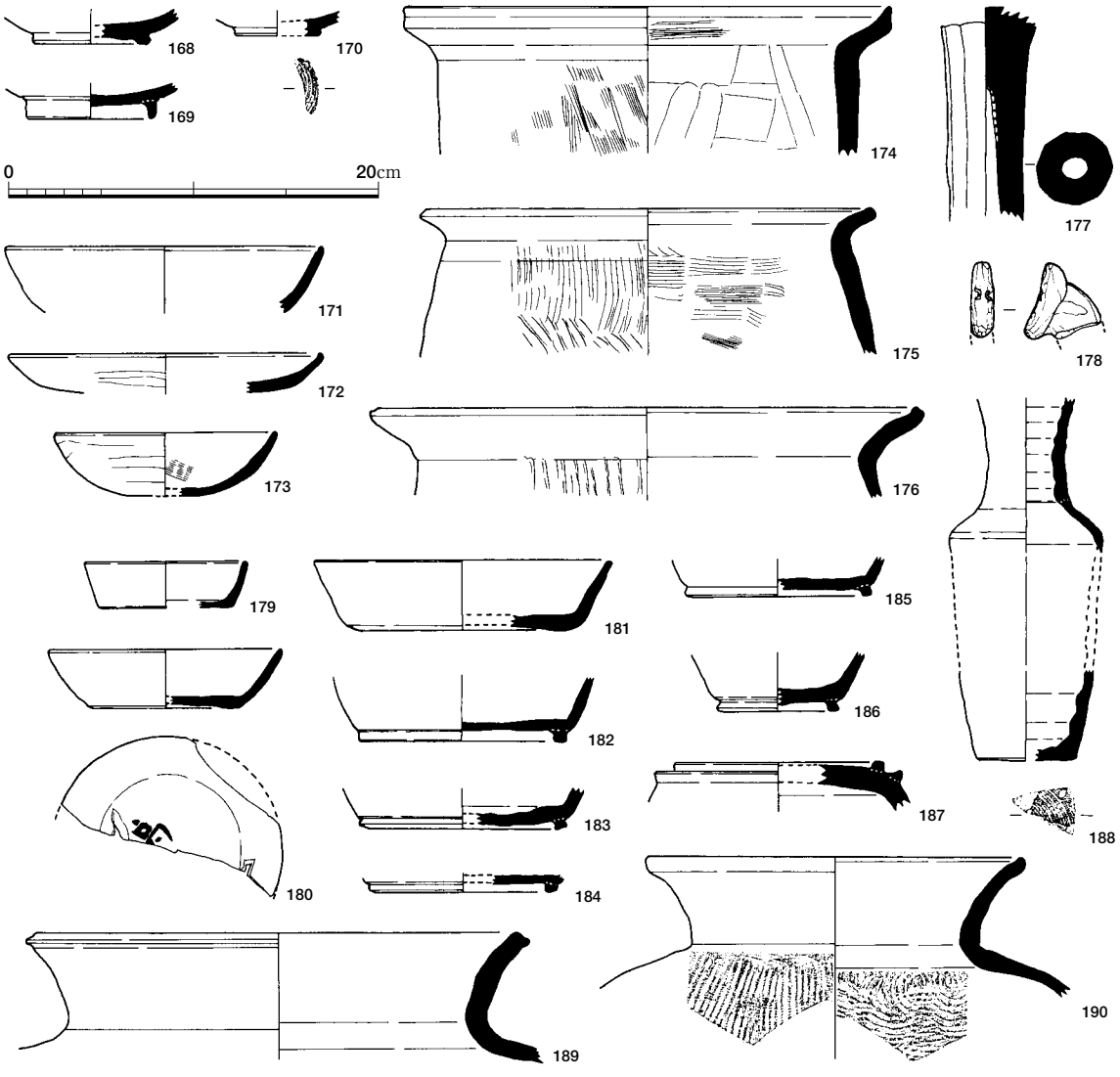
平安時代前期の土器類として須恵器（168）、緑釉陶器（170）、灰釉陶器（169）を示すことができるが、いずれも器種の判然としない小片であった。169の灰釉陶器は高さ１cm程度の細い高台を貼り付けたもので、口縁部内面には淡灰色の釉が確認できた。170の緑釉陶器は硬質に焼成されており、釉は黄緑色に発色している。高台は削り出し高台で、外面には糸切り圧痕が認められた。

長岡京期と考えられる遺物には土師器の杯（171）、皿Ａ（172）、椀Ｃ（173）、高杯（177）、甕（174）、須恵器の杯Ａ（181）、杯Ｂ（182～186）、壺Ｇ（188）、土馬（178）がある[6]。須恵器の杯Ａ（179・180）、甕（189・190）などは長岡京期から平安時代前期の時期幅を有するものである。172の土師器皿Ａは口径17cm、器高2.2cm、173の椀Ｃは口径12cm、器高3.4cmに復元できる。177の高杯脚部は10面の面取りが施されるもので、棒芯作りによって成形されていた。179の須恵器杯Ａは底部から口縁部へ強く屈曲するもので、口径8.8cm、器高2.5cmを測る。180の須恵器杯Ａは179と異なり、外傾する口縁部への屈曲が緩やかなものである。底部外面には墨書が認められるが、墨

痕が薄く、破片も断片であったため文字の判読は行えなかった。188の須恵器壺Ｇは肩部付近と底部片を図上で復元したもので、正確な形態や器高、肩部の径は明らかでない。底部には糸切り圧痕が認められた。

土坑ＳＫ27（第38図175・176）　土坑ＳＫ27からは緡銭が出土しており、その共伴遺物は緡銭の時期を決定する上でも重要である。しかし、土坑からは土師器甕（175・176）の他に古墳時代後期の有蓋高杯が出土しただけで、土師器や須恵器の食膳形態には図示し得るものがなかった。175・176の土師器甕は外面に粗いタテハケと縦方向のタタキを施す。土師器煮沸形態のみで土坑の時期を確定できないが、土師器、須恵器の食膳形態には長岡京期前後の特徴を持つ小片があり、土坑の埋没時期および緡銭の所属時期も長岡京期前後である可能性が高い。

包含層出土遺物（第38図187）　須恵器円面硯（187）の破片が出土した。円面硯には２条の突帯が巡らされており、上部の突出によって直径11cm程度の範囲が画されている。小片のため脚部の透孔の有無や形状は明らかでない。

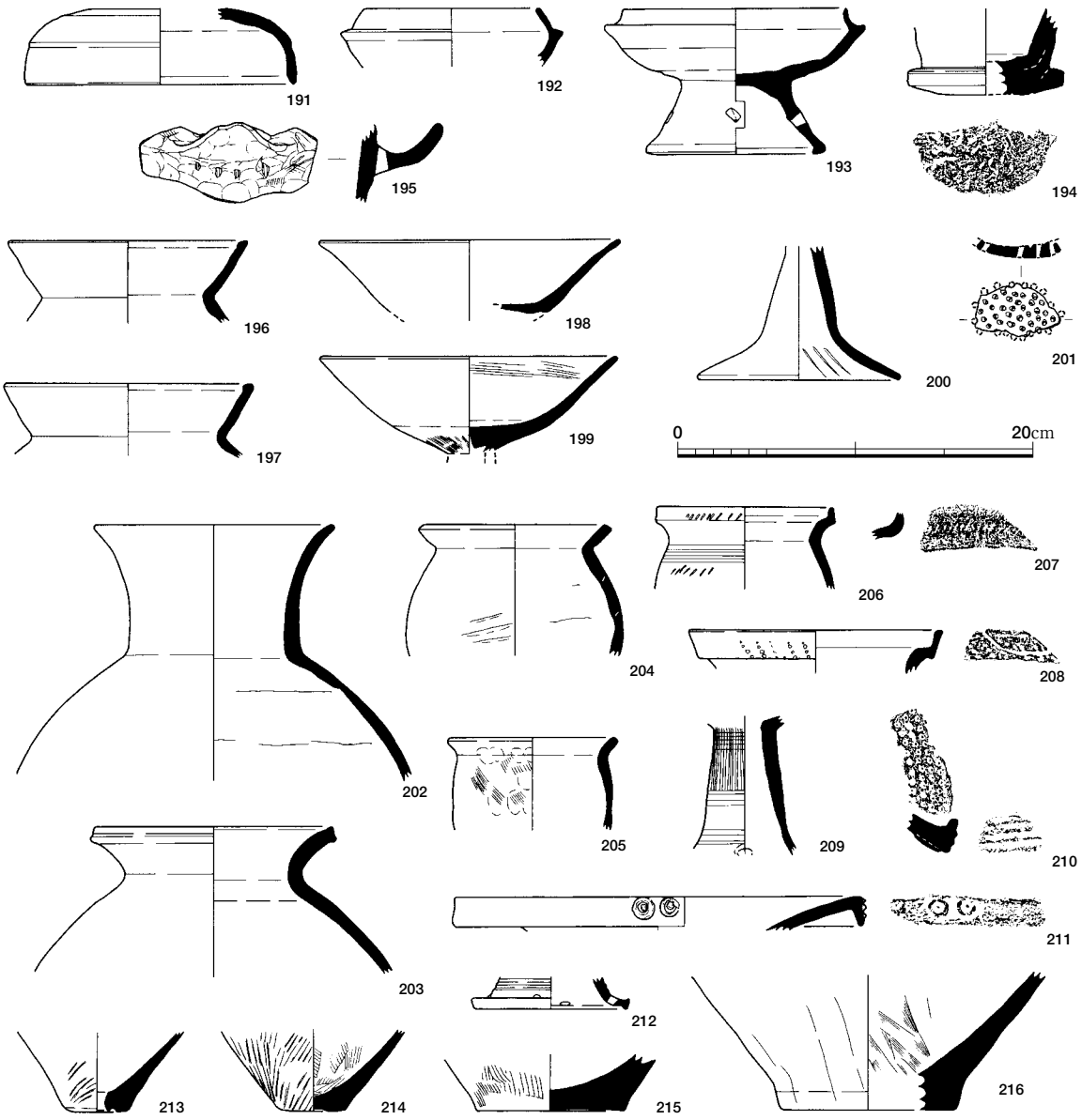


第38図　長岡京期から平安時代土器類実測図（1/4）

C．古墳時代

落ち込みＳＸ26（第39図196～201）　落ち込みＳＸ26からは古墳時代中期初頭までの土師器が出土している。甕（196・197）、高杯（198～200）のほかに壺が認められた。201は器種の明らかでない破片で、１cmまでの器壁に直径３mmの孔が多数穿たれている。196・197は口縁端部の内面を肥厚させる布留式甕の形態を有している。

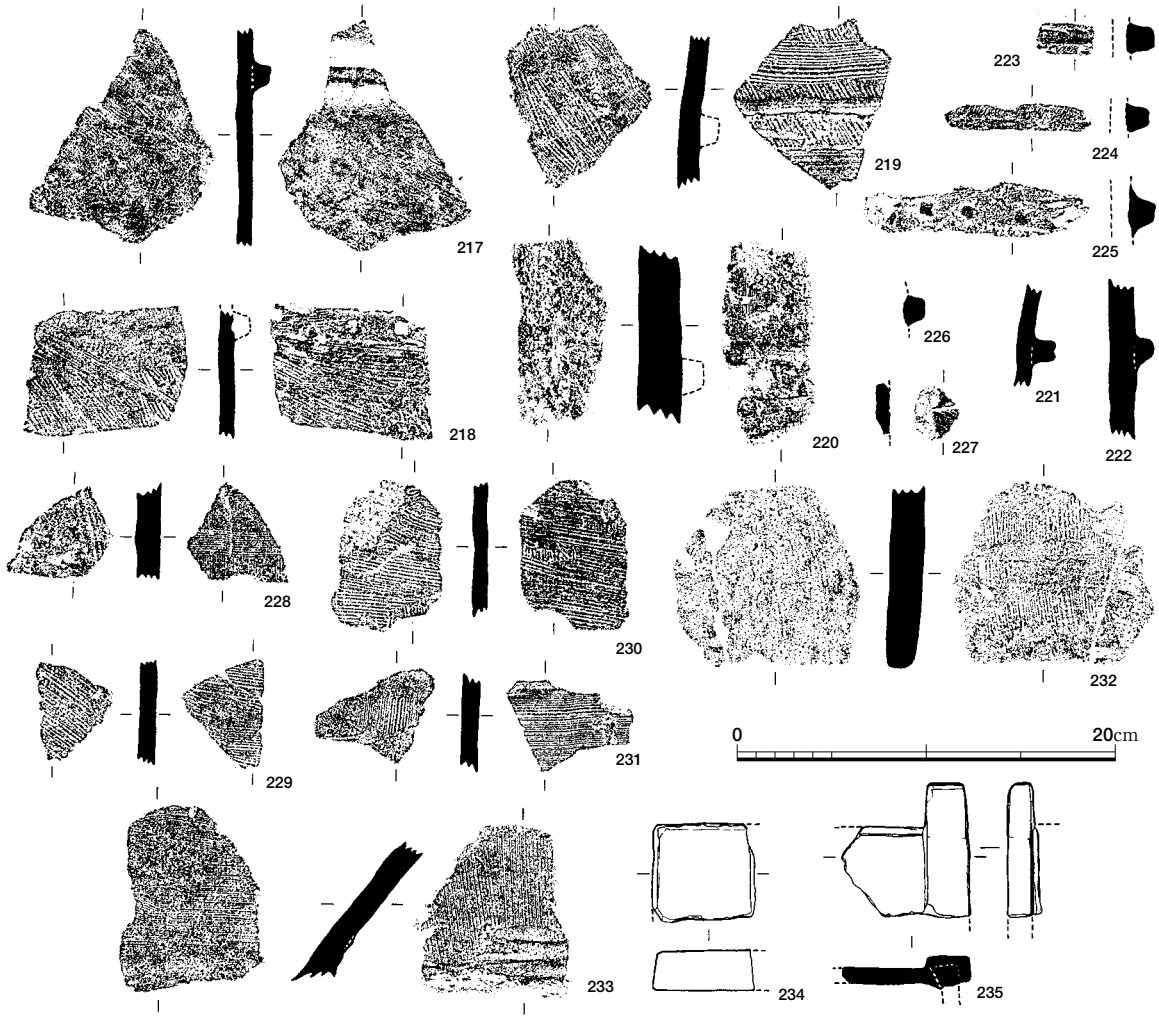
その他の遺構出土遺物（第39図191～195）　古墳時代の遺構と考えられるのは落ち込みＳＸ26だけであり、これらの遺物は流路ＳＤ24最下層（191・194・195）、土坑ＳＸ13（192）、土坑ＳＫ27（193）から出土したものである。土師器には甑の把手部（195）があるが、この破片は把手部分の基部に４本の孔が穿たれたもので、韓式系土器の影響が想定できる。須恵器には杯蓋（191）、杯身（192）、有蓋高杯（193）、鉢（194）が認められた。193の有蓋高杯は、脚部に斜め方向で長方形の穿孔が施されている。191～193は形態的な特徴などから陶邑古窯址群のＴＫ10型式[(7)]前後に相当



第39図　弥生時代から古墳時代土器実測図（1/4）

するものと考えられる。

埴輪（第40図）　本調査では埴輪と考えられる土師質の破片が25点程度出土しており、部位が明らかなものと残存状態の良好な19点を図示した。落ち込みＳＸ26（217・218・223・225～230・235）、流路ＳＤ24（219・224・231・233・234）から多くが出土したが、井戸ＳＥ15（220・222）、包含層（221・232）など中近世の遺構に紛れ込んでいたものも認められる。埴輪には円筒埴輪（217～232）、朝顔形埴輪（233）、形象埴輪（234・235）がある。円筒埴輪は器壁１cm前後のものが多いが、220・232のように２cmを超えるものもある。232は底部片であるが、220にはタガの剥離痕跡が認められた。タガ間の高さを窺える資料はないが、タガは基部の幅1.2～２cmで、突出は１cm程度を測る。218・220・225では、タガ取り付け前に施された方形刺突が認められた。円筒埴輪は外面にタテハケと二次調整のヨコハケを施すものが多く、内面調整にはナデおよびナナメハケが認められる。破片という制約はあるが、Ｂ種ヨコハケが施された個体は確認できなかった。形象埴輪の235は囲い形埴輪の屈曲部と推測した破片で、壁からの突出を含めて柱は方形に表現されている。壁部の上方には横方向の直線が施されている。埴輪は川西編年の「Ⅱ～Ⅲ」期[8]に属するものと考えられ、方形刺突やタガの突出具合などより古い要素が窺える。



第40図　埴輪実測図（1/4）

D．弥生時代

弥生土器（第39図202～216）は古墳時代の落ち込みＳＸ26（203・204・208・211・212～214・216）、長岡京期前後の土坑ＳＫ27（205～207・209）、中世の土坑ＳＫ29（202・210・215）など後世の遺構から出土している。器種には壺（202・203）、甕（204～208）、高杯（209）、器台（210～212）、甑（213）、壺ないし甕の底部（214～216）があるが、いずれも残存状況の良くないものであった。壺、器台の形態より、これらの土器は弥生時代中期後葉から後期中葉までの時期が想定できる。また、206～208のように、口縁部や肩部外面に櫛描刺突列点文を施した近江地域の影響が窺える個体が一定量含まれていた。

（２）金属製品

金属製品には鉄釘、鉄鏃、鉄鎌、銭貨があり、その大部分が井戸ＳＥ15、土坑ＳＫ11から出土している。また、土坑ＳＫ27出土の緡銭は萬年通寶、神功開寶など古代銭貨60枚程度が一緡にされたもので非常に貴重な資料である。

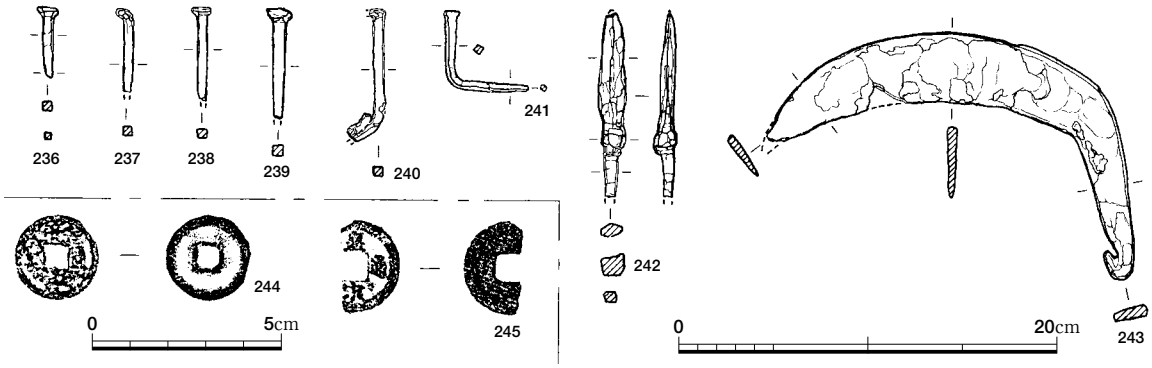
鉄釘（第41図236～241）　井戸ＳＥ15（236・237・240・241）と土坑ＳＫ11（238・239）から出土している。すべて釘頭は長方形で、中位の断面形は正方形を呈する。240・241は先端部近くまで残存している個体で、それぞれ長さ7.1cm、7.6cmを測る。

鉄鏃（第41図242）　鉄鏃は土坑ＳＫ11から出土した。先端から9.7cmまで残っており、刃部は約６cm、中茎が３cm程度と考えられる。刃部の断面形状は扁平な菱形を呈する。

鉄鎌（第41図243）　鉄鎌も鉄鏃と同じ土坑ＳＫ11から出土した。刃部の先端が欠けているもののほぼ全形を窺い知れるものである。刃部は湾曲しており、長さ16.5cm程度で、最も幅の広い部分が3.7cmを測る。刃部から茎部への屈曲は鈍角で、厚味は刃身より茎部が一回り厚く作られている。茎部は長さ約８cmを測り、先端は木質の把手からの抜けを防ぐために抉りが施されていた。

銭貨（第41図244・245）　銭貨はいずれも井戸ＳＥ15から出土したもので、近世銭貨（244）と中世輸入銭貨（245）が認められた。244は寛永通寶であるが、磨耗により銭文が非常に不明瞭であった。245は皇宋通寶であり、北宋で1039年に初鋳されたものである。

緡銭（巻頭図版４、図版15）　土坑ＳＫ27から出土した緡銭は全長約13cmを測り、３箇所で折れ曲がった状態で出土した[9]。銭貨を束ねるための紐は確認できていないが、緡銭の両端と考えられる部分が半球形に盛り上がった状況で固着しており、紐の存在とこの緡銭が一緡であることを



第41図　中近世金属製品実測図（1/2・1/4）

窺わせる。銭貨の総数は60枚程度と見られるが、互いに固着した状況で出土したため実数を明らかにできない。また、古代銭貨の萬年通寶１枚、神功開寶１枚を確認できたが、銭種構成の詳細は明らかでない。しかし、緡銭の幅がほぼ一定であることから少なくとも承和昌寶以降の古代銭貨は含まれていないと考えられる。緡銭は現在独立行政法人奈良文化財研究所に分析を依頼しており、銭種構成や有機質の痕跡などの解明が期待される。前項までに述べたように、土坑出土の共伴遺物には古墳時代の須恵器のほか、長岡京期前後の土師器、須恵器があるが、いずれも小片であり詳細な時期決定を困難にしている。ただし、土師器片の特徴や遺構埋土の性質から、土坑ＳＫ27は長岡京期を中心とする時期である可能性が高い。

（３）石製品

石製品はおおよその時期によって近世と中世以前に分け、それぞれ遺構ごとに記述を行った。

Ａ．近世

土坑ＳＸ07（249）　大型の砥石１点が出土しているが、これは土坑ＳＸ07内部に配置されていた４個の石材のうち南側にあたるものである。砥石は長さ22.4cm、幅13.7cm、厚さ６cmの長立方体を呈しており、小口の一端が欠損、他方は斜めに加工されている。欠損部以外の各面には使用痕跡が認められた。

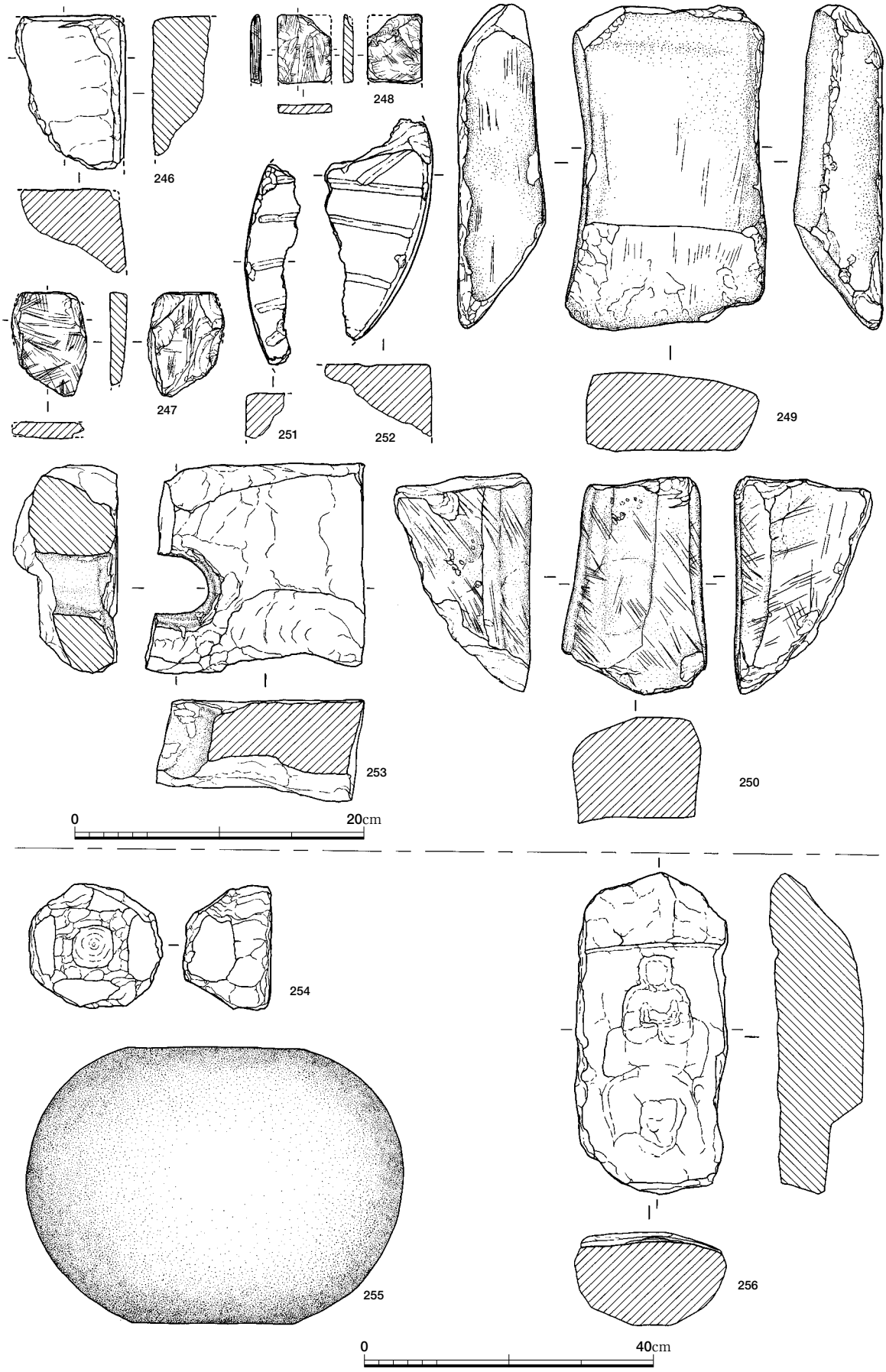
柱穴状遺構Ｐ001（255）　この石材は大型の五輪塔水部と考えられ、柱穴状遺構Ｐ001に埋置されていた。花崗岩質の石材で、高さ38cm、最大径が51.4cmを測る。直径22cm程度の平坦面を削り出しているが、五輪塔水部の天地は明らかでない。また、梵字などの痕跡は認められなかった。

井戸ＳＥ15（第42図246～248・250～254・256）　砥石（247・248・250）、石臼（251・252）、五輪塔部材（246・254）、石仏（255）、不明品（253）がある。砥石には扁平な小型品（247・248）と立体的な大型品（250）があり、大型品には砂岩質の石材が用いられていた。石臼はいずれも縁部の断片で、擂り溝が刻まれている。五輪塔部材の254は空部と考えられるが、４側面とも欠損しており詳細は定かでない。上面には直径５cm、深さ３cm程度の受け穴が掘られていた。246の花崗岩質の方形材で部位は明らかでない。石仏は坐像形の独尊佛であり、下部には台座状の加工も認められる。石仏表面は磨耗が進んでおり、形相、形式などの詳細は不明である。裏面、両側面、表面下部ともに銘は認められない。不明品は一辺28cm程度の石材で、上面が平坦に加工されている。現状の石材の長側辺付近には直径８cm程度の穴が穿たれており、穴の内側は滑らかに磨かれていた。不明品は欠損が著しく原形を推測できないが、その形態から軸受け部材や円筒形鉄器の砥石とも考えられる。

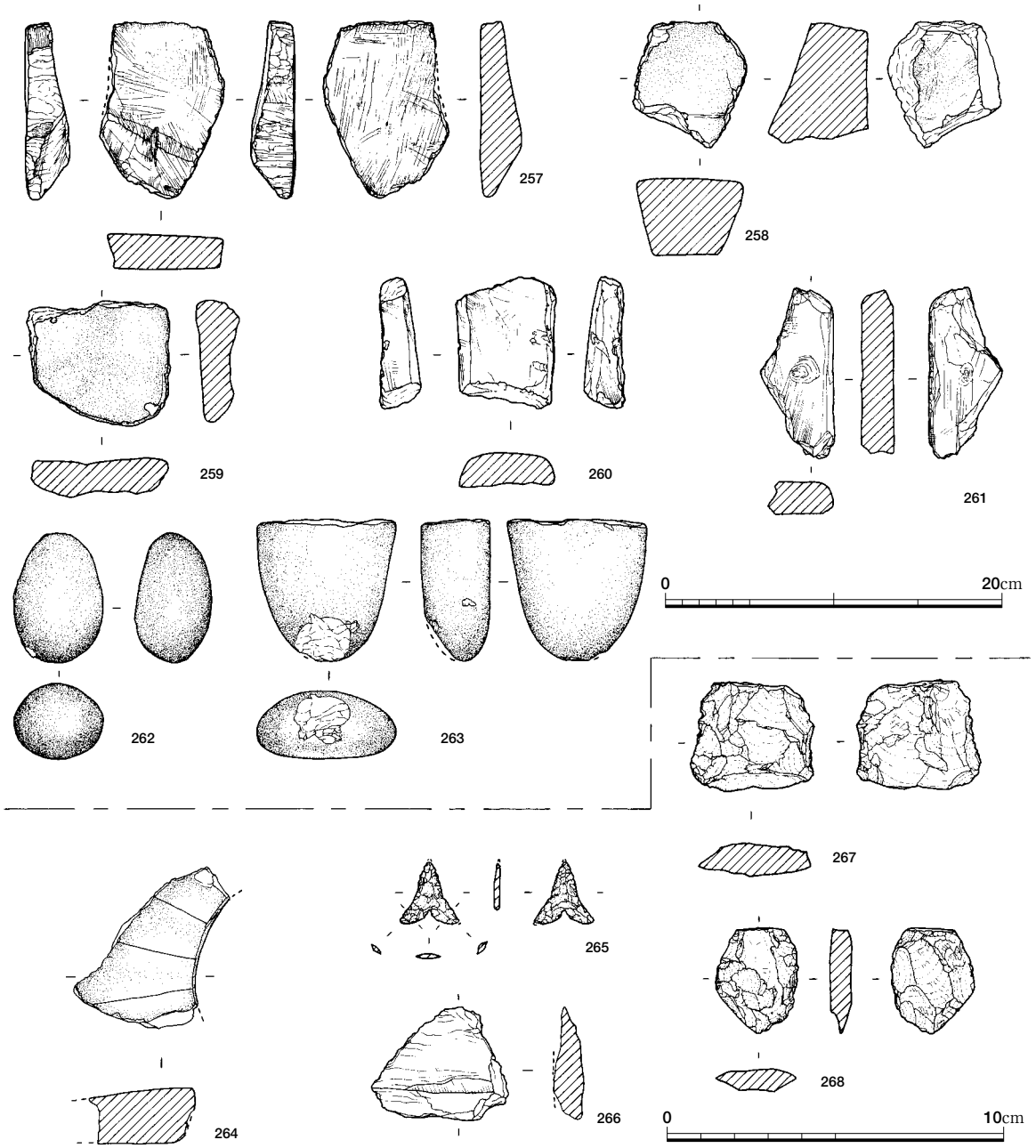
Ｂ．中世以前

土坑ＳＫ20（257）　257は長さ10.6cmの扁平な砥石であり、表裏面に使用痕跡が認められる。また、斜めに加工され短側面の一端にも使用痕が認められるが、一方の短側面と長側面は粗く打ち欠いた状態であった。

土坑ＳＫ11（258）　砂岩質の石材を用いた258も砥石である。側面をすべて欠損しており原形は窺えないが、厚さ3.5～６cmのもので、表裏面に使用痕跡が認められる。



第42図　近世石製品実測図（1/4・1/8）



第43図　中世以前石製品実測図（1/2・1/4）

土坑ＳＫ29（259）　259の砥石は表面のみに使用痕跡が認められた。側面および裏面は欠損および摩耗が激しい。

流路ＳＤ24（260）　260の砥石は流路ＳＤ24の最下層から出土した。裏面、短側面は欠損しているが、表面および両長側面に使用痕が残る。

土坑ＳＫ27（261）　261は緡銭が出土した土坑ＳＫ27に含まれていたものである。両端および長側面の一方を欠損しているが、長さ12.5cm、厚さ２cmを測る。表裏面と一方の長側面に使用痕跡が認められ、表面の中央部には窪みが認められる。

その他の遺構出土遺物（262～268）　包含層（262・263）、近世の土坑ＳＸ07（265）、井戸ＳＥ15（268）、溝ＳＤ17（266）、中世の柱穴（264・267）など古墳時代以前の石製品が後世の遺構から

出土している。古墳時代以前の石製品には車輪石（264）、叩き石（262・263）、石庖丁（266）、石鏃（265）、剥片（267・268）がある。

緑色凝灰岩製の車輪石（264）は淡緑灰色を呈するもので、表面には部分的に鉄分が付着していた。長さ4.8cm、幅4.6cm、厚さ1.7cmを測るが、破片であり形態的な特徴を窺うことはできない。内面の円弧部分は表面から裏面へ内傾気味に形作られており、表面には 4 帯の放射状凹帯が残されていた。砂岩製の石斧（263）は製品の上半が失われているが、先端には打撃痕跡が認められる。長さ8.5cm、最大幅8.3cmで、厚さ4.1cmを測る。サヌカイト製の石鏃（265）は完全な形を残すもので、長さ1.9cm、幅1.8cm、厚さ0.2cmを測る。

付表－３　実測遺物一覧表

番号	出土遺構	種類	器形	器高	口径	底径	番号	出土遺構	種類	器形	器高	口径	底径
1	ＳＸ13	陶器	碗	7.6	9.5	4.3	31	ＳＥ15	土師器	皿	1.2	7.6	5.7
2	ＳＸ13	陶器	碗	7.2	10.0	4.0	32	ＳＥ15	土師器	皿	1.4	7.8	6.2
3	ＳＸ07	土師器	皿	1.4	5.8	3.4	33	ＳＥ15	土師器	皿	1.1	7.6	5.5
4	ＳＸ07	土師器	皿	1.5	5.7	－	34	ＳＥ15	土師器	皿	1.2	7.6	5.9
5	ＳＸ07	陶器	天目茶碗	6.8	11.3	5.0	35	ＳＥ15	土師器	皿	1.7	7.4	3.5
6	ＳＸ07	陶器	天目茶碗	8.5	12.6	4.9	36	ＳＥ15	土師器	皿	2.1	12.2	7.3
7	ＳＤ17	土師器	皿	1.2	5.6	－	37	ＳＥ15	土師器	皿	2.6	11.0	6.1
8	ＳＤ17	土師器	皿	1.2	5.6	－	38	ＳＫ09	土師器	皿	1.1	5.4	3.5
9	ＳＤ17	土師器	皿	1.1	5.6	－	39	ＳＤ01	土師器	皿	1.6	6.8	4.7
10	ＳＤ17	土師器	皿	(2.4)	11.0	－	40	ＳＸ04	土師器	皿	1.9	9.4	－
11	ＳＤ17	土師器	皿	2.1	9.8	－	41	ＳＫ09	土師器	炮烙	(7.0)	29.9	－
12	ＳＤ17	土師器	皿	2.3	9.6	－	42	ＳＸ04	陶器	天目茶碗	(5.6)	11.6	－
13	ＳＤ17	土師器	皿	2.0	8.6	－	43	ＳＸ04	陶器	皿	(2.5)	－	4.5
14	ＳＤ17	土師器	紅壺	(2.4)	2.4	1.9	44	ＳＫ09	陶器	擂鉢	(11.2)	32.2	－
15	ＳＤ17	土師器	炮烙	(4.2)	33.0	－	45	包含層	陶器	杯	1.8	4.6	3.0
16	ＳＤ17	陶器	皿	3.1	9.0	3.4	46	ＳＸ04	土製品	伏見人形	(2.6)	(2.8)	(0.9)
17	ＳＤ17	陶器	皿	2.8	9.4	3.7	47	包含層	土製品	伏見人形	(3.4)	(3.6)	(2.7)
18	ＳＤ17	陶器	皿	4.3	12.5	3.9	48	ＳＫ11	土師器	皿	2.1	10.4	
19	ＳＤ17	陶器	皿	3.8	12.8	6.6	49	ＳＫ11	土師器	皿	1.2	5.1	
20	ＳＤ17	陶器	碗	11.4	(6.1)	－	50	ＳＫ11	陶器	壺	(8.8)	12.6	
21	ＳＥ15	土師器	皿	1.3	6.0	－	51	ＳＫ06	土師器	皿	1.9	11.8	
22	ＳＥ15	土師器	皿	1.2	6.2	－	52	ＳＫ06	陶器	碗	7.5	16.4	5.6
23	ＳＥ15	土師器	皿	2.1	10.4	－	53	ＳＫ06	土師器	皿	1.1	8.6	
24	ＳＥ15	土師器	皿	1.9	10.6	6.8	54	ＳＫ06	土師器	皿	1.3	8.0	
25	ＳＥ15	陶器	碗	(5.0)	9.9	－	55	ＳＫ06	土師器	皿	1.1	7.4	
26	ＳＥ15	陶器	鉢	(7.2)	16.0	10.6	56	ＳＫ06	土師器	皿	1.2	7.8	
27	ＳＥ15	土師器	炮烙	(6.0)	30.0	－	57	ＳＫ06	土師器	皿	1.9	7.1	
28	ＳＥ15	土師器	皿	2.6	14.0	7.7	58	ＳＫ06	土師器	皿	1.9	7.0	
29	ＳＥ15	瓦器	三足鉢	5.1	9.8	8.7	59	ＳＫ06	須恵器	擂鉢	(7.9)	25.2	
30	ＳＥ15	土師器	皿	1.1	7.4	5.8	60	ＳＸ02	土師器	皿	2.0	6.8	

番号	出土遺構	種類	器形	器高	口径	底径	番号	出土遺構	種類	器形	器高	口径	底径
61	ＳＸ02	青磁	皿	(3.4)		7.0	116	ＳＤ24	瓦器	椀	3.9	12.0	
62	ＳＫ08	土師器	皿	1.2	7.8		117	ＳＤ24	瓦器	椀	3.5	12.2	
63	ＳＫ08	瓦器	椀	(2.6)	11.0		118	ＳＤ24	瓦器	椀	3.9	12.2	
64	ＳＫ08	瓦器	羽釜	(19.4)	33.6		119	ＳＤ24	瓦器	椀	3.6	12.2	
65	ＳＸ30	瓦器	椀	4.3	13.1		120	ＳＤ24	瓦器	椀	4.6	14.1	
66	ＳＸ23	土師器	皿	1.1	7.2		121	ＳＤ24	瓦器	鍋	(9.0)	30.8	
67	ＳＸ23	土師器	皿	1.3	7.0		122	ＳＤ24	瓦器	鍋	(5.7)	29.9	
68	ＳＸ23	土師器	皿	1.0	6.8		123	ＳＤ24	瓦器	羽釜	(11.4)	33.4	
69	ＳＸ23	土師器	皿	(1.4)	8.0		124	ＳＤ24	瓦器	羽釜	(3.5)		
70	ＳＸ23	瓦器	椀	4.2	12.6		125	Ｐ212	土師器	皿	1.3	6.4	
71	ＳＸ23	瓦器	椀	(3.9)	11.2		126	Ｐ212	土師器	皿	1.3	7.6	
72	ＳＸ23	瓦器	椀	4.0	12.8		127	Ｐ212	土師器	皿	1.3	8.2	
73	ＳＸ23	瓦器	椀	(3.7)	13.0		128	Ｐ212	土師器	皿	0.8	8.8	
74	ＳＸ23	瓦器	鍋	(4.9)	25.0		129	Ｐ212	土師器	皿	1.8	10.8	
75	ＳＸ23	須恵器	鉢	(4.7)	24.8		130	Ｐ212	瓦器	椀	3.7	13.0	
76	ＳＤ24盛土	土師器	皿	1.1	6.8		131	Ｐ212	瓦器	椀	3.3	11.6	
77	ＳＤ24盛土	土師器	皿	1.1	7.5		132	Ｐ243	土師器	皿	0.9	8.0	
78	ＳＤ24盛土	土師器	皿	0.9	7.8		133	Ｐ243	土師器	皿	1.5	8.0	
79	ＳＤ24盛土	土師器	皿	(0.9)	7.8		134	Ｐ243	土師器	皿	1.3	8.2	
80	ＳＤ24盛土	土師器	皿	1.5	8.2		135	Ｐ243	土師器	皿	1.2	8.6	
81	ＳＤ24盛土	土師器	皿	1.7	9.0		136	Ｐ243	土師器	皿	1.4	9.4	
82	ＳＤ24盛土	土師器	皿	1.5	9.4		137	Ｐ243	土師器	皿	2.0	10.0	
83	ＳＤ24盛土	土師器	皿	2.1	9.7		138	Ｐ243	土師器	皿	2.6	10.4	
84	ＳＤ24盛土	土師器	皿	1.6	10.2		139	Ｐ243	土師器	皿	1.8	6.3	
85	ＳＤ24盛土	土師器	皿	(1.7)	10.2		140	Ｐ243	土師器	皿	(1.9)	6.4	
86	ＳＤ24盛土	土師器	皿	1.7	10.2		141	Ｐ243	瓦器	鉢	2.8	7.2	
87	ＳＤ24盛土	土師器	皿	1.9	10.2		142	Ｐ243	瓦器	鉢	2.4	7.3	
88	ＳＤ24盛土	土師器	皿	1.6	10.2		143	Ｐ243	瓦器	椀	3.8	13.8	
89	ＳＤ24盛土	土師器	皿	(1.7)	10.3		144	Ｐ243	瓦器	椀	4.0	12.2	
90	ＳＤ24盛土	土師器	皿	(1.7)	9.6		145	Ｐ243	瓦器	椀	3.5	12.0	
91	ＳＤ24盛土	土師器	皿	(2.8)	12.0		146	Ｐ248	土師器	皿	1.1	6.5	
92	ＳＤ24盛土	土師器	椀	3.2	11.0		147	Ｐ248	土師器	皿	1.0	8.0	
93	ＳＤ24盛土	瓦器	椀	3.6	12.4	3.7	148	Ｐ248	瓦器	椀	(3.8)	13.6	
94	ＳＤ24盛土	瓦器	椀	3.7	12.4		149	Ｐ248	青磁	壺	(1.6)	11.5	
95	ＳＤ24盛土	瓦器	椀	3.4	11.8		150	Ｐ017	瓦器	火鉢	6.7	7.3	
96	ＳＤ24盛土	瓦器	椀	3.9	12.0	4.2	151	Ｐ249	瓦器	皿	1.4	7.4	
97	ＳＤ24盛土	瓦器	椀	(3.4)	10.9		152	Ｐ237	土師器	皿	1.1	7.6	
98	ＳＤ24盛土	瓦器	椀	3.6	12.4		153	Ｐ252	土師器	皿	1.0	8.0	
99	ＳＤ24盛土	瓦器	椀	(3.8)	12.2		154	Ｐ237	土師器	皿	1.5	10.2	
100	ＳＤ24盛土	瓦器	鉢	(6.1)	19.4		155	Ｐ203	瓦器	椀	(3.9)	11.2	4.0
101	ＳＤ24	土師器	皿	(1.2)	7.0		156	Ｐ250	瓦器	椀	3.9	11.9	4.5
102	ＳＤ24	土師器	皿	1.1	7.3		157	Ｐ203	瓦器	椀	(3.0)	11.9	
103	ＳＤ24	土師器	皿	(1.2)	7.6		158	Ｐ252	瓦器	椀	(3.3)	13.8	
104	ＳＤ24	土師器	皿	1.2	8.0		159	Ｐ206	瓦器	椀	4.5	13.4	3.8
105	ＳＤ24	土師器	皿	0.9	8.5		160	Ｐ252	瓦器	羽釜	(5.6)	18.4	
106	ＳＤ24	土師器	皿	(1.3)	8.4		161	Ｐ033	瓦器	羽釜	(4.8)	19.0	
107	ＳＤ24	土師器	皿	(1.6)	8.9		162	Ｐ031	瓦器	羽釜	(11.5)	18.0	
108	ＳＤ24	土師器	皿	1.8	9.1		163	ＳＸ02	瓦	軒平瓦	(3.4)	(7.7)	(2.3)
109	ＳＤ24	土師器	皿	1.7	10.0		164	包含層	瓦	軒平瓦	4.1		2.0
110	ＳＤ24	土師器	皿	1.5	10.0		165	ＳＫ11	瓦	軒平瓦	(3.9)	(8.0)	2.5
111	ＳＤ24	土師器	皿	(1.9)	9.3		166	包含層	瓦	軒平瓦			
112	ＳＤ24	土師器	皿	(2.5)	11.3		167	ＳＫ13	瓦	軒平瓦	(2.1)	(5.2)	3.5
113	ＳＤ24	土師器	皿	2.7	11.8		168	ＳＤ24	須恵器	皿	(1.9)	−	6.3
114	ＳＤ24	土師器	皿	3.2	11.6		169	ＳＤ24	灰釉陶器	皿	(2.0)	−	6.9
115	ＳＤ24	土師器	皿	(2.6)	10.7		170	ＳＤ24	緑釉陶器	皿	(1.4)	−	4.6

番号	出土遺構	種類	器形	器高	口径	底径
171	ＳＤ24	土師器	杯	(3.6)	17.2	−
172	ＳＤ24	土師器	皿Ａ	(2.2)	17.0	13.1
173	ＳＤ24	土師器	椀	3.4	12.0	4.5
174	ＳＤ24	土師器	甕	(8.0)	26.0	−
175	ＳＫ27	土師器	甕	(8.0)	24.6	−
176	ＳＫ27	土師器	甕	(3.9)	30.0	−
177	ＳＤ24	土師器	高杯	(11.8)	−	−
178	ＳＤ24	土製品	土馬	(4.0)	(1.2)	(4.1)
179	ＳＤ24	須恵器	杯	2.5	8.8	7.1
180	ＳＤ24	須恵器	杯Ａ	3.2	12.6	8.3
181	ＳＤ24	須恵器	杯Ａ	3.8	16.1	12.6
182	ＳＤ24	須恵器	杯Ｂ	(3.5)	−	11.0
183	ＳＤ24	須恵器	杯Ｂ	(2.3)	−	10.1
184	ＳＤ24	須恵器	杯Ｂ	(1.0)	−	10.1
185	ＳＤ24	須恵器	杯Ｂ	(2.1)	−	10.0
186	ＳＤ24	須恵器	壺	(3.2)	−	6.6
187	包含層	須恵器	円面硯	(2.6)	13.0	−
188	ＳＤ24	須恵器	壺Ｇ	(13.3)	−	5.4
189	ＳＤ24	須恵器	甕	(7.1)	26.1	−
190	ＳＤ24	須恵器	甕	(7.6)	20.3	−
191	ＳＤ24	須恵器	杯蓋	4.3	15.3	−
192	ＳＫ13	須恵器	杯身	(3.3)	10.0	−
193	ＳＫ27	須恵器	高杯	8.2	12.6	10.1
194	ＳＤ24	須恵器	鉢	(4.9)	−	8.9
195	ＳＤ24	土師器	甑	(4.5)	−	−
196	ＳＸ26	土師器	甕	(4.6)	13.6	−
197	ＳＸ26	土師器	甕	(4.1)	14.2	−
198	ＳＸ26	土師器	高杯	(4.2)	16.8	−
199	ＳＸ26	土師器	高杯	(5.5)	16.5	−
200	ＳＸ26	土師器	高杯	(7.6)	−	11.4
201	ＳＸ26	土師器	甑？	(4.9)	(3.0)	(1.1)
202	ＳＫ29	弥生土器	壺	(14.5)	13.6	−
203	ＳＸ26	弥生土器	壺	(8.3)	13.4	−
204	ＳＸ26	弥生土器	甕	(7.5)	10.2	−
205	ＳＫ27	弥生土器	甕	(5.2)	9.6	−
206	ＳＫ27	弥生土器	甕	(4.7)	10.0	−
207	ＳＫ27	弥生土器	壺	(1.6)	(7.0)	−
208	ＳＸ26	弥生土器	壺	(2.5)	14.4	−
209	ＳＫ27	弥生土器	高杯	(8.0)	−	−
210	ＳＫ29	弥生土器	器台	(2.2)	−	(4.0)
211	ＳＸ26	弥生土器	器台	(1.9)	23.1	−
212	ＳＸ26	弥生土器	器台	(1.8)	−	8.7
213	ＳＸ26	弥生土器	甕	(4.5)	−	3.4
214	ＳＸ26	弥生土器	甕	(4.6)	−	3.6
215	ＳＫ29	弥生土器	甕	(3.2)	−	8.4
216	ＳＸ26	弥生土器	甕	(7.9)	−	10.0
217	ＳＸ26	埴輪	円筒埴輪	11.3	9.8	0.8
218	ＳＸ26	埴輪	円筒埴輪	6.7	8.3	0.7
219	ＳＸ26	埴輪	円筒埴輪	8.0	8.0	1.1
220	ＳＥ15	埴輪	円筒埴輪	9.4	4.6	2.2
221	包含層	埴輪	円筒埴輪	5.3	−	0.8
222	ＳＥ15	埴輪	円筒埴輪	8.5	−	1.2
223	ＳＸ26	埴輪	円筒埴輪	1.8	2.9	1.4
224	ＳＸ26	埴輪	円筒埴輪	1.5	7.5	1.2
225	ＳＸ26	埴輪	円筒埴輪	2.9	11.7	1.4

番号	出土遺構	種類	器形	器高	口径	底径
226	ＳＸ26	埴輪	円筒埴輪	1.6	−	1.2
227	ＳＸ26	埴輪	円筒埴輪	1.6	2.2	−
228	ＳＸ26	埴輪	円筒埴輪	5.1	5.3	1.2
229	ＳＸ26	埴輪	円筒埴輪	5.6	4.3	0.8
230	ＳＸ26	埴輪	円筒埴輪	7.1	5.7	0.7
231	ＳＸ26	埴輪	円筒埴輪	5.2	6.5	0.9
232	包含層	埴輪	円筒埴輪	9.5	7.9	1.4
233	ＳＸ26	埴輪	朝顔形埴輪	7.3	9.7	1.7
234	ＳＤ24	埴輪	形象埴輪	5.2	5.4	2.2
235	ＳＸ26	埴輪	囲い形	7.1	6.7	1.8
236	ＳＥ15	金属製品	鉄釘	3.8	1.1	0.6
237	ＳＥ15	金属製品	鉄釘	4.0	0.9	0.6
238	ＳＫ11	金属製品	鉄釘	5.0	1.0	0.6
239	ＳＫ11	金属製品	鉄釘	5.8	1.4	0.6
240	ＳＥ15	金属製品	鉄釘	7.0		0.5
241	ＳＥ15	金属製品	鉄釘	7.6	0.9	0.6
242	ＳＫ11	金属製品	鉄鏃	9.7	1.5	1.3
243	ＳＫ11	金属製品	鉄鎌	19.5	13.0	0.7
244	ＳＥ15	金属製品	寛永通寶	2.4	0.6	
245	ＳＥ15	金属製品	皇宋	2.4	0.8	
246	ＳＥ15	石製品	五輪塔	10.7	7.5	5.8
247	ＳＥ15	石製品	砥石	7.1	5.2	1.2
248	ＳＥ15	石製品	砥石	4.8	3.6	0.7
249	ＳＸ07	石製品	砥石	22.4	13.7	6.0
250	ＳＥ15	石製品	砥石	14.9	9.8	9.3
251	ＳＥ15	石製品	石臼	13.8	3.8	3.1
252	ＳＥ15	石製品	石臼	15.2	7.3	5.0
253	ＳＥ15	石製品	軸受け？	14.9	14.5	7.1
254	ＳＥ15	石製品	五輪塔	18.1	17.1	12.0
255	Ｐ001	石製品	五輪塔	51.4	48.6	38.0
256	ＳＥ15	石製品	石仏	44.3	26.5	12.9
257	ＳＫ20	石製品	砥石	10.6	7.4	2.6
258	ＳＫ11	石製品	砥石	7.5	6.7	5.9
259	ＳＫ29	石製品	砥石	7.5	8.4	2.6
260	ＳＤ24	石製品	砥石	7.8	5.9	2.4
261	ＳＫ27	石製品	砥石	12.5	4.3	2.0
262	包含層	石製品	叩石	7.7	5.3	4.5
263	包含層	石製品	叩石	8.5	8.3	4.1
264	Ｐ247	石製品	車輪石	4.8	4.6	1.7
265	ＳＸ07	石製品	打製石鏃	1.9	1.8	0.2
266	ＳＤ17	石製品	石庖丁	3.4	4.0	1.0
267	Ｐ130	石製品	剥片	3.2	3.6	1.0
268	ＳＥ15	石製品	剥片	3.1	2.4	0.7

4 まとめ

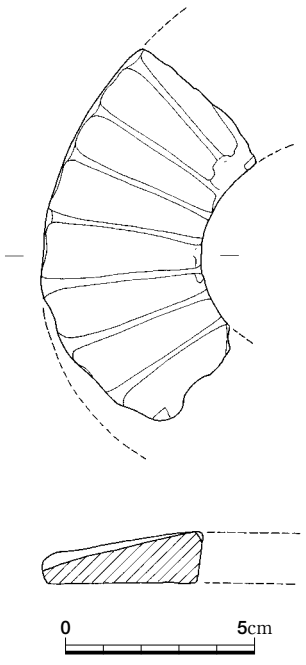
右京第740次調査では弥生時代から江戸時代までの遺構、遺物を確認した。検出遺構の多くは中近世のものであるが、長岡京期前後まで遡ることができる風呂川の旧河岸斜面や土坑も検出している。また、出土遺物では古墳時代の緑色凝灰岩製車輪石や長岡京期前後の緡銭、中近世の良好な遺物群や石製品があり、注目すべき成果を収めることができた。ここでは周辺地域における調査成果を含めた若干の検討を行い、まとめに代えたい。

（1）弥生時代

本調査では弥生時代の明確な遺構は検出されなかったが、後世の遺構から弥生時代中期から後期の遺物が出土している。土器は遺存状況が芳しくないが、近江系の特徴を有する個体を一定量含んでいる。近江系土器は右京第26[(10)]・716次調査地などでも出土しているが、雲宮遺跡、開田城ノ内遺跡、長法寺遺跡および長法寺谷山遺跡、そして当地を含む今里遺跡から井ノ内遺跡など、市域の北半部において比較的集中して分布する。一方、南栗ケ塚遺跡、硲遺跡など市域の南半では希薄であり、各遺跡の盛衰時期差、人や物の流れの偏在性などが推察できる。

（2）古墳時代

これまで今里遺跡の古墳時代は前中期の集落や首長墳に関して、主に遺跡推定範囲の東半部（氾濫低地）に注目が集まっていた[(11)]。近年、低位段丘上の調査が増加し、右京第544次調査など南西部で集落に関連する遺構の確認が相次いでいる。本調査では竪穴住居などは検出されなかったが、前期古墳の主要な副葬品である緑色凝灰岩製車輪石の破片、形象埴輪を含む埴輪が出土した点が注目される。



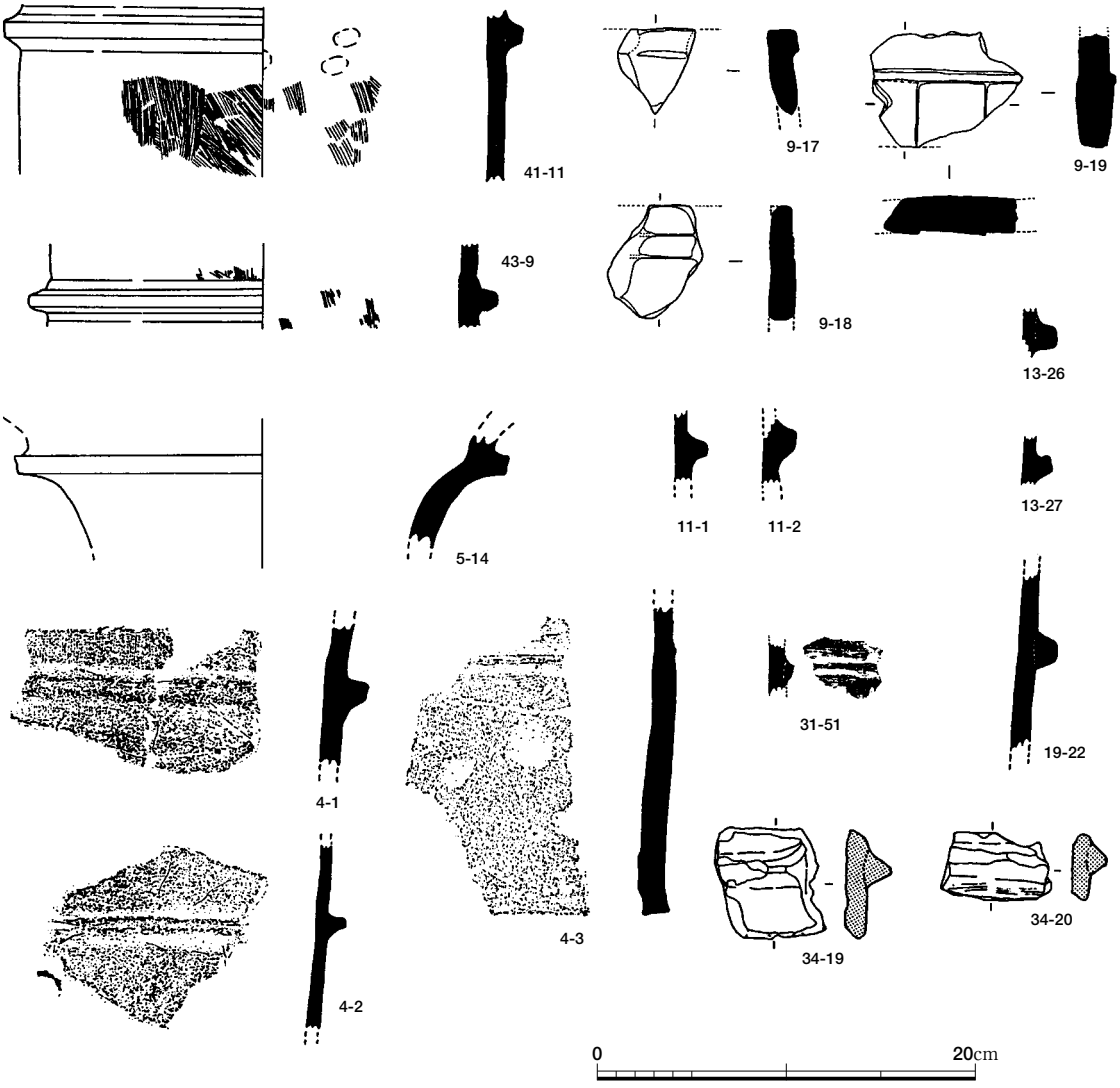
第44図　右京第318次調査出土車輪石実測図（1/2）

本調査地から北東約100mの地点で行われた右京第318次調査では、第44図に再録した緑色凝灰岩製車輪石が中世の溝から出土している。車輪石は10cm程度の破片であり、外面に放射状の凹帯を有し、底面は平坦である。外面の凹帯と底面の一部が摩滅しており、内外面に鉄分が付着する。破片の最も厚い部分は1.4cmで、本調査のものに比べて薄いものである。隣接する2地点で車輪石が出土したことから、同報告で既に指摘されているように、周辺に未発見の古墳が埋もれている可能性を検討しなければならない。また、本調査と右京第318次調査の車輪石が中世後半期の遺構から出土したことから、乙訓寺の整備や周辺の中世集落の拡大など中世後半～近世初頭に大規模な開発が行われたものと推測できる。

車輪石とともに古墳の存在を推測させるのが、形象埴輪を含む20数点の埴輪片である。いずれも12cmまでの小片であるが、ヨコハケを施す土師質のものである。本調査地周辺では十数地点で埴輪の出土が報告されており、第45図には図示されたものを再録した。埴輪

はすべて土師質で、右京第83次調査例（４－１・２）や右京第653次調査例（41－１）などタガの突出が明瞭なものが多いが、資料数は限られている。埴輪出土地点はその立地条件によって氾濫低地と低位段丘に二分することができる（第46図）。氾濫低地は今里車塚古墳、今里庄ノ淵古墳の周辺の出土地点（11～13・16・19・21）と、風呂川周辺の出土地点（７・９・22）に分かれ、後者の埴輪には西側の低位段丘からもたらされた可能性が考えられる。一方、当地を含む低位段丘上の出土地点（４・５・18・31・34・36・41・43）は両古墳から埴輪がもたらされた可能性のより少ない地域である。乙訓寺が立地する低位段丘の縁辺部は眼下に低地の集落を望むことができる場所で、古墳の立地としても有望な場所と考えられる。しかし、現在のところ出土地点の分布に集中傾向は認められず、古墳の存在をより確かなものにすることはできない。

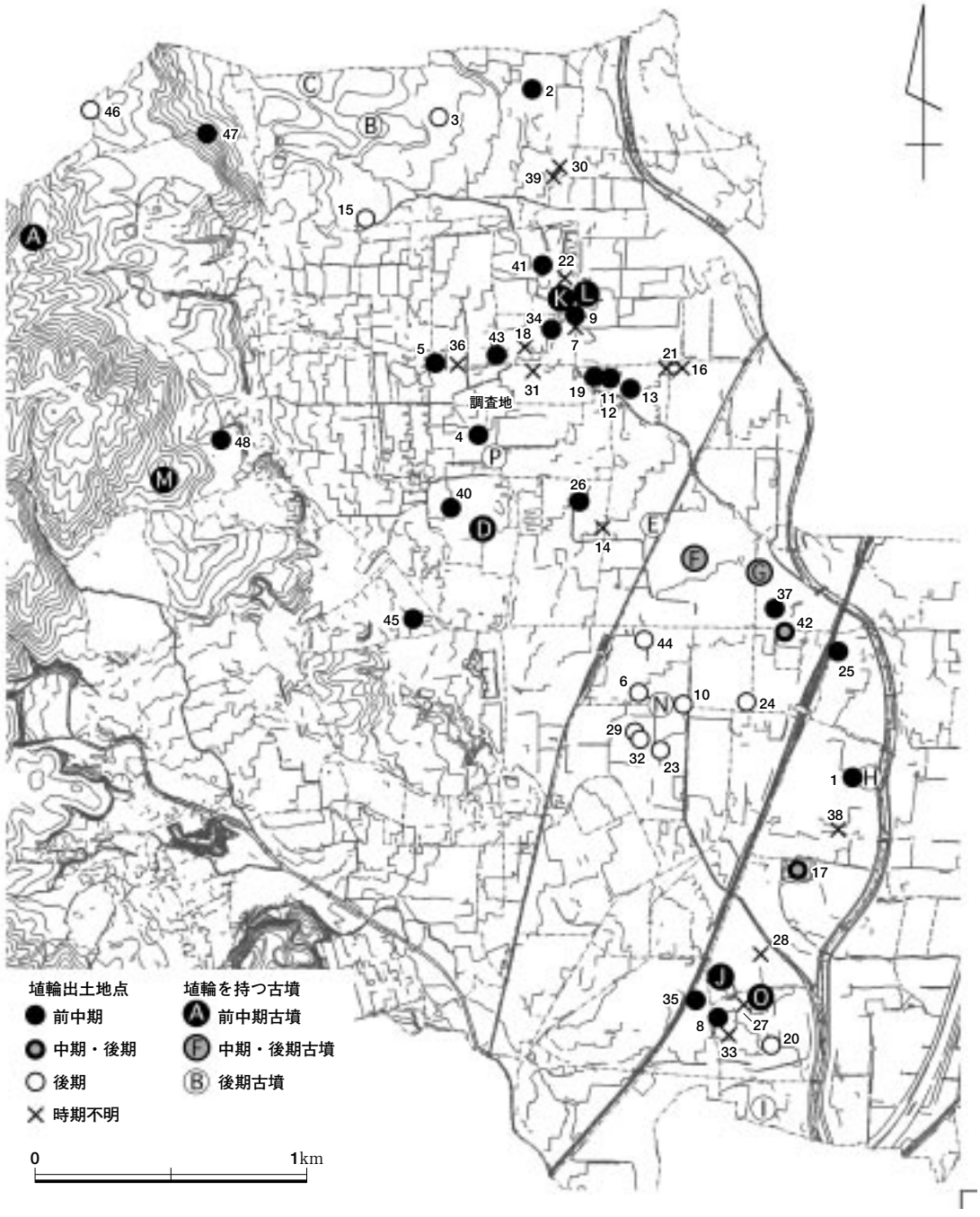
長岡京市域では古墳以外の埴輪の出土が48地点で報告されている（第46図、付表－４）。出土地点は西山山麓の北部から小畑川の西岸にかけて分布しているが、小泉川流域および小畑川東岸の



※埴輪の番号は出土地点番号－報告書遺物番号。出土地点番号は、第46図、付表－４に対応する。

第45図　調査地周辺出土埴輪資料（1/4）

氾濫低地には認められない。出土地点を前・中期と後期の埴輪に分ければ、まず両者の分布域がほとんど重複しないことが確認される。また、後期の埴輪は井ノ内古墳群（Ｂ・Ｃ）や塚本古墳（Ｎ）などほぼ同時期の古墳の周辺に限って出土しているが、前・中期では同時期の古墳以外に上里遺跡（２）、今里遺跡の低位段丘部（本調査地、４・５・34・41・43）、今里北ノ町遺跡（11～13・19）、神足遺跡の低位段丘縁辺部（１・17・25）においても出土が報告されている。埴輪出土地点のすべてが削平された古墳の存在を予察するものではない。しかし、前・中期の集落や耕地の範囲を含めて検討すれば、古墳の存在をより確実に予想できるのではないだろうか。



第46図　埴輪出土地点分布図（1/25000）

付表－4　埴輪出土地点一覧表

番号	調査地	出土遺構	埴輪の種類	時期
1	R10	竪穴住居	円筒埴輪	中期
2	R25	長岡京期土坑	円筒埴輪・朝顔形埴輪	中期
3	R48	中世包含層	埴輪	後期
4	R83K	時期不明土坑	円筒埴輪	中期
5	R83F-H	包含層	朝顔形埴輪	中期
6	R96	長岡京期整地層	円筒埴輪	後期
7	R110	包含層	埴輪か	
8	R121	長岡京期整地層	埴輪	中期
9	R141	包含層	埴輪・形象埴輪［家］	中期
10	R148	奈良時代溝	埴輪	後期
11	R175	包含層	埴輪	中期
12	R185	包含層	埴輪	
13	R190	包含層	円筒埴輪	中期
14	R224	盛土	埴輪	
15	R240	長岡京期井戸	埴輪	後期
16	R249	包含層・長岡京期溝	円筒埴輪	
17	R300	包含層・中世以降	円筒埴輪・ヒレ付円筒埴輪・形象埴輪［家・蓋］	中期～後期
18	R318	中世溝	埴輪	
19	R323	流路	円筒埴輪・朝顔形埴輪	中期
20	R329	包含層	円筒埴輪	後期
21	R333	中世包含層	埴輪	
22	R362		埴輪	
23	R410	中世包含層	円筒埴輪	後期
24	R436	長岡京期土坑	円筒埴輪	後期
25	R451	土坑	形象埴輪［蓋］	中期
26	R469	溝	埴輪	中期
27	R471	平安時代溝	円筒埴輪・形象埴輪	
28	R473		埴輪	
29	R475	長岡京期土坑	円筒埴輪	後期
30	R502	包含層	朝顔形埴輪	
31	R505	包含層	埴輪か	
32	R515	包含層	埴輪	後期
33	R530		円筒埴輪・形象埴輪	
34	R549	包含層	埴輪	中期
35	R560	撹乱坑	円筒埴輪	中期
36	R580	中世遺構	円筒埴輪	
37	R618	中世土坑	円筒埴輪・ヒレ付円筒埴輪	中期
38	R631		埴輪	
39	R643	包含層	円筒埴輪	
40	R646	墳丘盛土	朝顔形埴輪	前期～中期
41	R653	竪穴住居	円筒埴輪	中期
42	R669	落ち込み状遺構	円筒埴輪・朝顔形埴輪	中期～後期
43	R716	竪穴住居	円筒埴輪	中期
44	立会1978013	包含層	円筒埴輪	後期
45	立会1994200	方墳か	円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪［蓋］	中期
46	立会1998180	表土	円筒埴輪	後期
47	北平尾古墳群1	藪土	円筒埴輪・朝顔形埴輪	中期
48	南原東古墳群2		円筒埴輪	前期～中期
記号	古墳名		埴輪の種類	時期
A	カラネガ岳2号墳		普通円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪［家］	中期
B	井ノ内3号墳・井ノ内4号墳		普通円筒埴輪・形象埴輪［家・盾・馬］	後期
C	井ノ内車塚古墳		普通円筒埴輪・形象埴輪	後期
D	宇津久志2号墳		形象埴輪［家］	中期
E	開田10号墳		普通円筒埴輪・形象埴輪［動物］	後期
F	開田5・6号墳		普通円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪［家］	中期～後期
G	開田古墳群東羅支群5・6号墳		普通円筒埴輪・ヒレ付円筒埴輪・形象埴輪［家か］	中期～後期
H	丸藪古墳		円筒埴輪・朝顔形埴輪	後期
I	境野6・7号墳		普通円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪［家］	後期
J	恵解山古墳		円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪［家・蓋］	中期
K	今里車塚古墳		普通円筒埴輪・ヒレ付円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪［家・靱か・盾・蓋］	中期
L	今里庄ノ渕古墳		普通円筒埴輪	中期
M	長法寺南原古墳		普通円筒埴輪・ヒレ付円筒埴輪・朝顔形埴輪	前期
N	塚本古墳		普通円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪［家・石見型盾・蓋・人物・動物・靱か・大刀］	後期
O	南栗ケ塚古墳		普通円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪［家］	中期
P	舞塚１号墳		普通円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪［人物・動物］	後期

※各調査地、古墳の文献は次項に掲載

＜長岡京市域埴輪出土地点参考文献＞

埴輪出土地

1　山本輝雄・久保哲正「長岡京跡右京第10次調査」『長岡京市報告書』第５冊　1980年
2　山本輝雄『長岡京跡右京第22・25次調査報告書』『長岡京市センター報告書』第11集　1997年
3　岩崎　誠「長岡京跡右京第48次調査概要」『長岡京市報告書』第19冊　1987年
4　山口　博他「長岡京跡右京第83・105次発掘調査概要」『京都府センター概報』第９冊　1984年
5　山口　博他「長岡京跡右京第83・105次発掘調査概要」『京都府センター概報』第９冊　1984年
6　木村泰彦・伊辻忠司「長岡京跡右京第96次調査概要」『長岡京市センター報告書』第１集　1984年
7　黒坪一樹「長岡京跡右京第110次発掘調査報告」『京都府センター概報』第８冊　1983年
8　岩崎　誠「長岡京跡右京第121次調査概要」『長岡京市センター報告書』第１集　1984年
9　山下　正「長岡京跡右京第141次発掘調査概要」『京都府センター概報』第11冊　1984年
10　黒坪一樹他「長岡京跡右京第148次発掘調査概要」『京都府センター概報』第11冊　1984年
11　小田桐　淳「右京第175・185次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和59年度　1985年
12　小田桐　淳「右京第175・185次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和59年度　1985年
13　木村泰彦「右京第190次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和60年度　1987年
14　小田桐　淳「右京第224・225次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和60年度　1987年
15　石尾政信「長岡京跡右京第240次発掘調査概要」『京都府センター概報』第23冊　1987年
16　山本輝雄「長岡京跡右京第249次調査概要」『長岡京市報告書』第18冊　1987年
17　岩崎　誠『長岡京市センター報告書』第５集　1990年
18　原　秀樹「長岡京跡右京第318次調査概要」『長岡京市報告書』第22冊　1989年
19　原　秀樹「右京第323次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和63年度　1990年
20　中島皆夫「右京第329次調査概報」『長岡京市センター年報』平成元年度　1991年
21　小田桐　淳「右京第333次調査概報」『長岡京市センター年報』平成元年度　1991年
22　岩崎　誠「右京第362次調査略報」『長岡京市センター年報』平成２年度　1992年
23　小田桐　淳「長岡京跡右京第410次調査概要」『長岡京市報告書』第31冊　1993年
24　小田桐　淳「右京第436次調査概報」『長岡京市センター年報』平成５年度　1995年
25　中島皆夫「右京第451次調査概報」『長岡京市センター年報』平成５年度　1995年
26　中島皆夫「右京第469次調査概報」『長岡京市センター年報』平成６年度　1996年
27　原　秀樹「右京第471次調査概報」『長岡京市センター年報』平成６年度　1996年
28　岩崎　誠「右京第473次調査概報」『長岡京市センター年報』平成６年度　1996年
29　木村泰彦「長岡京跡右京第475次調査概要」『長岡京市報告書』第33冊　1995年
30　原　秀樹「右京第502次調査概報」『長岡京市センター年報』平成７年度　1997年
31　岩崎　誠「右京第505次調査概報」『長岡京市センター年報』平成７年度　1997年
32　中島皆夫「長岡京跡右京第515次調査概要」『長岡京市報告書』第36冊　1997年
33　原　秀樹「長岡京跡右京第530次調査概要」『長岡京市センター報告書』第13集　1999年
34　中島皆夫「長岡京跡右京第549次調査概要」『長岡京市報告書』第36冊　1997年
35　中島皆夫「右京第560次調査概報」『長岡京市センター年報』平成８年度　1998年
36　中島皆夫「右京第580次調査の出土遺物」『長岡京市センター報告書』第19集　2000年
37　山本輝雄「右京第618次調査概報」『長岡京市センター年報』平成10年度　2000年
38　原　秀樹「長岡京跡右京第631次調査概要」『長岡京市報告書』第41冊　2000年
39　原　秀樹「右京第643次調査概報」『長岡京市センター年報』平成11年度　2001年
40　清家　章他「今里大塚古墳第３次調査概要」『長岡京市報告書』第41冊　2000年
41　小畑佳子「長岡京跡右京第653次調査概要」『長岡京市報告書』第41冊　2000年
42　小畑佳子「右京第669次調査概報」『長岡京市センター年報』平成11年度　2001年
43　中島皆夫『長岡京跡右京第716次発掘調査報告』『長岡京市センター報告書』第23集　2001年

44　中尾秀正「長岡京跡第7813次立会調査概要」『長岡京市報告書』第12冊　1984年
45　山本輝雄他「第94200次立会調査概報」『長岡京市センター年報』平成６年度　1996年
46　山本輝雄「第98180次立会調査概報」『長岡京市センター年報』平成10年度　2000年
47　吉岡博之・木村泰彦他「北平尾古墳発掘調査報告」『長岡京跡研究所報告書』第１集　1979年
48　岩崎　誠「力池古墳、南原東２号墳周辺調査概報」『長岡京市センター年報』昭和58年度　1984年

古墳

A　和田晴吾・宇野隆夫他「京都府長岡京市カラネガ岳一・二号墳の発掘調査」『史林』第64巻３号　1981年
B　小田桐　淳「右京第605次調査略報」『長岡京市センター年報』平成10年度　2000年
C　清家　章他「井ノ内車塚古墳第３次調査概要」『長岡京市報告書』第41冊　2000年
D　白川成明「右京第321次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和63年度　1990年
E　中島皆夫「右京第600次調査概報」『長岡京市センター年報』平成10年度　2000年
F　山本輝雄「右京第376次調査略報」『長岡京市センター年報』平成３年度　1993年
G　岩崎　誠「右京第490次調査概報」『長岡京市センター年報』平成６年度　1996年
　岩崎　誠『長岡京市センター報告書』第７集　1996年
H　原　秀樹「右京第307次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和63年度　1990年
I　小田桐　淳「立会調査」『長岡京市センター年報』平成２年度　1992年
J　三上貞二『恵解山古墳周濠調査概報』『長岡京市報告書』第２冊　1975年
　三上貞二『恵解山古墳周濠第二次調査概報』『長岡京市報告書』第３冊　1977年
　山本輝雄他「恵解山古墳第3次発掘調査概要」『長岡京市報告書』第８冊　1981年
　山本輝雄『史跡恵解山古墳』『長岡京市報告書』第25冊　1990年
K　高橋美久二他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」『京都府概報』第２分冊　1980年
　吉岡博之「長岡京跡右京第45次発掘調査及び第8013次立会調査概要」『長岡京市報告書』第８冊　1981年
　石尾政信「長岡京跡右京第84次発掘調査概要」『京都府センター概報』第３冊　1982年
　木村泰彦他「長岡京跡右京第352次調査概要」『長岡京市報告書』第27冊　1991年
　原　秀樹・山本輝雄他「右京第488次調査略報」『長岡京市センター年報』平成６年度　1996年
　岩崎　誠「長岡京跡右京第582次調査概要」『長岡京市報告書』第39冊　1999年
L　高橋美久二他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」『京都府概報』第２分冊　1980年
　石尾政信「長岡京跡右京第171次調査概要」『京都府センター概報』第15冊　1985年
M　都出比呂志・福永伸哉他『長法寺南原古墳の研究』『長岡京市報告書』第30冊　1992年
N　木村泰彦・近澤豊明「長岡京跡右京第106次調査概要」『長岡京市センター報告書』第１集　1984年
　竹井治雄・吉田野乃「長岡京跡右京第266次発掘調査概要」『京都府センター概報』第27冊　1988年
　中尾秀正・白川成明「長岡京跡第8104次立会調査概要」『長岡京市報告書』第９冊　1982年
O　岩崎　誠他「長岡京跡右京第39次調査概要」『長岡京市報告書』第11冊　1983年
P　山口　博他「長岡京跡右京第83・105次調査概要」『京都府センター概報』第９冊　1984年
　小田桐　淳・近澤豊明「第83093次立会調査概報」『長岡京市センター年報』昭和58年度　1984年
　花村　潔「立会調査」『長岡京市センター年報』平成４年度　1994年

（3）長岡京期

a．四条条間北小路と西三坊坊間小路

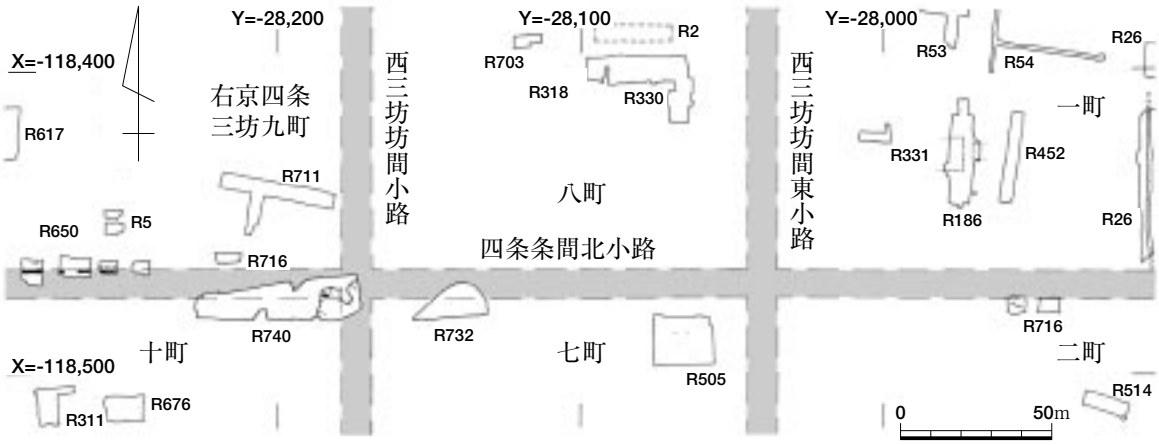
本調査では長岡京期の明確な遺構を確認できなかった。しかし、長岡京期前後と考えられる緡銭が出土した土坑、風呂川北岸の斜面など重要な遺構が存在する。これらの遺構を検討するための重要な要素が、本調査での確認が期待されていた四条条間北小路、西三坊坊間小路の有無と位置関係である。

これまでの発掘調査では、四条条間北小路が右京域で6地点、左京域では4地点、西三坊坊間小路は右京域で4地点の検出例がある（付表－5）。右京域における四条条間北小路の検出地点は本調査地の西側低位段丘部の2箇所（1・2）と東側の氾濫低地4箇所（6～9）があるが、西三坊坊間小路は調査個所が少なく、データの信頼性を高めるには今後の検出例の増加が必要である。仮に西三坊坊間小路西側溝をＹ＝－28,175に設定すれば、調査例が多い西二坊大路西側溝（右京第26次調査溝ＳＤ01　Ｙ＝－27,912.2）までの距離は約263ｍで、この間に二町の宅地域と二本の小路幅を確保できる。以上のような検出例から復原される周辺条坊は、四条条間北小路の南側溝

付表－5　四条条間北小路・西三坊坊間小路検出地点一覧表

四条条間北小路									
番号	側溝	次数	遺構番号	X座標	番号	側溝	次数	遺構番号	X座標
1	北	R83	SD55	－118,466.2	6	南	R37	SD03	－118,476.1
2	北	R650	SD08	－118,466.0～1	7	南	R229	SD01	－118,475.9
3	北	L2	SD65	－118,469.8	8	南	R249	SD01	－118,476.1
4	北	L81	SD05	－118,467.5	9	南	R333	SD01	－118,475.8
5	北	L92	SD10	－118,470.7	10	南	L2	SD66	－118,475.9
					11	南	L92	SD13	－118,478.6
					12	南	L305	SD01	－118,476.8
西三坊坊間小路									
番号	側溝	次数	遺構番号	Y座標	番号	側溝	次数	遺構番号	Y座標
13	東か	R411	SD08	－28,163.5	15	西	R105	SD71	－28,171.4
14	東か	立会83082	－	－	16	不明	R517	SD27	－28,179.3

※番号は四条条間北小路・西三坊坊間小路検出地点参考文献と対応する。



第47図　周辺地域の長岡京条坊と調査（1/2500）

が本調査区のほぼ中央部（Ｘ＝－118,475）、西三坊坊間小路西側溝が調査区の北辺に推定され、調査区の北東隅付近に条坊交差点が位置することとなる。

これまで述べてきたように、本調査区では四条条間北小路南側溝、西三坊坊間小路西側溝は確認されておらず、右京四条三坊九町の北東隅にあたる範囲でも建物、柵、井戸などは検出されなかった。また、条坊交差点が推定される位置では風呂川北岸の斜面を検出しており、斜面の最下層には古墳時代と長岡京期前後の遺物が含まれていた。このことから風呂川は長岡京期以前から条坊交差点の推定位置を流れており、長岡京の造営に際しても流路の変更など大きな改変は加えられなかったと考えられる。

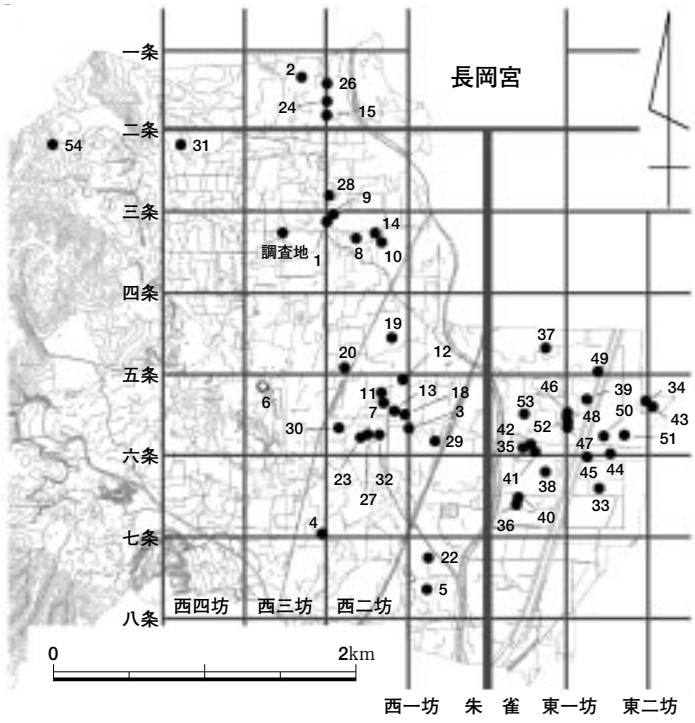
和同開珎、萬年通寶、神功開寶を含む緡銭が出土した土坑ＳＫ27は、想定される四条条間北小路南側溝の北約１ｍに位置する。しかし、南側溝が検出できなかったことから、土坑の時期や性格を検討するための要素は少ない。土坑が長岡京期のものであるならば、条坊道路や橋の敷設に伴う小規模な埋め立てなど、流路に造作を加える際の祭祀に関連するものとも考えられる。

＜四条条間北小路・西三坊坊間小路検出地点参考文献＞

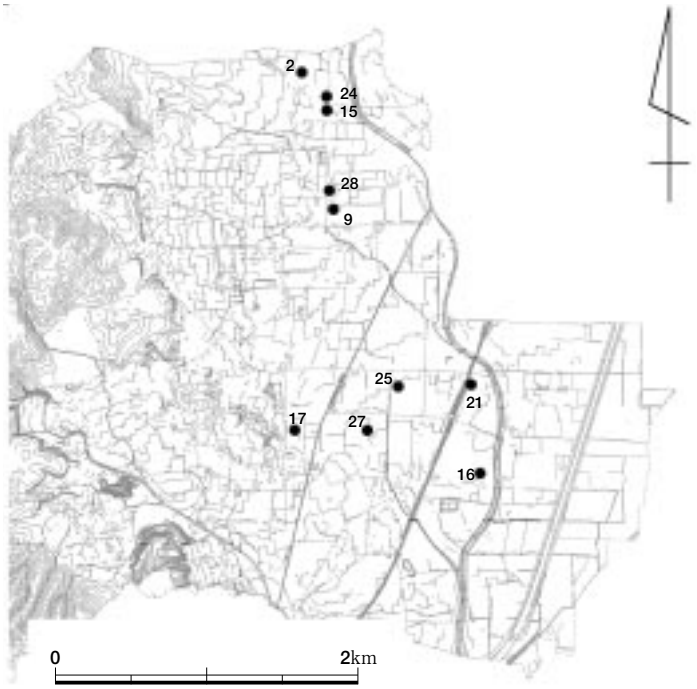
1　山口　博他「長岡京跡右京第83・105次調査概要」『京都府センター概報』第９冊　1984年
2　中島皆夫『長岡京跡右京第650次・今里遺跡発掘調査報告』『長岡京市センター報告書』第17集　2000年
3・10　高橋美久二「長岡京跡左京三条二坊第１次発掘調査概要」『京都府概報』　1975年
4　奥村清一郎・國下多美樹「長岡京跡左京第81次発掘調査概要」『向日市報告書』第10集　1983年
5・11　上村和直・吉川義彦「左京三条四坊・四条四坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和57年度　1984年
6　岩崎　誠他「右京第37次調査概要」『長岡京市報告書』第12冊　1984年
7　原　秀樹「右京第229次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和61年度　1988年
8　山本輝雄「長岡京跡右京第249次調査概要」『長岡京市報告書』第18冊　1987年
9　小田桐　淳「右京第333次調査概報」『長岡京市センター年報』平成元年度　1991年
12　國下多美樹「長岡京跡左京第305次発掘調査概要」『向日市報告書』第38集　1994年
13　石尾政信「長岡京跡右京第411次発掘調査概要」『京都府センター概報』第53冊　1993年
14　小田桐　淳・岩崎　誠「立会調査」『長岡京市センター年報』昭和58年度　1984年
15　山口　博他「長岡京跡右京第83・105次調査概要」『京都府センター概報』第９冊　1984年
16　山本輝雄「右京第517次調査略報」『長岡京市センター年報』平成７年度　1997年

b．古代銭貨

土坑ＳＫ27からは60枚前後の銭貨が緡銭として出土した。萬年通寶、神功開寶を含むことは確認できたが、銭種構成および実数は明らかでない。前項までに土坑ＳＫ27は長岡京期から平安時代前期の遺構で、出土した緡銭には湧水坑に関わる祭祀や風呂川の小規模な造作に伴う祭祀遺物の可能性を想定した。長岡京跡出土の古代銭貨に関しては松崎俊郎氏の研究[12]があるため、ここでは長岡京市域の出土事例を示し、出土地点の分布傾向や出土遺構の様相を検討する。



第48図　古代銭貨出土地点分布図－１（1/50000）



第49図　古代銭貨出土地点分布図－２（1/50000）

長岡京市域では54地点で古代銭貨の出土が報告されている（付表－６）。銭種には和同開珎、萬年通寶、神功開寶、隆平永寶、富壽神寶、承和昌寶、貞観永寶、寛平大寶、延喜通寶があるが、神功開寶までの３種が古代銭貨の大多数を占める。点数が確認できる資料に限れば、３種の比率は和同開珎18%、萬年通寶21%、神功開寶61%で神功開寶の出土点数が最も多い。

第48図には和同開珎、萬年通寶、神功開寶の出土地点を示した。長岡京跡右京域では西二坊大路周辺の二条大路以北と三条大路周辺、右京六条二坊域内に出土地点のまとまりが認められる。このうち右京六条二坊六町では「市」墨書土器[13]が出土しており、ほぼ対称位置にあたる左京域の東一坊大路周辺の分布とともに、長岡京東西市との関連も想定される。右京域の四条大路周辺は空白域として認識できるが、この区域は長岡京期の建物分布[14]における空白域ともほぼ重複している。今後の再検討が必要であるが、京域造営状況の一端を表すものかも知れない。

第49図は富寿神寶以降の古代銭貨の出土地点を示す。市域の小畑川東

付表－6　古代銭貨出土地点一覧表

番号	調査地	出土遺構	和同開珎	萬年通寶	神功開寶	隆平永寶	富壽神寶	承和昌寶	長年	饒益	貞観永寶	寛平大寶	延喜通寶	乾元	不明
1	R7-南方部	条坊側溝・土坑	1	1	1										
2	R25	包含層	1			2									
3	R77	条坊側溝	1		1										
4	R95	自然流路	1												
5	R126	条坊側溝	1												
6	R130	墳墓													1
7	R155	井戸		1											
8	R168	包含層			1										
9	R239	条坊側溝・包含層	1		1						3				
10	R245	溝		1											
11	R270	土坑			1										
12	R301	土器埋納坑			1										
13	R314	土坑			1										
14	R333	条坊側溝			1										
15	R335-E2･F	条坊側溝･自然流路	2			1									
16	R339	土器埋納坑											2		
17	R344	土坑					24								
18	R365				2										
19	R376	古墳周溝	1		1										15
20	R389	土器埋納坑	1	1	2										1
21	R451	井戸				1									
22	R473	条坊側溝			1										
23	R475	条坊側溝	2												
24	R511	自然流路			2							13			
25	R529	井戸				1	4	3							
26	R547	柱穴		1	1										1
27	R565	条坊側溝・包含層		1	2						1				
28	R582	古墳周濠		1							1	2			
29	R630・654	区画溝	1												
30	R667	土器埋納坑		1	1										1
31	R668	井戸			1										
32	R688	条坊側溝			1										
33	L53	久我畷			1										
34	L87	条坊側溝	1	1	2										
35	L102	土坑・包含層	3		1										
36	L167	包含層	1												
37	L199	条坊側溝	○		○										
38	L204	条坊側溝・土坑	9	16	33										2
39	L212	条坊側溝	1	1	1										
40	L245	木棺墓		1	1										
41	L269		1	2	2										
42	L275	条坊側溝			4										
43	L295	区画溝	1		2										
44	L297	井戸	○												
45	L302	条坊側溝			○										
46	L311	条坊側溝	2	5	8										
47	L316	条坊側溝		2											
48	L326	条坊側溝			2										
49	L369	条坊側溝			1										
50	L407		○	○	○										
51	L414	条坊側溝	○	○	○										
52	L415	条坊側溝	1	5	14										
53	L444	井戸		1	11										
54	回向場遺跡	墳墓	3	1	21										

※各調査地の文献は次項に掲載

岸では該当銭貨の出土例がないが、向日市上植野、京都市水垂などに出土例があり、氾濫低地においても微高地上には有力な集落が存在したことを窺わせる。小畑川西岸では井ノ内遺跡の北部氾濫低地（2・15・24)、今里遺跡の東部氾濫低地（9・28)、開田城ノ内遺跡から開田遺跡(17・25・27)、神足遺跡（16・21）で出土しており、平安時代の居住域を想定できる。また、長岡京右京域の分布と比較して極端な相違を認められない点は興味深い。

古代銭貨の出土遺構は、長岡京跡では条坊側溝が出土例の多数を占め、その他には井戸、土坑、流路などがある。特殊な遺構として、土器埋納坑（12・20・31)、墓（40・54）があるがその出土例は少ない。土坑からの出土例は意外に少なく、本調査の土坑ＳＫ27のような大量出土例は富壽神寶24点が出土した地点（17）など数地点に限られる。

大量出土の定義は難しいが、条坊側溝を除く単一遺構からの10点以上の出土と仮定すれば、本市域における事例は6地点（17・19・24・38・53・54）の8例で限られた出土状況であることが分かる。さらに、神功開寶までの3種は3地点（38・53・54）で、今回のように緡銭として出土した例は長岡京跡全域でも類例を認めることができない。

＜長岡京市域古代銭貨出土地点文献＞

1　高橋美久二他「長岡宮跡昭和53年度発掘調査概要」『京都府概報』1979年度　1979年
　高橋美久二他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」『京都府概報』1980年度　第2分冊　1980年
2　山本輝雄『長岡京跡右京第22・25次調査報告書』『長岡京市センター報告書』第11集　1997年
3　山本輝雄・木村泰彦「長岡京跡右京第77次調査概要」『長岡京市報告書』第9冊　1982年
4　山本輝雄・伊辻忠司「長岡京跡右京第95次調査概要」『長岡京市センター報告書』第1集　1984年
5　岩崎　誠「右京第126次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和58年度　1984年
6　木村泰彦・中井正幸「長岡京跡右京第130次調査概要」『長岡京市センター報告書』第2集　1985年
7　岩崎　誠「右京第155次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和58年度　1984年
8　木村泰彦「右京第168次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和59年度　1985年
9　岩崎　誠「右京第239次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和61年度　1988年
10　岩崎　誠「右京第245次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和61年度　1988年
11　小田桐　淳「右京第270次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和62年度　1989年
12　山本輝雄「右京第301次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和63年度　1990年
13　小田桐　淳『長岡京跡右京第314次調査現地説明会資料』　1988年
14　小田桐　淳「右京第333次調査概報」『長岡京市センター年報』平成元年度　1991年
15　小山雅人他「長岡京跡右京第285・310・335次発掘調査概要」『京都府センター概報』第45冊　1991年
16　原　秀樹「右京第339次調査略報」『長岡京市センター年報』平成元年度　1991年
17　小田桐　淳「右京第344次調査概報」『長岡京市センター年報』平成元年度　1991年
18　小田桐　淳・中島皆夫『長岡京市センター報告書』第10集　1997年
19　山本輝雄「右京第376次調査略報」『長岡京市センター年報』平成3年度　1993年
20　原　秀樹「右京第389次調査概報」『長岡京市センター年報』平成3年度　1993年
21　中島皆夫「右京第451次調査概報」『長岡京市センター年報』平成5年度　1995年
22　岩崎　誠「右京第473次調査概報」『長岡京市センター年報』平成6年度　1996年
23　木村泰彦「長岡京跡右京第475次調査概要」『長岡京市報告書』第33冊　1995年
24　辻本和美他「長岡京跡右京第511次発掘調査概要」『京都府センター概報』第69冊　1996年
25　中島皆夫「右京第529次調査概報」『長岡京市センター年報』平成8年度　1998年

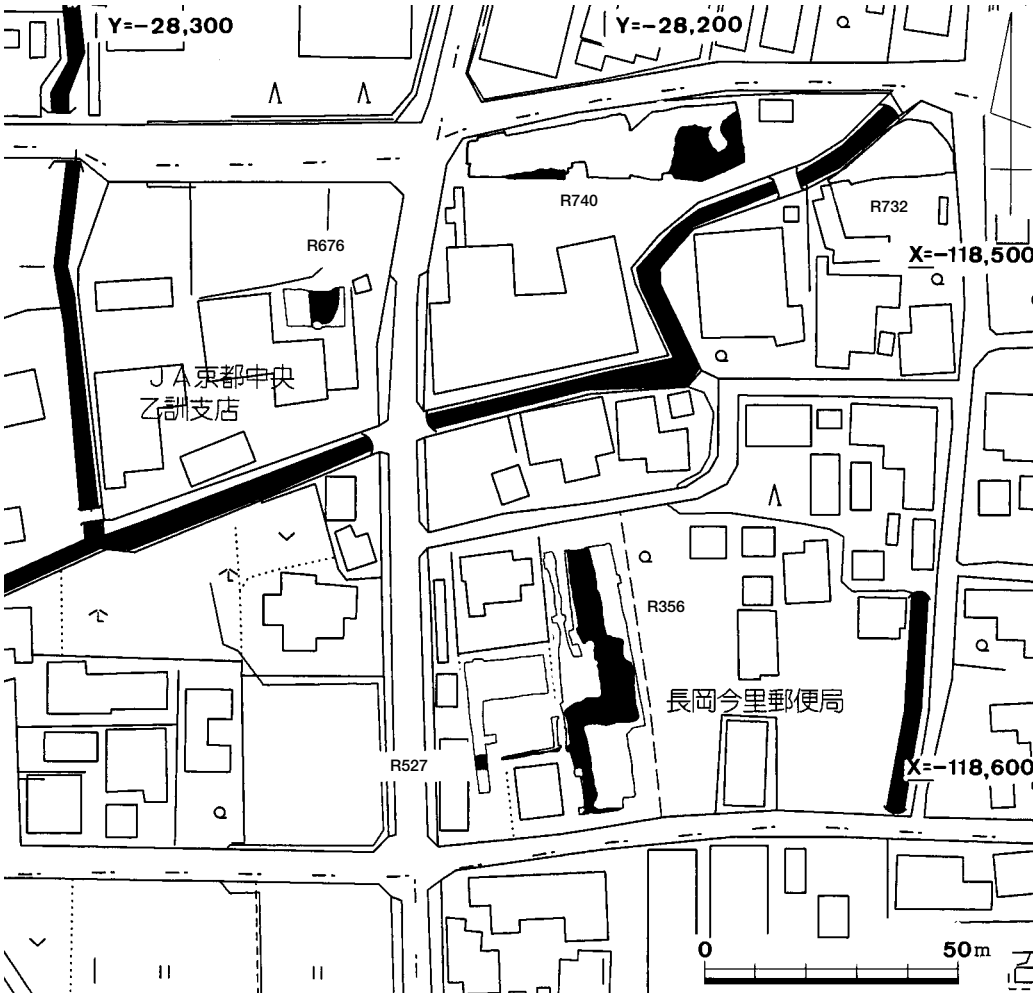
26　柴　暁彦「長岡京跡右京第547次発掘調査概要」『京都府センター概報』第77冊　1997年
27　木村泰彦「右京第565次調査概報」『長岡京市センター年報』平成９年度　1999年
28　岩崎　誠「長岡京跡右京第582次調査概要」『長岡京市報告書』第39冊　1999年
29　岩崎　誠・木村泰彦・山本輝雄『長岡京市センター報告書』第26集　2002年
30　中島皆夫「右京第667次調査概報」『長岡京市センター年報』平成11年度　2001年
31　小田桐　淳『長岡京跡右京第668次　井ノ内遺跡発掘調査報告』『長岡京市センター報告書』第21集　2001年
32　中島皆夫「右京第688次調査略報」『長岡京市センター年報』平成12年度　2002年
33　奥村清一郎他「長岡京跡左京第53次調査概要」『長岡京市報告書』第14冊　1985年
34　小田桐　淳「長岡京跡左京第87次調査概要」『長岡京市センター報告書』第１集　1984年
35　山本輝雄・近澤豊明「長岡京跡左京第102次調査概要」『長岡京市センター報告書』第２集　1985年
36　小田桐　淳「左京第167次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和61年度　1988年
37　木村泰彦「左京第199次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和63年度　1990年
38　山本輝雄「左京第204次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和63年度　1990年
39　白川成明「左京第212次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和63年度　1990年
40　中島皆夫「左京第245次調査概報」『長岡京市センター年報』平成２年度　1992年
41　岩崎　誠「左京第269次調査略報」『長岡京市センター年報』平成３年度　1993年
42　原　秀樹「長岡京跡左京第275次調査概要」『長岡京市報告書』第29冊　1992年
43　中島皆夫「左京第295次調査略報」『長岡京市センター年報』平成４年度　1994年
44　小田桐　淳「左京第297次調査略報」『長岡京市センター年報』平成４年度　1994年
45　山本輝雄「左京第302次調査略報」『長岡京市センター年報』平成５年度　1995年
46　山本輝雄「左京第311・316・326次調査略報」『長岡京市センター年報』平成５年度　1995年
47　山本輝雄「左京第311・316・326次調査略報」『長岡京市センター年報』平成５年度　1995年
48　山本輝雄「左京第311・316・326次調査略報」『長岡京市センター年報』平成５年度　1995年
49　木村泰彦「左京第369次調査概報」『長岡京市センター年報』平成７年度　1997年
50　未報告
51　山本輝雄「左京第414次調査略報」『長岡京市センター年報』平成９年度　1999年
52　木村泰彦「左京第415次調査略報」『長岡京市センター年報』平成９年度　1999年
53　小畑佳子「左京第444次調査概報」『長岡京市センター年報』平成12年度　2002年
54　『長岡京市史』資料編一　1991年

（4）中世から近世

この時期は本調査区において最も多くの遺構、遺物を確認できた。とくに流路、土坑、柱穴、井戸から土師器、瓦器、陶磁器がまとまって出土しており、乙訓地域や今里遺跡の土器様相を考察する際の貴重な資料と考えられる。

調査地周辺の中世後半期において重要な要素とされるのが今里城の存在である。今里城は戦国期、西岡地方の国人であった能勢氏の城館跡と考えられ、城の中心は右京第356・527[15]次調査が行われた小字城山付近に推定されている（第50図）。本調査では直角に折れ曲がる大規模な東西溝ＳＤ17を検出し、出土遺物から溝の埋没時期は近世初頭に位置付けられ、掘削時期を中世後半期と想定した。溝ＳＤ17のあり方や時期を考慮すれば、溝の性格については今里城との関連を検討しなければならないだろう。

本調査地と今里城の間には風呂川が流れており、川を城の北限と理解することもできる。しかし、本調査および右京第676次調査[16]の二箇所で堀状の大規模な溝が確認できたことから、風呂川の北岸にも城の縄張りが及んでいた可能性が高くなっている。また、前項にも述べたように、本調査で検出した長岡京期以前の風呂川旧斜面の方向は現在の流れとほぼ一致しており、風呂川の位

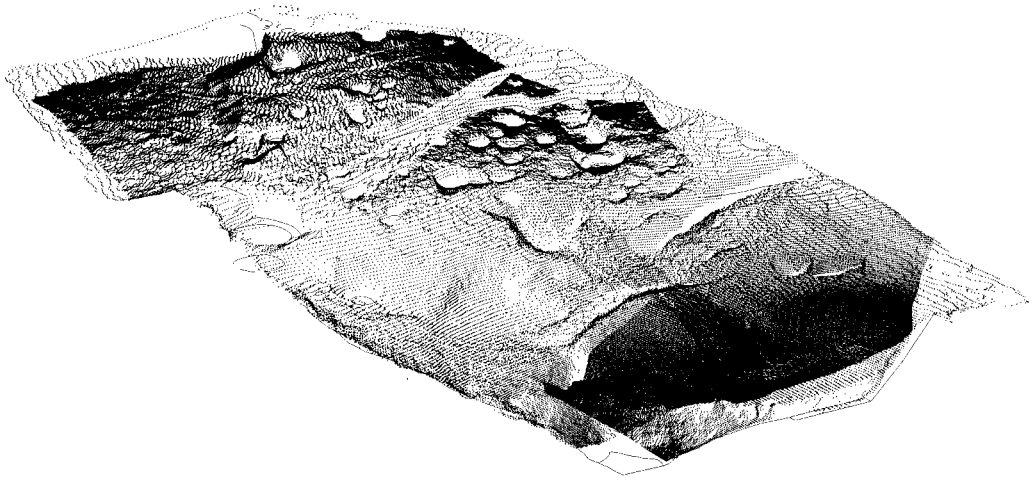


第50図　今里城周辺の調査（1/1500）

置が今里城の築城を契機に大きく変更を加えられたものでないのは明らかである。今里城は城の中心施設の防御として風呂川の流れを取り込んで築かれたと考えられ、本調査地から西側の右京第544次調査地点までの範囲が小字西ノ口と呼称されていることからも、風呂川北岸域には南岸の城中心施設とは異なった性格を有する区画の存在が予想される。右京第676次調査の溝はほぼ真北方向で右京第356・527次調査の堀と異なっていたが、溝ＳＤ17の振れ角は中心施設の堀とほぼ一致している。また、今後の周辺調査が必要であるが、本調査地より北側の右京第711[(17)]・716次調査では戦国期の遺構が希薄であり、今回の溝ＳＤ17が城の北限として築かれた可能性も検討しなければならないだろう。

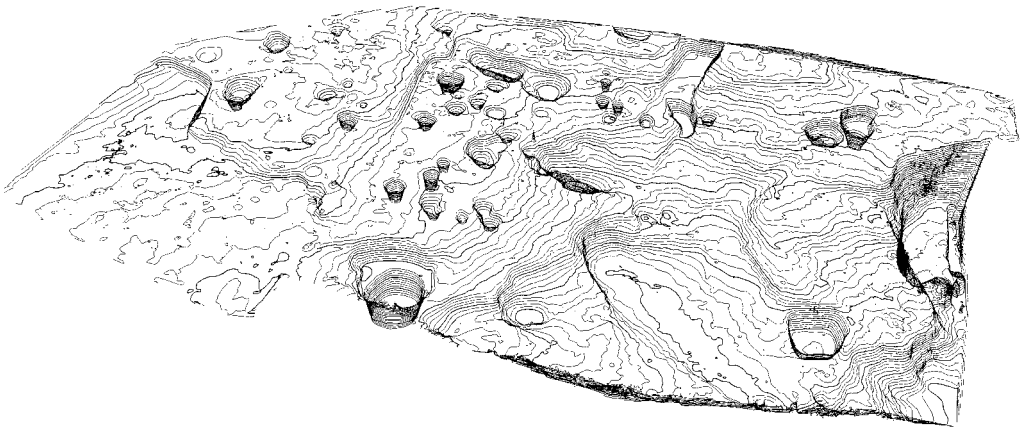
以上のように、今回の右京第740次調査について成果を簡単にまとめてきた。本調査の真価は本報告で終わるものではなく、中近世の良好な出土遺物や検出遺構の位置付けをはじめ、弥生土器、埴輪、古代銭貨、緡銭、今里城など、より詳細で広範囲な研究が必要な課題が多数残されたことを再確認したい。

最後に、本調査の東調査区では、株式会社　かんこう の協力によりレーザー波を使った三次元測量を実験的に行うことができた。ただし、あくまで実験的な利用であり、測量成果の校正作業などは行っていないため、レーザー三次元測量で得られたデータを調査区検出遺構図や各遺構の実測数値、実測図面としては利用していない。第51図はレーザー三次元測量で得られた東調査区の点群データ、第52図は点群データを元にした２cm間隔の等高線図である。第51図のそれぞれの点には三次元数値が与えられているため、相互の点を繋いだワイヤーフレームが作成可能で、色や画像の貼り付けなどによる加工で、コンピューター画面上で任意の角度、方向からの表示が可能となる。第53図は同様な手法によって第52図の等高線を斜め方向から立体的に示したものである。



第51図　東調査区レーザー三次元測量点群データ

第52図　東調査区レーザー三次元測量等高線図



第53図　東調査区レーザー三次元測量等高線立体視図

注１）日下雅義・植村善博「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一付図２　1991年
２）右京第544次　岩崎　誠『長岡京跡右京第544次・今里遺跡発掘調査報告書』『長岡京市センター報告書』第８集　1997年
右京第580次　中島皆夫『長岡京跡右京第580次・今里遺跡発掘調査報告書』『長岡京市センター報告書』第12集　1998年
右京第650次　中島皆夫『長岡京跡右京第650次・今里遺跡発掘調査報告』『長岡京市センター報告書』第17集　2000年
右京第544・580・650次　岩崎　誠・中島皆夫『長岡京市センター報告書』第19集　2000年
右京第650次　中島皆夫『長岡京跡右京第716次発掘調査報告』『長岡京市センター報告書』第23集　2001年
３）原　秀樹「右京第356次調査略報」『長岡京市センター年報』平成２年度　1992年
４）右京第２次　安藤信策「長岡京域の発掘調査」『京都考古』第５号　京都考古刊行会　1974年
右京第318次　原　秀樹「長岡京跡右京第318次調査概要」『長岡京市報告書』第22冊　1989年
右京第330次　原　秀樹「長岡京跡右京第330次調査概要」『長岡京市報告書』第24冊　1990年
右京第703次　原　秀樹「長岡京跡右京第703次調査概要」『長岡京市報告書』第43冊　2002年
５）田良島　哲「寺院」『長岡京市報告書』第23冊　1990年
６）長岡京期の遺物は　木村泰彦「長岡京期」『長岡京市史』資料編一　1991年　に準じた。
７）田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ　1966年
８）川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号　1978年
９）土坑ＳＫ27出土の緡銭に関して（財）向日市埋蔵文化財センター松崎俊郎氏よりご教示頂いた。
10）高橋美久二他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」『京都府概報』第２分冊　1980年
11）都出比呂志・山本輝雄他「古墳時代」『長岡京市史』本文編一
12）長岡京跡全域の古代銭貨については、松崎俊郎「都城出土の古代銭貨（１）」『向日市センター年報　都城13』平成12年度　2001年　に詳しい。
13）中島皆夫「右京第688次調査略報」『長岡京市センター年報』平成12年度　2002年
14）中島皆夫「乙訓地域における住まいと移動の歴史」『第10回京都府埋蔵文化財研究集会　発表資料集』2002年
15）小田桐　淳「長岡京跡右京第527次調査概要」『長岡京市報告書』第36冊　1997年
16）中島皆夫「右京第676次調査概報」『長岡京市センター年報』平成12年度　2002年
17）中島皆夫「長岡京跡右京第711次調査概要」『長岡京市報告書』第43冊　2002年

付表―7　報告書抄録

ふ り が な	ながおかきょうしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書　　名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
副 書 名	
シ リ ー ズ 名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第２７集
編 著 者 名	中島　皆夫
編 集 機 関	財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター
所　在　地	〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条１０－１

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡（右京第732次） 今里遺跡 乙訓寺	長岡京市今里二丁目101、102、102-2	26209	107 032 028	34度55分54秒	135度41分31秒	20020204 ～ 20020215	188m²	市道拡幅工事
長岡京跡（右京第740次） 今里遺跡	長岡京市今里二丁目232、232-5他	26209	107 032	34度55分54秒	135度41分29秒	20020204 ～ 20020215	748m²	市道拡幅工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡（右京第732次）	都城跡	長岡京期		土師器、須恵器	
今里遺跡	集落跡	鎌倉時代 時期不明	流路 柱穴	土師器、瓦器	
乙訓寺	寺院	江戸時代			
長岡京跡（右京第740次）	都城跡	長岡京期前後	土坑、流路斜面	土師器、須恵器、土馬 緡銭	風呂川旧斜面。 古代銭貨60枚の緡銭。
今里遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 平安時代 鎌倉時代～戦国時代 江戸時代	 落ち込み 土坑、溝 土坑、溝、井戸	弥生土器、石器 土師器、須恵器、埴輪 緑釉陶器、灰釉陶器 土師器、須恵器、瓦器 陶磁器、石器、金属器 土師器、陶磁器、石器 金属器	 囲い形埴輪。 今里城の堀か。 良好な土器群。

（1）調査地遠景（東から）

（2）調査地周辺（西から）

図版二

長岡京跡右京第732次調査

（1）調査地全景（北東から）

（2）調査地全景（南西から）

（1）西調査区中世から近世全景（西から）

（2）西調査区完掘状況全景（西から）

図版四

長岡京跡右京第740次調査

（1）東調査区完掘状況近景（東から）

（2）東調査区完掘状況全景（東から）

（3）東調査区完掘状況全景（西から）

（1）段差ＳＸ02礫出土状況（南から）

（2）土坑ＳＫ13埋土堆積状況（南西から）

（3）土坑ＳＸ07出土遺物と埋土（南から）

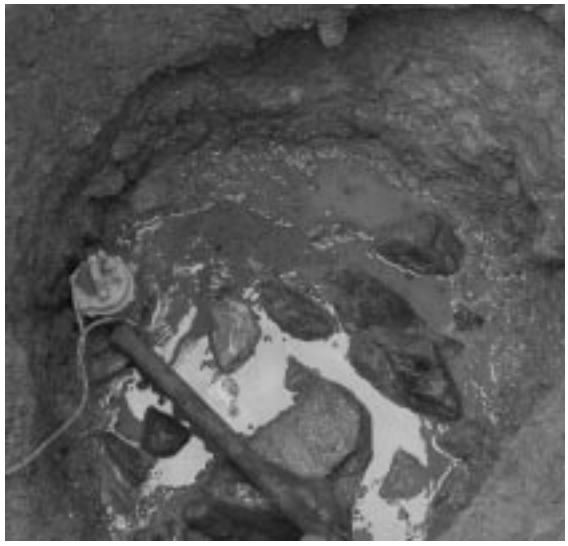
（4）土坑ＳＸ07遺物出土状況（南から）

（5）土坑ＳＸ07と柱穴状遺構Ｐ001（南から）

（6）溝ＳＤ17（西から）

長岡京跡右京第740次調査

（1）井戸ＳＥ15上半部堆積状況（南から）



（2）井戸ＳＥ15礫出土状況（南から）

（3）土坑ＳＫ06・11・溝ＳＤ19（西から）

（4）土坑ＳＫ06遺物・礫出土状況（北から）

（5）土坑ＳＫ11埋土堆積状況（南西から）

（6）土坑ＳＫ08・10・20（南西から）

（１）土坑ＳＸ30遺物・礫出土状況（南東から）

（２）流路ＳＤ24護岸・大型土坑（南から）

（３）流路ＳＤ24護岸検出状況（南西から）

図版八

（１）土坑ＳＫ27完掘状況（東から）

（２）土坑ＳＫ27埋土堆積状況（東から）

（３）土坑ＳＫ27緡銭出土状況（南東から）

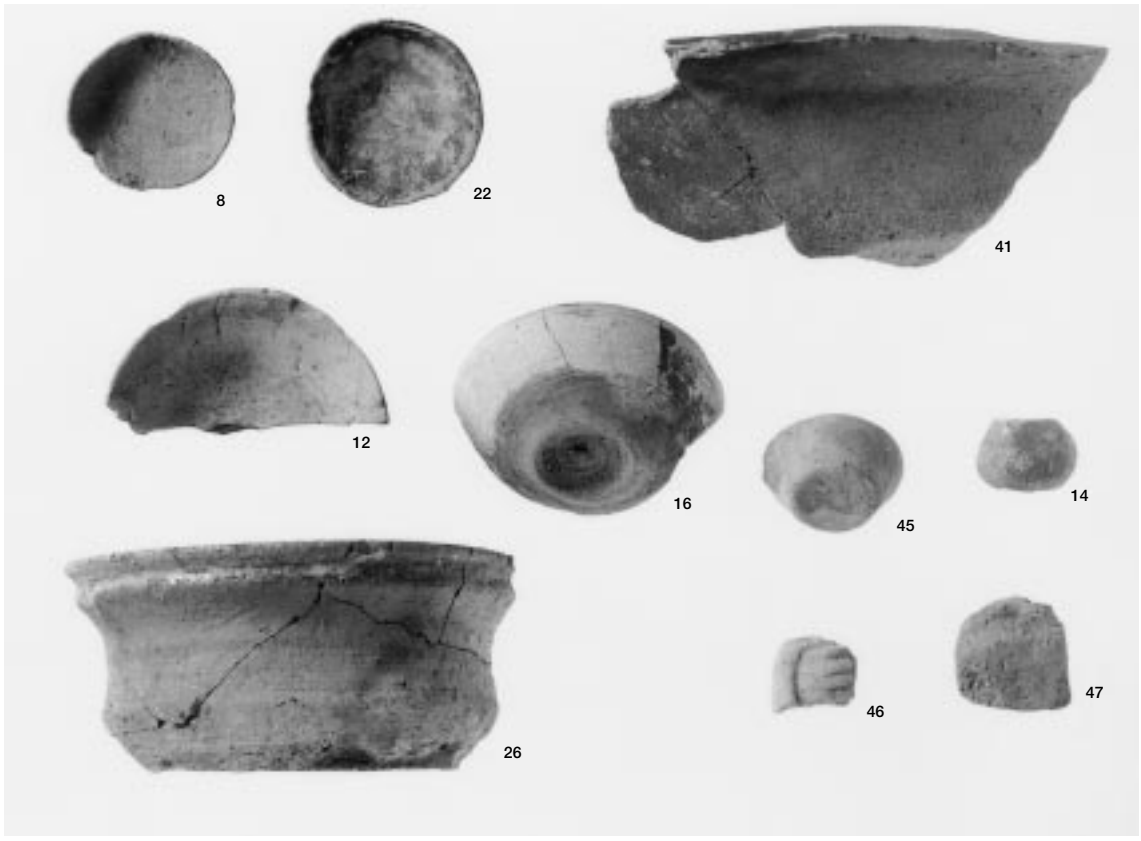
（４）土坑ＳＫ27緡銭出土状況（南から）

（１）落ち込みＳＸ26遺物出土状況（東から）

（２）流路ＳＤ24湧水坑（南東から）

長岡京跡右京第740次調査

（1）土坑ＳＸ07出土土器



（2）近世の出土土器類

流路ＳＤ24盛土出土土器

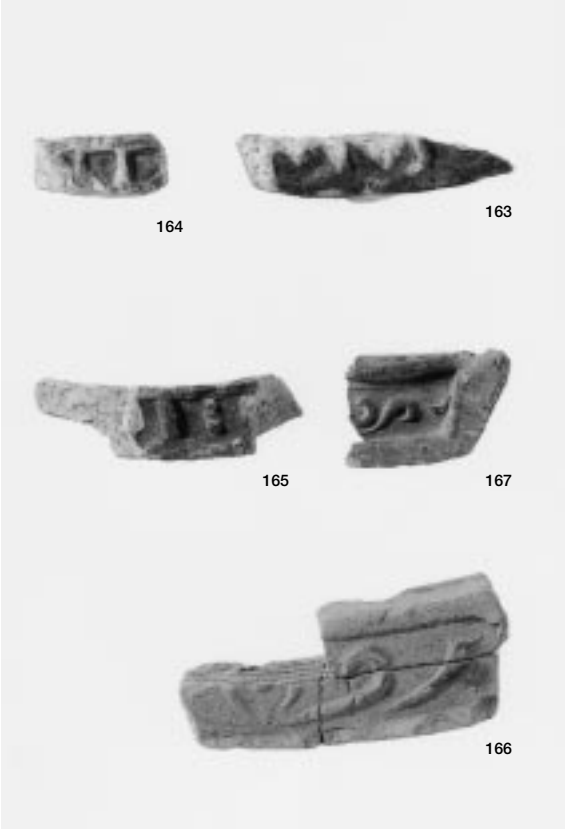
長岡京跡右京第740次調査

（１）流路ＳＤ24茶灰色土層出土土器

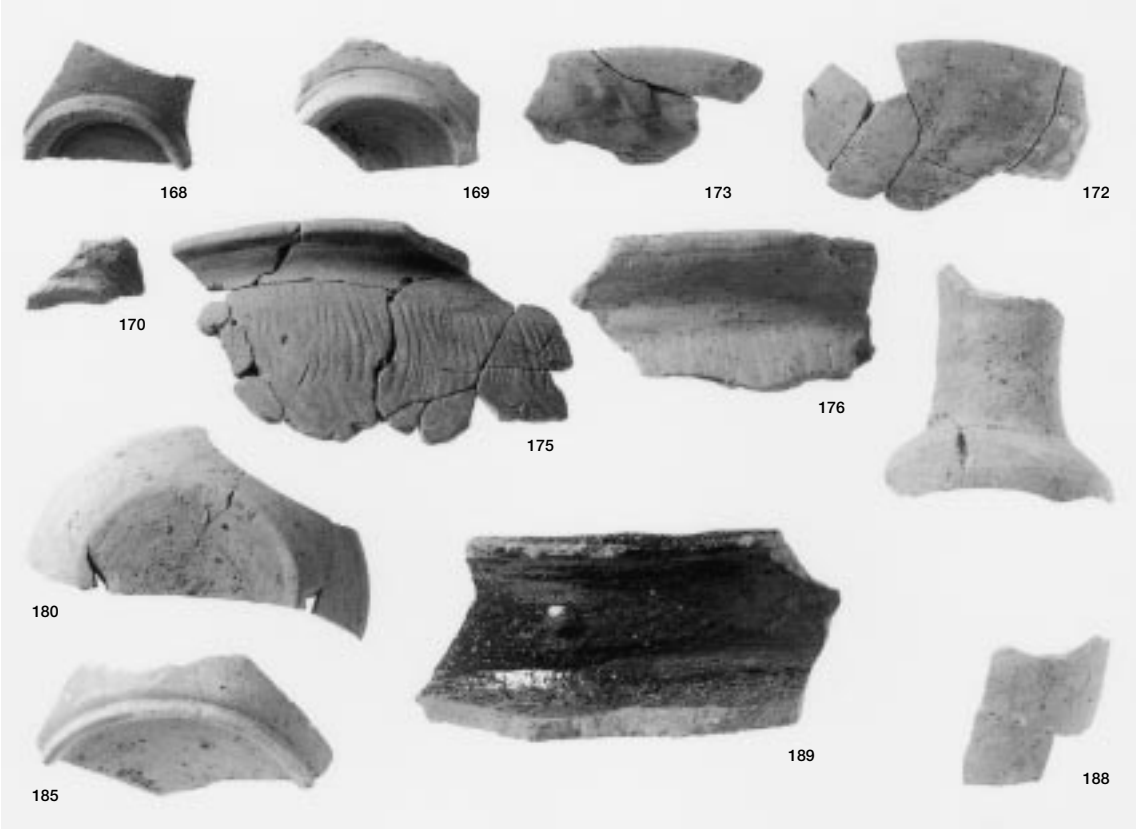
（２）柱穴Ｐ243出土土器

（1）土坑ＳＸ30出土土器

（2）土坑ＳＫ08出土土器

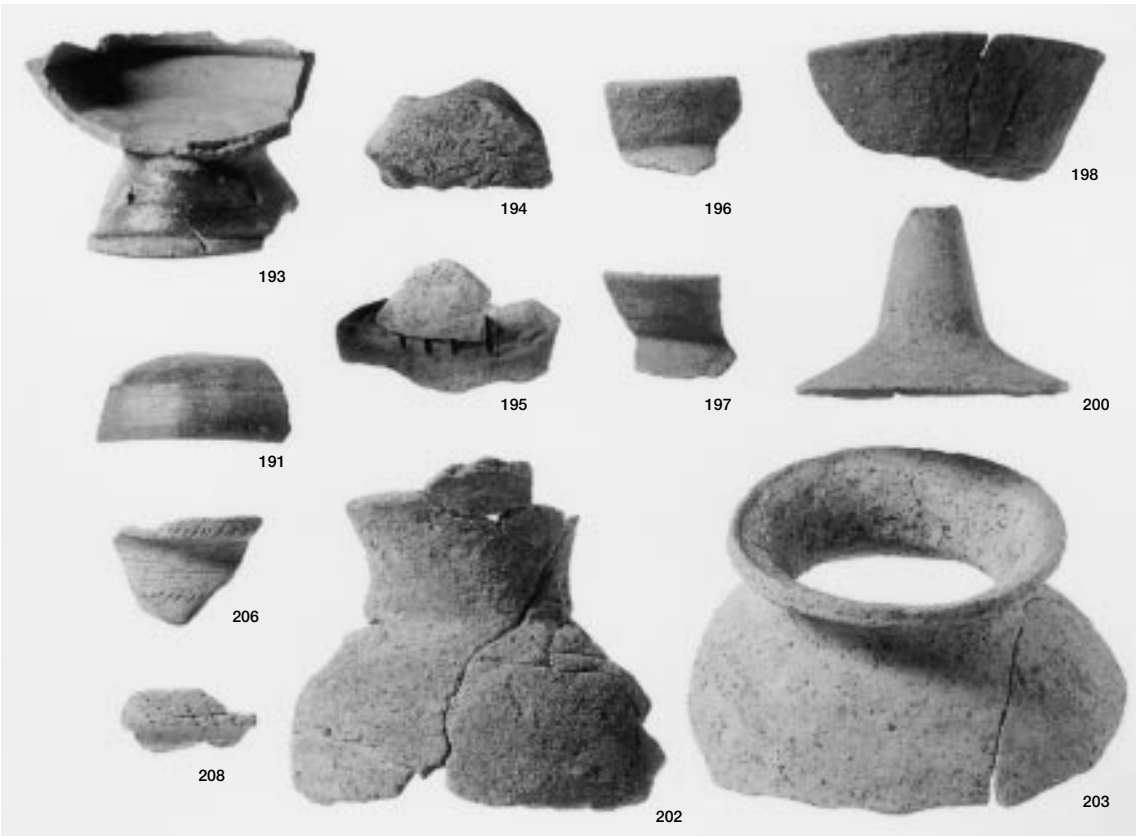


（3）中世の軒平瓦

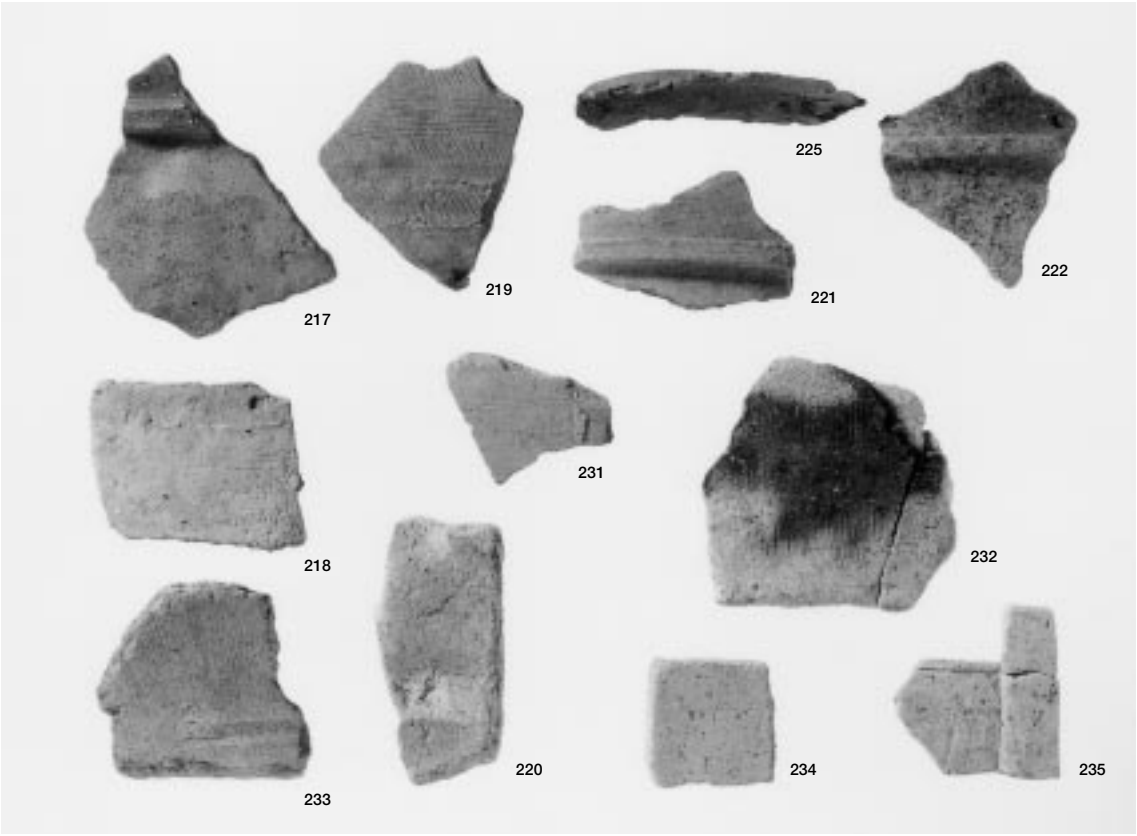


（4）長岡京期～平安時代の出土土器

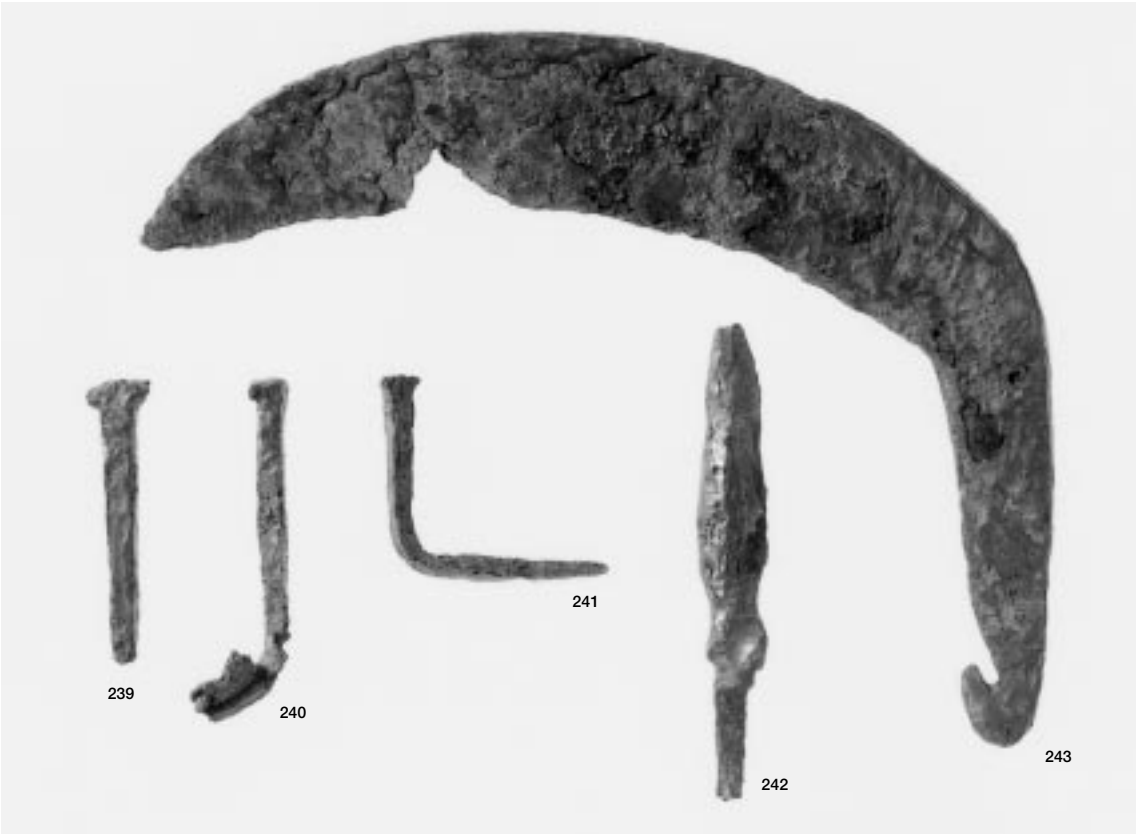
長岡京跡右京第740次調査



（1）弥生時代～古墳時代の出土土器



（2）埴輪

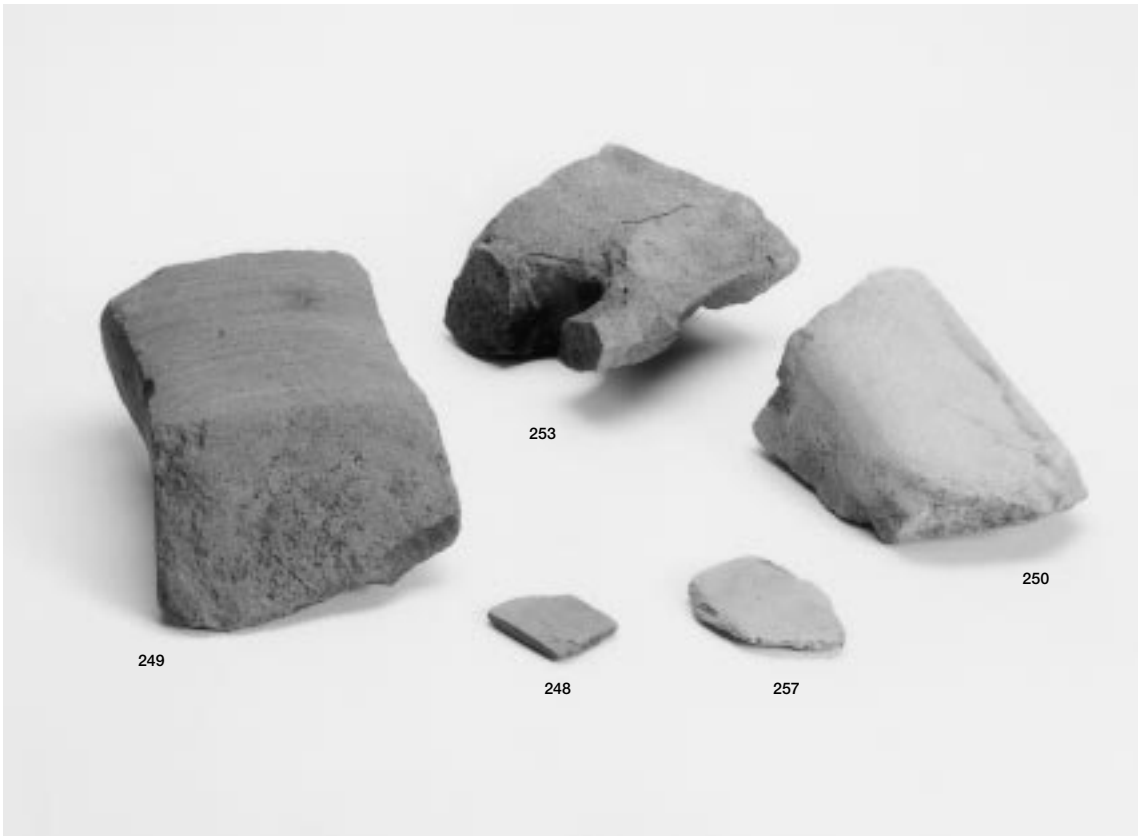


（1）鉄製品

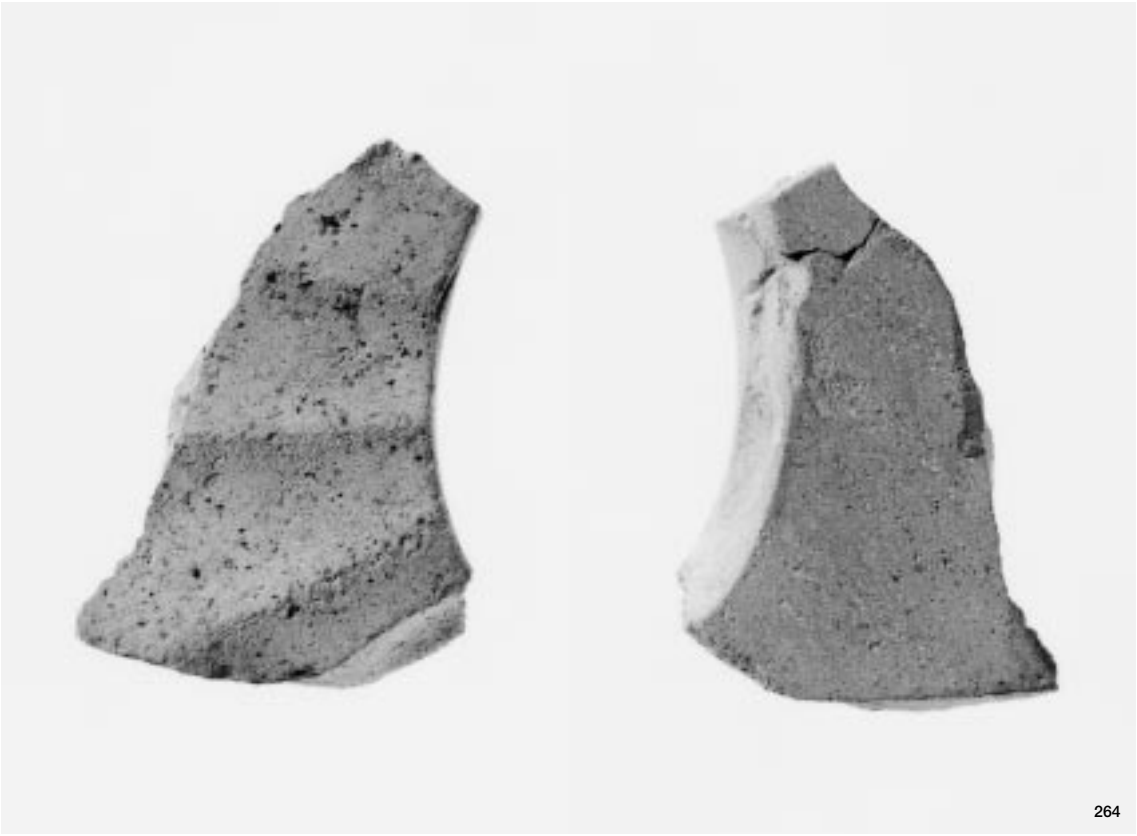
（2）緡銭

長岡京跡右京第740次調査

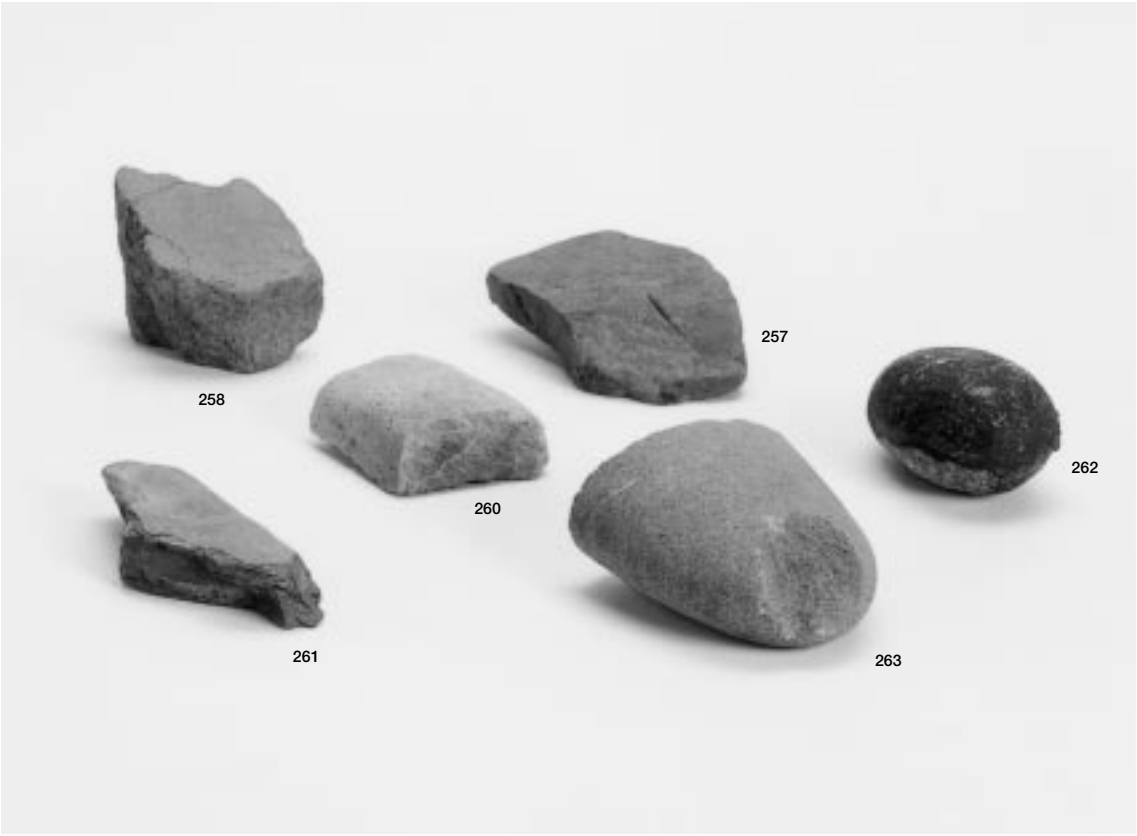
（1）石仏・五輪塔・石臼



（2）中近世の石製品



（1）車輪石



（2）中世以前の石製品